

義久公
義弘公
天正十二年

後
編 舊記雜錄 卷十五

1374 吉書

天筆和合樂地福皆圓滿

あら玉の年のはしめに筆とりてよろつのためから我そ書
とる

君か代の久しかるへきためしには神そうへけん住吉の
松

心たにまことの道にかなるはないのらすとも神や守
らむ

天正十二年甲申正月三日 修理大夫義久(花押)

威徳神殿

朝花 をく露に出るひかりのうつろへは
玉のかゝやく花とこそみれ 龍伯

1375 「新納氏藏書」

改年之御吉兆、重疊雖申上事舊候、猶更不可有際限候、
幸甚々、抑今年者、超例曆如意御満足之由、尤目出候、
乍惶御同前候、仍而五明二本奉表御祝儀候、倍永日中可
申上加候、佳事、恐惶頓首、

〔天正十二比カ〕
正月五日

(新納)
藤原忠堯(花押)

謹上 新納武藏守殿 人々御中

1376 「御文庫拾六番箱四卷中」 「義久公御譜中正文有之トアリ」

改年之御大慶千祥不易、雖申事舊候、尚更不可有盡期候、
萬歳々々、抑今春者、越多年御満足之段、此方以御同前
候、仍慶書并五明進覽候、聊表御祝儀計候、何様永日中
自他之御吉兆倍可申承候、佳事、恐々謹言、

〔天正十二年秋、御譜ニアリ〕
正月十一日

藤原義虎(花押)

謹上 伊集院右衛門大夫殿

(忠實)
平田左馬助殿

上井伊勢守殿

村田越前守殿

御宿所

薩摩守

「上包」
謹上 伊集院右衛門大夫殿

平田左馬助殿

上井伊勢守殿

藤原義虎

村田越前守殿

御宿所

1377 「御文庫拾六番箱四卷中」 「義久公御譜中正文有之トアリ」

改年之御大慶、重疊雖申事舊候、猶更不可有際限候、玆

重々、多幸々々、抑今春者、勝例年如意御満足奉察候、

任恒例、御佳書并五明式本 進上之候、寔表御祝儀計候、

猶永日中御吉兆可申上候、此旨以宜預御披露、佳事、恐

惶謹言、

「御譜」天正十二年ト朱カキ

正月十一日

藤原朝久(花押)

進上 伊集院右衛門大夫殿

(虫棟)

豊後守

「上包」
進上 伊集院右衛門大夫殿 藤原朝久

1378 「義久公御譜中」

「案文在之」

今歲御慶重疊、仍去冬高瀬表乘陳之刻、豊州衆開陣之儀
申理候、即雖有承引、于今高良山へ滞在候之哉、慮外至
極候、然者高良山座主蒲地方・黒木方連日内通之儀共候
喜、寔肝心之段、聊無忘却候、自然之時者、彼三家之事
茂、旁一致於被仰組者、倍向後無疎懷可申談之旨、本望
候、事々、恐々、

「朱カキ」天正十二年正月欽

秋月殿へ

1379 「義久公御譜中」

「正文有之」

今年御吉兆、多幸々々、仍遙不申通非本意候、然者豊州
衆歸陣之儀、去冬從高瀬境申理候之処、于今高良山へ滞
留候哉、不可然儀候、當者其表之事茂、龍・秋同懷於被
仰合者、永々別而可申承覚悟候、猶巨細者、期後便之時
候、恐々、

「朱カキ御譜中」
「天正十二年正月欽」

兩津江殿へ

1380

「義久公御譜中」

「上井伊勢守日帳有之」

上井伊勢守爲日向州之宰、居宮崎城者有年矣、天正十二年甲申二月十四日、善哉坊眞連房頼俊到于伊勢守之宅曰、備後方公方家昭義爲上使、布施治部少輔去年下向當國也、其人寄一紙之書持來、示之於伊勢守、其書明日獻于鹿兒島、其文曰、

1381

「在上井伊勢守日帳」

去年如仰出候、羽柴筑前守殿依馳走、當春御入浴必定たるへく候、然者御馳走之儀、弥被頼思召由也、先々年内春日之御局被差登也云々、

1382

「義久公御譜中」

天正十二年二月廿六日、自隈本與宇都之書簡、新納武藏守之書共三通持鹿兒島來、開緘誦之、其文曰、去十一日、龍造寺山城守隆信率大軍出國、同十三日、逼合志氏之城、攻責無止時、由是來月二日、義久率薩隅日軍衆、當以發

1383

「勝部兵右衛門開書」

肥前國島原合戰高信打死之事

一此に高來の郡可有馬修理亮久質聞彼曩祖、昔關東下總國に都を立、我身を平親王と自号せし將門の後胤なれハ、高家之人とて、中比迄ハ屋形号をも申受られけるか、次第ニ家衰へ、就中近年ハ龍造寺ニ挾られ、是を吳恨にやおもハれけん、薩廣の御旗下可參よし申入らる、龍造寺高信近國の侍を恣に執行に、誠ニ奇瑞の風情也、其比又筑前國人柳川の主蒲地民部太輔鎮並武勇賢き人なれハ、如何ニもして成懇志僞引入、後計候ハんことをおもふ、色々調方せられけれ共、案ニ不墮無參會して居られる、され共末子の幼者を人質に進ラせて、たかひに以使者補禮儀耳也、或時高信の母方の好ミに付て便り有、高信向母被申けるは、鎮並の事近國に人多しといへ共、別て無心底思進らするに、我ニ被隔心事不心得、無本意ことにおもふ也、鎮並と我と申合事ならハ、於近所恐るゝ人あらし、然ハ我等か家之繁昌不可過之と、誠ニ無底心候説佳られけれハ、母

上ハ実ニそと心得、柳川へ折て申通せ、或へ恨或へ佞、誓紙などして使ハされけれハ、鎮並更らハ於今非別心とて、能兵三百計相具して、肥前へこそ打越らる、高信聞之、三千計中途ニ相伏て中ニ取籠、悉く討果されける、自夫筑後の大名郡司肥前方を背き、或償ひ孤疑する者多カリケリ、蒲地武藏入道宗雪ハ田尻伯耆守親種の躰也、丹後守鑑種ハ蒲地鎮並母の舎弟也、上之蒲地左近太夫鑑廣・筑後の守護富饒左兵衛尉鎮連・草野將監鑑員の息鑑家も、尾山執行良觀・西牟田右馬助種家此等皆宗雪入道の躰也、就中丹後守鑑種ハ内々兵庫頭殿ニ被申入置たるに、此鎮並の儀ニよつて異恨を起し、背肥前無二の薩方とそ成ニける、依之高信天正十年の秋の末より、數千の軍兵を相催し、田尻ニ陳を付ントテ發向ノ由聞えケレハ、鑑種高尾の城ヲ居城トシテ、水俣ノ城ニハ田尻石見守、濱田の城ニハ田尻藏少輔、鴻ノ浦城ニハ田尻常陸入道了哲、堀切の城ヲハ番將ニシテ、已上五ヶ所ヲ堅固ニ持テソ相待ケル、龍造寺大軍ヲ催して田尻ニ陳ヲソ付ラレタリ、晝夜手行ヲ替て攻ルトイヘトモ、持防キケル間城難落、去レトモ長陣ノ間迷惑ニ及ヒ、薩摩ノ御加勢ヲソ乞レケル、筑後ハ

1384

隔國、其上肥後阿蘇家一等ニ未隨御下知、故ニ加勢難成、肥前之近邊を動したらハ、定て此陳引んスラン、出去ヲハ近辺ヲ動セトテ、薩廣勢高木へ押涉リ、智々和ノ城ヲ攻落ス、其ニモ未引サレハ、又如肥後押渡、比々良の城肥前サシケル間、是をも攻落ス、去レトモ勝代ヲ限ニ肥前方トテ境目稱敷振舞けり、猶モ未引シテ差延ル程ニ、明る年の暮迄ニ、籠城二年にして五百廿日ニ及けれハ、粮尽き餓死スルモノ多カリケリ、去ラハ薩廣へ申分、降參シテ當時の運ヲ開かんとて、薩廣へ注進被申けれハ、慰勸の至也、早速下城して當時の運ヲ可被開、必時節ヲ以可申合と返事仰ラレケレハ、不及力、自夫請和儀、降參して城ヲ肥前方へそワタシケル、田尻の鑑種ハ如肥前繰移、僅一所ヲ遣シケルトソ聞へケル、

『勝部兵右衛門開書』

一 去程に天正十一年癸未ノ夏ノ比ヨリ、有馬ノ久質高來へ番兵ヲ申請ラル、其故ハ龍造寺近辺ノ勢ヲ駈催シ、有馬ノ領内美江・島原・深江ノ城ヲ討取テ驕ルコト餘りなり、仍薩廣ノ加勢ヲ差遣サル、番手の大將ニハ新

納刑部太輔・川上左京亮ナト宗徒の勇士侍數十人、是外都合千騎計高來へ押渡ラル、安德ニハ久質ノ叔父左兵衛尉純成居レケル、薩广勢安德江在番勤ラル、掛リケル処ニ、六月廿三日ニ深江ノ城ニ打寄相働ク、新納刑部太輔垂の内ニ攻入相働キ無比類風情ナリ、刑部太輔即打死セラレケリ、彼刑部太輔ヲ打取賊ニノリ、安德ノ城ニ度々寄テ働キケル故ニ、有馬方一大事ト成ケレハ、同十二年甲申二月下旬ノ比ヨリ高來へ可渡ノ評定相究リ、太守ハ佐敷へ御座セハ、高來渡ノ大將ニハ中務太輔家久・息又七郎豊久・又四郎茂久・圖書頭忠長、侍大將ニハ川上上野守・平田美濃守・息左近將監・其子の新四郎・新納武藏守・息彌太右衛門・川上三河守・息左京亮・弟四郎兵衛・同助八郎・川上駿河守・鎌田出雲守・山田越前守・上原長門守・息右衛門尉・平田新左衛門・新納駿河守・鮫島又左衛門・市來玄蕃左衛門・稻留新介・大寺大炊介其外ヲトラス侍勇士百餘キ、以上其勢三千余キ、出水の米津より出船して高木へ到着ニケル、其外相良カ勢、志木・神津浦・巢本・大矢野相加リ、久質勢都合五千余キト申ケル、今天草方一人虚病シテ不參、世上ノ体ヲ伺レケルカト

ソ申ケル、去程ニ薩广ノ勢ハ赤江ニ着、深江ヲ差通り安德へ一宿シテ、總テ嶋原へ押寄陳取テ、降參スヘキ由商ハセラルノ処ニ、龍造寺聞之、薩广陳無勢ノよしきこゆるそ、倡や打越攻滅逆打出ラル、龍造寺高信・嫡子民部太輔政家・二男後藤左衛門尉家信・三男多久三郎信鎮・四男江上四郎家種主・龍造寺左近大夫將監・同七郎左衛門尉南関主・同越前守・同式部少輔・三根隼人正・佐賀出羽守・藤津權頭・彼杵安藝守・鍋島加賀守・江島長門守・豊島二郎左衛門・守一軒法師・大村・松浦・西ノ浦の者共、筑後・筑前の大名近國ノ郡司侍共ヲ駆催シ、同十二年甲申三月廿四日ノ辰ノ刻計ニ、其勢四万余キ薩广陳ニ寄來ル、見之、如此ノ大勢ニ、此無勢ニテ懸合得勝利事思慮の外也、然れ共海路ヲ隔來可遁方ハなし、大將已下ニ至ル迄死ヲ一方ニ思ヒ切、川田駿河守義朗吐氣ノ役者タリシカ、大將ノ前ニ參リ、師ヲスヘキ者ハ勢の多少ニ不依、兵規曰、周武王以二万二千五百人紂の勝億万、魏以五万秦破五十万、漢以三万楚伐八万、我朝ニ茂楠木判官ハ僅ニ以一千余キ、関東の八十万騎ノ勢ヲ防ク、皆其例多し、今日敵の軍氣ヲ見ルニ必慈ノ吉例ナルヘシ、敵ノ大將可亡瑞相有

と申されけれハ、各今日を限とそ勇敢ル、太將ヲ始として侍以下皆一同ニ打出ツ、川田駿河守三度吐氣声ヲ上ケラレケレハ、新納武藏守ハ霞ノ策ヲ打持て、輪々と圓相廻して、面ヲ不振懸れける、慈無勢成といへとも、四五千騎の者共力真中ニ打入、四方八方ニ相當リ懸合懸交リ、死生ヲ不知戰ヒケレハ、サスカ敵猛勢ナレトモ大將運ヤカタフキケン、早引崩シテ敗軍ス、去レトモ大軍成ハ、返合ノ執ニ差忍て戰ヒケル、二番ノ折目ニハ圖書頭忠長さし忍て戰給ヘハ、鎌田出雲守・上原長門守・稻留新介・二階堂帶刀ナト殊成働きセラレケル、弓手の方見てあれハ、山田越前守合戰す、飢肥ノ住人ニ上原彦五郎・宮原越中・竹内備前介無比類分捕セラレケリ、於此新納駿河守・久永九郎左衛門打死ス、又四郎茂久其時十七歳、少も不臆翔入、一時計戰ひ、面ニ浅手を負、肩より下りあけにそみて引へ給ふ、其有様由々敷そ見ヘニける、中務太輔家久も父子馬を翔入、前後左右ニ相當り合戦比類なかりけり、又七郎豊久十三歳ニして合戦遂るゝ事、抜群にこそ申ける、大軍敗軍と成れハ、争か軍倍調へきはや、引立てそ崩れ行、川上左京亮能き敵もかなと見処ニ、八人

昇の輿にのり、百騎計にて取圍ミ、静々とそ退れける、左京亮イカサマ是ハ大將ナラン、續ケ兵トテ透間モなく懸りけり、慈の兵我劣らしとハセつゝく、敵モ暫シカ程爰ヲ専度と戰シカ、或は手負、或ハ落失セ、去レトモ究竟の武者トヲボシキ者三十騎計、大將ヲ捨テかねて、相忍て白眼合、半時カ程勝負難決ケルカ、左京亮馳掛テ輿ノ中へ鏝ヲ撞入ラル、築瀬兵部少輔不劣ト撞入ケル、従夫前後左右ニ相交て、不知死生たゞきあひ、おもひくニ太刀打分捕セラレケル、輿ノ中へモ鏝數餘ニシテ撞入ケレトモ、左京亮一番タルカ故、此敵左京亮ニソ付ニケル、高信見まします事ハ、討れ玉ひて後ニ此トソ知レケル、守一軒と云法師武者ヲ、曾木權介・黒木七郎兵衛二人シテコソ討ニケル、サレトモ黒木某取ニけり、かゝりける処、清氣成小姓の者唯一人、中務殿ハ何所ニ在座ソトテ多ノ人ヲ押分く尋ケル、慈ノ兵トモ定て是ハ家久ノ小姓ニテソ有ラント思ヒシニ、思フ様ニ参り合セメ付テソ切タリケリ、家久ノ郎等落合テ、即そこに打留ける、家久手を負玉へ共、左ホトナクシテ、アツハレ運ノ大將ヤトソ申ケリ、彼ノ若者傳聞ニ高信の小姓也、主の敵を取ント思ヒ入タ

ル心サシ天晴剛成者ヤ、やさしきトモアハレトモたく
ひ少ク覚ヘタリ、嶋原よりも切て出んとしけれとも、
彼城の押ニハ川上上野守・平田美濃守、相良加勢嶋の
人ニ相加ヘ差入置レハ、心ハ猛ク思ヘトモ烈ク矢軍シ
タル計也、濱の手も嶋原取合とせしがとも、慈の兵ニ
三百騎面も不振切かゝる、シハシか程ハ戦ひしか、遂
ニハ切崩されて敗北す、慈ニ逆瀬川奉膳兵衛・鹿兒嶋
の住人四本主税助など數軍^(軍)打死したりけり、扱高信討
れ給ひ、如此成行ハ唯一方に落行を、美江ノ城麓迄追
打ニ切伏たるハ華の散たることく也、吾先ニ遁んとて
人馬道ヲ去あへす、せん方なきの餘りニヤ、山野に遁迷
ひ、幸代表ニ打出、親をワスレ子ヲ忘レ、兄弟親族不
辨、我もくんと落行、海ニ打入船取ニ漕出し、竹嶋
さして渡りけり、乗後れし者共ハ幸代ニ遁入、幸代方
ハ己カ館ヲ落出で、温泉山ニ入と聞えケレハ、若キ者
トモ打留んとて馳ツ、ク、城の麓ニ追ツメテ手ヲ碎キ
戦ケル、城ノ者トモ出合テ今ヲ限とフセキ戦ヒケル間、
上原勘解由左衛門・八代の住人養田左衛門打死す、
宮原左近將監痛手負テ退キニケル、其後三日過ヌレハ、
幸代方居城を薩广ヘワタシケリ、幸代トモニ六ヶ所皆

有馬ヘコソ遣ハサル、久賀・高來の郡中不殘領分シテ、
薩广御恩不淺コソ申サレケル、去程ニ其^{「本マ」}ニ大村・平
戸・西浦・三毛・小代・和仁・辺原方ニを方便り付、
同五月上旬ニ引陳して大將已下佐敷ヘこそ被參ける、
高信の頸をは佐敷に於て義久實檢有テ、後ニハ高瀬の
ことくに上セラル、此度滅切備へたる敵の頸八百余、
其外切捨たる頸共ハ幾千といふかすも知れざる也、仍
而敵慈トモニ戦亡の爲ニとて、福昌寺代賢大和尚日隅
薩肥後表八代葦北の僧迄も相催し、一千余の僧侶を誘
引シテ嶋原ヘ打越し、三十餘尋の高卒都婆を作立、御
經讀誦シ御吊、見聞聽衆の人とも成佛得脱無疑と、上
下万民ニ至迄難有こそ覚ヘケル、

1385

「日向記」

一天正十一年夏ノ頃ヨリ、有馬殿ヨリ番衆ヲ被申請間、
大口ノ地頭新納武藏守嫡男刑部大夫・河上左京ヲ初ト
シテ宗徒ノ者共押渡ケレハ、安德殿モ年頃ナレハ、有
馬殿ヘ差出タリ、去共深江・嶋原ナト申ハ、未肥前方
ニテコタヘリ、依之則薩广衆安德ヘ番ヲナシ、六月十
三日、新納刑部太輔深江ノ城ニ掛、餘深入シテ討死ス

ル故引退云、

▽天正拾二年正月

一 一日、如恒例規式也、奈古八幡へ參詣仕候、衆中各同心也、參錢百疋也、下向申候、如舊例鎧着始候、肴等如早晚、各へ御酒吞せ候、其後私内へ三献、安田美作守包丁仕候、鯛之蓬菜、如賀例前にて仕候、從夫三献如常、諸篇舊例之俣也、衆中各被來候、城内之衆計ニ三献參會候、其餘へ肴一種にて御酒參會申候、各より銘々ニ御酒被持せ候、一々參會候、各も酌にて候、又拙者も各へ酌仕候也、此日拙者悴者へも舊例之俣銘々ニ酌仕候、此夜鎌田源左衛門尉殿へ礼申候、御酒持せ候、会尺も如例年、此朝任恒例、發句仕候、愚齡四十を祝候て、

春のくる道もまとハぬ今年かな

二 二日、曉よりくさ氣にて候、依夫、此日吉書又ハ寺家などへ早晚御礼申候へ共無其儀候、海江田より悴者なと來候、各御酒持參申候也、

一 三日、是もくさ氣不醒候て然と罷居候、此日も從紫波洲崎より各來候、銘々御酒持參仕候也、諸篇祝礼之規

式如舊例、毘沙門へ漸此日參候、

一 四日、諸寺家如佳例御礼承候、御酒・御茶など相應ニ被持せ候、滿願寺・竹筵衆同座ニ會尺仕候、預候御酒御酌被成候間、聽而拙者も其分候、阿闍梨達十人計拙者相伴にて會尺申候、供僧衆・御同宿衆などへハ別座にて會尺申、已後通之御酒參會候也、百性等來候事茂如恒例、滿願寺へ此日御礼ニ參候、御酒持せ候、御會尺如常、諸寺家へハ同名右衛門尉(兼忠)を代として進入候、

二 二日・三日くさ氣之故如此候、城内衆中へ礼申候也、

一 五日、善哉坊同心ニ所々山伏衆礼儀承候、銘々相應ニ御酒預候、三献參會候也、互ニ酌共申候、佐土原より衆中二三人被來候、皆御酒持せ也、從加江田諸寺家被來候、相應ニ御酒・茶など預候、皆三献參會候也、此日海江田へ罷越候、先木花寺へ參候て社參之文度申候、非時振舞被成、種々會尺也、夫過候て御諫方へ參詣申候、御弊頂戴申候、從夫御伊勢へ參宮申候、同前大宮司処にてめし振舞候、種々會尺也、彼処にて精進上候也、此夜深候間、内山へ留候也、

一 六日、朝食如恒、各御酒持參之衆共候也、此日(上井兼兼)恭安へ參候、御酒進入申候、聽而御節供如恒例、夜深候迄種

御會尺酒宴也、中城へも此夜御礼申候、諸事舊例之
便也、

一七日、早朝御崎觀音へ參候、恭安も御同心也、從夫御
崎寺へ御礼申候、三献如常、從夫種々會尺也、此日中
城にて如恒例御節供也、種々御會尺也、それ過候て圓
福寺へ御礼申候、御酒持せ候也、舊例之會尺也、大口
より梁瀬殿御酒持せ被來候、此座にて見參申候也、彼
是殊之外酒宴也、此晚祖三寺へ礼申候、御酒持せ候、
種々會尺也、此夜内山へ留候、

一八日、早旦打立、鹿兒島へ祇候申候、田野小宿にて破
籠など賞翫申候刻、宮崎衆中少々被來候、從夫同道仕、
佐理川へ留候、

一九日、早朝打立、敷祢へ拙者へ着候、下々なとハ漸佳
例川・新富ニ留候、此夜敷祢入道殿へ參候、御酒持せ
候也、めし振舞被成、種々會尺也、

一十日、(敷祢留候)休世齋にて朝めし振舞也、向嶋より迎舟來候間、
馳而出船仕候、拙者領知白濱へ着船候て衆中などの舟
相待候、然処馳而跡舟も來候、白濱にて種々會尺也、此
晚鹿兒嶋へ着船候、夜深候間、何方へも不申入候也、△
一十一日、早朝鎌田刑部左衛門尉殿より使にて、參候由

承候、此方よりも使者にて申入、殿中江罷出候也、別

而御三献御寄合被成候する儀ニ候へ共、とても御吉書

之御三献ニ參候間、其分之由候て、如早晚御三献ニ參

候、御座御次忠棟・親貞・本田刑部少輔、客居忠長・

(平田)光宗・拙者也、筆者本形也、如恒例御判各頂戴申候、

寄合中・御右筆ニ百疋宛被下候也、此後拙者舊例之御

太刀持參仕候、百疋也、馳而御吉書之腕飯長吉より參

候、御座、御次平田濃州・永吉地頭本田紀伊守也、客居

忠長・拙者也、數篇御肴ニ而御酒宴也、一王唄共申候

也、宮崎衆中御酒進上也、▽御樽五荷・御肴種々也、

彼御酒拙者御酌にて上候、衆中へ各召出之御酒被下候

也、祇候衆へも拙者酌にて召出也、△此日御鑑めし始

候、御大般若如恒例、御寄合中各へ御礼申候、▽皆々

三献也、拙者御酒持せ申候、衆中も樽一荷宛持せられ

候、同心申候衆中へも各御酌共被成候也、此晚中書公

御參にて候間、御宿へ參候、三献御寄合也、拙者持參

之御酒御酌申候、馳而又御酌給候、衆中も樽一荷進入

候、同前ニ御賞翫共也、

一十二日、出仕如常、中書公御指出被成、御太刀御持參
候、御酒等如舊例御進上也、中書公奥へ御參之時分拙

者も可參之由候間、御供申候て參候、納戸伊地知(重則)右京

亮・鎌田(政左)加賀守取成也、御料様御指出也、中書へ御三

献御寄合也、中書御次ニ拙者も參候て御三献被下候也、

中書御持參之御酒御酌御申候、即又御料様御酌にて中

書御盃御給也、從夫女子衆へ中書銘ニ御酌被成候、

拙者も持參之御酒御酌申候、又躰而御酌にて御盃頂戴

申候、一之大へ御酌申、女子衆皆々へ酌申候、此後一

之大中書へ御酌御申候、我々も被下候也、從夫中書御

供申退出候、此日福昌寺へ御礼申候、御酒・中紙一束

持せ候也、代賢和尚懸御目候、即扇子一本被下候、其

後御會尺如舊例、談儀所へ參候、御酒持せ候、三献御

寄合也、持參之御酒御酌申候、躰而我等ニ御酌被成候、

種々之儀共也、鎌田刑部左衛門尉殿へ礼申候、御酒持

せ候、衆中も同前ニ御酒持せられ候、種々會尺也、女

中見參共候て、酌なと候て會尺被成候、御使衆各へ御

礼申候、銘々ニ御酒持せ候、當処衆拙宿へ各御出也、

何れも御酒預候也、

一十三日、出仕如常、忠棟へ御光儀也、御座躰、御次川

(忠實)上殿・(忠實)圖書頭殿・平田濃州・亭主、客居中書公・本田

(親貞)野州・拙者也、御三献等如恒例、終日御會尺、京都よ

り下候奥之山左近將監被なと仕候、又狂言舞なと仕、

種々御酒宴也、先御三献之時、亭主御太刀持參也、又

忠棟御酌之時、太刀進上候、町田出羽守殿被上候、又

御座中ニ高山衆中子共兩三人被懸御目候、各太刀進上

也、種々御會尺にて、夜入候て御歸館被成、△

一十四日、▽出仕如常、△此朝御鎧之餅各被下候也、御假

屋へ參候、川上日向守取成也、御前にて御三献被下候、

▽持參之御酒御酌上候、躰而御酌被下候也、此日も各

へ御礼共申候、

一十五日、出仕如常、肝付彈正忠殿(兼忠)・本田刑部少輔殿な

とへ礼申候、種々會尺共也、不断光院へ御礼申候、御

酒・御茶進入申候、種々御會尺共也、新納武州同心仕

候、此晚本田殿御椀飯也、如恒例、

一十六日、出仕如常、此日も御使衆なとへ御礼申候、爰

彼にて種々會尺共被成候、沈醉無申計候、

一十七日、出仕如恒、圖書頭殿南林寺へ御參之由候間、

御供申候、住持留守にて候、伯圍様御影奉拜候、御

酒持せ候也、從夫與國寺へ參候、御酒持せ候、(忠實)麟臺御

供申候也、種々御會尺被成候、池邊にて御酒なと參

候、從夫圖書頭殿御宿へ參候、拙者も御酒持せ申候、

終日御閑談共也、御茶湯會尺被成候、八木越後守・拙者也、御手前忠長被成候、△

一十八日、▽出仕如恒、△拙者加判役之儀、難成之通度、

申上候、就中去年病中ニ頻ニ申上候、併御納得無之候、

菟角拙者身上ニ不相應之事ニ候之間、是非以被指置候

様ニ、御寄合中頼存之由申候、鎌田刑部左衛門尉殿・

税所新介殿使頼申候也、▽此日平田濃州へ御光儀也、

先御三献如常、濃州御太刀持參也、御座躰 上様中座

ニ御座候、客居忠長・意外・親貞・拙者、主居川上殿

・忠棟・光宗也、終日御酒宴也、御點心之時も御座躰

同前、意外へ退出候也、御乱舞等如常、八城衆召出之

御酒、五六人罷出被下候也、諸篇様子如常、△

一十九日、出仕如常、桃山玄佐御指出被成、此日談合衆

不被着揃候へ共、先々御談合肝要之由候間、被着合候

地頭へ、御談合条數共被承候、▽拙宿へ納戸衆礼儀

共候、御酒など持せられ候也、此晚忠棟御館へ川上殿

・拙者茶湯會尺被成候、如恒めし振舞被成、手洗水之

間ニ秋岩か筆之菓子之繪被掛候、臺天目など隨分秘藏

被出候、種々之儀共也、御茶宇治不申及候、配膳御息

増喜殿也、△

一廿日、▽出仕如常、△鎌田刑部左衛門尉殿を以▽被

仰出候、去年以來村田殿(頼平)を始△失衆餘多候、然者阿多

源太・平野新左衛門事へ、頼娃左馬助上洛之時分被仰

付召下、於頼娃生害させなされ候、彼是御談合衆被揃

候間、衆口を以失衆召直候する哉、又如何之御噓たる

へ候哉、可被 聞召之由也、▽此日拙宿へ珠長被來

候、座話之次、來廿三夜月待候之由共申候、當者一折

興行可然之由共各被仰条、珠へ發句所望申候、即

春あさミ月にいとへぬ霞かな、と申され候、

纏而拙者脇可然之由各被仰候候、

香をのミさそへ梅の下風、と申候、新納武州有合な

され候間、第三之事可然由申候へへ、

鶯の來るる朝戸を明置て、となされ候、如此共戲候

て酒宴也、此晚鎌田刑部左衛門尉殿風呂焼せられ可參

之由候間、參し候て薄暮ニ罷歸候、種々之振舞被成候、

一廿一日、出仕如常、此朝出仕歸ニ、拙宿へ各申請候、

座躰主居忠長公・親貞・白濱防州・拙者・鎌刑部・八

木越後守、客居忠棟・鎌田雲州・税新・本刑・長谷場

筑後守也、種々會尺共申候也、此日金吾公御宿へ參候、

御酒持せ候、御酌仕候へへ、纏而又御酌にて御酒被下

候、諸所地頭・一所衆着合にて御礼共承候、并酒肴等預候、

一廿二日、菱刈衆御雜掌也、都於郡・福嶋よりも御雜掌進上也、銘々ニ御酒參候、地頭衆中も御前ニ被罷出候て、御酒被給候也、

一廿三日、出仕如常、終日於殿中御談合也、諸所地頭被參候、於護所明後日御連歌之一順・再篇也、

一廿四日、出仕如常、新納殿(忠元)・北郷殿(時久)・桃山殿など御參也、御太刀各御持參也、此朝又四郎殿拙宿へ入御也、

御酒被下候、御三献上候也、此日本田下野守殿へ・太守様御光儀也、御座躰中座ニ・太守様御座候、主居忠長・忠棟・亭主也、客居金吾公・樺山玄佐・拙者也、

終月御酒宴也、乱舞等如常、幸若舞等申候、亥刻時分御歸殿也、

一廿五日、御月次御連歌也、御座躰主居・太守様、御次川上殿・忠長・珠長・拙者・税新也、客居金吾公・玄佐・新納武州・宗運・喜入大炊助(久正)・可丹也(若水)、御調御代

官被仕候也、種々之儀共也、北郷殿拙宿へ礼被成候、百足預候、

一廿六日、出仕如常、吉利繪州(忠徳)其外日州外城衆、餘多指

出被成候、此日北郷殿へ忠長御同前ニ御礼申候、於殿中御談合也、各罷出候、此晚吉田作州(備也)へ忠棟・拙者茶湯会尺也、種々之儀共也、東坡か筆之繪など被掛候、手前作州被成候也、

一廿七日、一番鳥時分よりくさ出合候て、出仕不仕候、

此日も吉利殿・伊集院野州など御礼共承候、各御酒預候也、養性氣之条、各々へ不罷出候、此日愛宕山下之坊より使僧預候、書狀之趣、日向之國從先く禪方候、

然間吾々事も從爰禪方ニ被成度之由也、御札・板物一預候也、先く書狀之儀へ請取候、日向衆各禪方ニ被成

度之由者如何候する哉、其故者、去年長床坊同宿、日州各へも御礼等銘々ニ被賦候、菟角御談合之上たるへく候通、使僧へ申候也、

一廿八日、出仕如常、從有馬殿年頭之使書進上候、吾々へも太刀并慶書預候也、此日吉利繪州・上原長州(尚近)・伊集院野州右三人之宿へ、礼申候也、

一廿九日、出仕如常、新納殿・北郷殿などへ於殿中御寄合也、此朝拙宿にて各寄合申候、衆比志嶋殿・伊野州・鎌田筑州・吉田作州・猿渡越州(備也)・稻富新介殿(長徳)・平田

豊前守殿(宗也)、此衆朝食振舞候、閑談共被成候、酒宴也、

此日忠長御宿之風呂焼せられ候、可參候て慰申候、晩氣者御茶湯也、吉作州同心申候、類ニ御所望候間、稽故にと申候て拙者手前にて候、かたはらいたき事共也、

貳月

一朔日、出仕如常、各へ御礼申候、取分本田弥六殿祝儀年内被成候、左様之刻無沙汰申候とて御酒持せ參候、

野州も弥六殿も留守にて候、女中指出被成、持せ候御酒賞翫候、拙者へも種々御会尺也、△

一二日、出仕如常、諸所へ御出勢之書狀共被遣候、御談

合衆も、有馬表御出勢之儀定候て、各御暇被申候、此

朝鎌刑(鎌田政忠)・税新(税所篤和)にて申上候、一兩年以來度々加判役之儀

御侘申候、猶々一圓ニ罷成間敷由申上候、巨細者不及

書載候、御返事、度々役之御侘申上候、尤聞召らるゝ

由被仰候すれ共、諸役人中之覚と申、又ハ不輕役之儀

ニ候間、御頼之由候、菟角御返事ハ追而被仰出候する

由也、此日鎌刑ハ此度御談合之趣、(義私)忠平様へ被仰越候

御使ニ被罷行候間、税新一人にて御寄合中へ御内儀申

候、趣、追而御返事可被仰出由候上者、菟角申上ニ不

及候、併日州之儀別而被仰付候、是又御出勢前之事候

間、是非共ニ御指置被成候て肝要候由申候処ニ、税新

・伊地知伯州(重秀)を以被仰出候、加判役之事度々御侘申上候、尤指置被成由可被仰候へとも、更ニ不輕候、如何様ニ被聞召候ても無御納得候、今分に御奉公御憑之由也、▽次ニ者永吉上谷之門之事、先年日州へ罷移候

刻、一作被下之由候キ、于今拙者格護申候、如何々お

ほしめされ候、其故ハ、又々御侘をも申、何たるてた

てにても、しかと被下と候て格護申候へハこそ可然候

へ、たゞに物なしに于今格護申候事、不審ニ被思召候、

若者諸人も左様にや存候らん、直ニ被仰聞由也、

一三日、出仕如常、昨日之御返事申上候、猶々役之事御

頼之由忝令存候、併拙者生得不才簡に共候故、諸篇公

界等不如意迄候、然者拙身躰ハ不苦候へ共、必竟御爲

ニ不罷成事候、是非共ニ御措被成候て可忝之由申候、

次ニ上谷之事蒙仰候、是者不紛先年日向へ罷移候御、

一作ニ被下置候、然ニ打續役之御侘共申上候条、鎌刑

まで度々申理候、加判役を仕候ハ、必彼上谷にて候

ハす共、當所あたりニ馬銅処候ハ、折々祗候罷成

間敷候、又役之事御措被成候ハ、少も無辭退彼地之

事上候する程ニ、御侘落着之間ハ何と哉らんニ格護申

候すると彼方へ届候て、于今如此候、然者私にて又私

之儀ニあらざる狀之由申候也、上谷之御返事ハ菟角候

ハテ、役之儀ハ猶々御憑之由也、此日税新へ御寄合中

御座候、吾々も同前候、座躰主居忠長・拙者・伊地

知備前守・税新・八木越後守、客居忠棟・親貞・上原

長門守・有川長門守・長谷場筑後守・和田玄番助、彼

衆也、(河野通貞)一王なと參候て終日酒宴也、

一四日、出仕如常、申上候、重々役之儀御憑之由と候処、

又々申上候事慮外千万候、併私之不用ニあらす候、

上様御爲ニ罷成ましく存候間、是非共ニ被聞召分候て

可忝候、上谷之事、一兩年私格護申候事、于今迷惑至

極候、愚存ハ前ニ申分候、彼地之事爰より返進申候、早

く誰人へも被仰付候て可目出由申候也、此御返事にも、

愚存ハ具被聞召候、併何ケ度申上候共、同御返事たる

へき由也、此晚税新・本田信濃守など拙宿にて寄合候、

閑談共也、税新へ御凭之由共如何之由尋候へ、菟角

聞召分さうにも不聞得候、何ケ度も同前之御返事之由

也、然間、此夜鎌田源左衛門尉を以談儀所へ申候、拙

身躰御凭、數ケ度申入候、于今不聞召分候、當者談儀

如頼存候、明朝拙者參候て御供申候する、御參上被成

御凭御申取候て可預由、頼存候也、何と様にも拙者次

第之由承候也、

一五日、早朝談儀処へ參候て、愚意共委申候て、臆而御

供申、出仕申候、御使兩人まで談儀処理共被仰候する

と候処ニ、税新・伊伯御前より御用と候て被參候、臆

而兩人にて拙者へ被仰出候、趣者、昨日役之儀猶々御

憑之由被仰候、其上ニ又々上意被成由也、頻ニ役之儀

深々數御凭之存分共候哉、尤被思召候、定而日向諸地

頭之内、拙者申候儀違背之衆も多々可有候、其上役人

之事ハ謗等も有之候、彼是御凭深々數申候事、定而

愚意共多々候らん、併何たる儀をも打捨、御奉公一返

ニ、此間之ことく加判役之事然と落着申候て肝心之由、

被仰出候、當者如此何たる儀をも打捨御奉公之由候上、

談儀所を以申候ても如何と存候間、談儀処ハ御歸候へ、

今少御寄合中へ御談合可申由申候也、兩使にて寄合中

へ、如此重々上意共候、此上者如何御返事共申候て可

然候する哉、御内談之由申候也、就夫存分共候、彼役

之事、當所へ然と罷居候する程候へてハ可難成候、其

故者、御傍より申候事こそ、諸方之覚にハ可罷成候へ、

遠方ニ罷居候て菟角申候ても、覚ニ罷成候、殊更日

州之儀も爰元ニ罷居候て申候而こそ、何事もとちまる

へく候する欵と存候、當者當所へ一年之三二も罷居候
へてハ罷成ましく候、當所へ勘忍之事ハたゞにハ又な
らざる儀候、一所・一名をも此あたりニ明合之時御慶
せ被成候ハ、其身にて假屋作なとも仕、又ハ馬を
も飼せ可申候、此条御寄合中御納得にて候ハ、上意
次第之御返事可申上之由、御尋申候也、各承事ニ、尤
ニ被思候、役之儀ハ上意次第と申上候て可目出候、馬
飼処之事ハ、内談と候俣被仰候、上谷之事共、此度出
合候ニ、存分共申候てハ、それニ指向候する様ニ可有
之候欵、菟角拙者校量法第被達 上聞候する由也、此
日爰かしこニ礼儀共申候、此晚平田新四郎殿・長谷場
(増志)
織部佑殿・一王雅樂助・幸若弥十郎など寄合候、夜深
候まで酒宴也、

一六日、出仕如常、申上候、役之儀數ヶ度御佗申上候処、
重々分而忝上意共候、此上者上意次第御奉可申候、
當者諸篇聞召被付候する事ハ、節々被仰聞候て可忝候、
何と様にも御意法第之由申候也、さて御寄合中まで申
候儀ハ、不紛上谷之事此度出合候間、各御異見之様ニ、
此度支而者難申候、併明合等希ニ有事にて候間、御申
候て可被下之由申候也、菟角此儀ハ追而申上候へてハ

加判之儀罷成ましく候間、其首尾にて候条申上候也、
御返事、役之儀頻ニ御頼之由被仰分候処、御意次第之
由候、御祝着被成由也、愚存之通具申上被成候、是ハ
聞召置由也、此出仕歸ニ拙宿へ同心申候て寄合候、衆
佐多宮内少輔殿・阿多掃部助殿・本田弥六殿・田代刑
(忠徳)
部少輔殿・長谷場筑後守殿・架阿・爲阿・玠阿、此衆
(野間政應)(田中國明)
也、此座過候て、愛宕山下之坊より之使僧、點心寄合
候也、客居使僧、次稅所新介殿、主居珠長・拙者也、
種々着共にて御酒也、閑談也、此晚向嶋まで渡海申候、
白濱へ留候、

一七日、敷祢へ着船候、十八官所へ立寄候、種々會尺也、
(敷祢親賢)
休世齋申請候、閑談にて酒宴也、此晚休世へ召烈候、
參候て留候也、
一八日、早朝打立候、此日庄内嶋戸ニ留候、亭主御酒な
と振舞候也、
一九日、田野へ留候、小草駟ニ登候、此夜桶はへと哉ら
ん申村へ留候、
一十日、くさ氣にて候、然と罷居候処、田野地頭狩させ
られ候間、罷登候、鹿一射候、破籠など大寺殿持せら
れ、種々御酒共也、△

十一日、如宮崎罷歸候、▽蓮香弥介直ニ呼候間、彼所

へ行候、種々會尺也、敷祢越中守・柏原左近將監(相模)・鎌源左衛門尉など同心申候也、此晚拙宿風呂燒せ候て入候、△

十二日、衆中各歸宅申候として被來候、▽御酒など預衆も候、△此日御出勢續衆盛談合共申候也、

▽十三日、鶺鴒山別當より使僧預候、御酒持せ也、參會申候、

一十四日、善哉坊被來候、去年備後ニ御動座候(足利義昭) 公方様

より御使ニ下向候布施治部少輔殿より、書狀到來候、趣者、去年如仰出候、波柴筑前守殿依馳走、當春御入浴必定たるべく候、然者、從爰元御馳走之儀亦御頼之由也、先々年内春日之御局被指登之由也、彼狀爲披見

被持來候也、即披見仕、明日鹿兒嶋へ幸便候間、持せ候て各へ可懸御目由申候、此次善哉坊承候、野村加賀守立願候欵、當年大峯之護廣燒候欵、誰前山伏達を頼

由候、善哉坊從先々野村黨檀方にて候、其上當州惣職にて候処ニ、菟角之案内など候へて如此候、無心ニ候、

此段可申理候哉、如何之由尋也、それ〳〵の宗旨之法者不存候へ共、被仰理候て可然欵之由申候也、使関右

京亮也、

十五日、彼岸入にて候間、看經等別而仕候、此朝敷越鹿兒嶋へ私用ニ付被參候、昨日之布施殿書狀持せ申候也、此次、拙者春山野之鶺鴒毛、先日參上之刻御所望之由候つる間、牽せ候て進上申候也、此日岩戸へ參詣仕候、參錢等如常、從夫大門坊へ御礼ニ參候、御酒持せ申候、種々會尺也、從夫西方院へ參候、是も御酒もたせ候、風呂など燒せられ候て會尺也、此晚関右へめし

振舞也、深更まで酒宴也、從都於郡使也、△

一十六日、從諸所此度御出勢ニ可被立物數被書注預候、

去十三日より、所々より彼書立來候、▽此日本坊へ參候、御酒持せ候、時御振舞也、數篇御酒參候て御膳下候、其間若衆達鞠共被蹴候、暮など打候人も候、種々會尺慰也、然処ニ、紙屋地頭子息舊冬元服候、菟角隙

入候て未拙者へ見參なく候として被來候、即本坊へ呼申、見參仕候、御酒・百疋持せ也、點心之座ニ寄合候、持せ之御酒など酌被成候、有馬名字之衆中一人同心也、

それも同座にて參會候、此晚大門坊庭にて若衆中鞠也、夜入候て歌香など被聞候、種々之夜遊也、深更ニ如城

罷歸候也、

罷歸候也、

一十七日、鷄足之霧嶋へ參候、泉長坊被寄種々會尺也、
終日酒宴共也、此晚中城・恭安御二人御越也、種御會尺共申候、深更まで酒宴也、執く御酒共被下候也、

一十八日、本庄地頭川上備州越也、御酒預候、衆中一兩人同心也、是も御酒持せ也、野村宮内少輔被來候、御酒持せ也、此日大徳丸袴着之祝言也、三献如常、恭安御二人・中之城御座候て種々祝言共也、從恭安大徳丸へ刀被下候、佐藤玄番助作也、終日之酒宴也、

一十九日、かこ嶋淨光明寺、從都於郡預書狀候、趣者、遊行御調之儀、諸所へ申渡、急度調達頼被成由也、此日ハ内々より恭安・中城へ御會尺被申候、終日之酒宴也、從財部物數付之書立被持せ也、△

一廿日、如常、昨日飯野傳ニ巷説候、八城花之山椿ニ從阿蘇家向陣取候由也、▽此日鎌源処ハ二堞・中城・吾々被呼候、種々會尺也、此晚野村彦殿可來由候て罷下候、種々會尺也、深更ニ罷歸候、恭安御二人ハ此日御歸宅也、福永備後守殿御酒持せ被來候、肝付彈正忠殿より使者預候、是も酒肴預候、兩人同前ニ參會申候、持せの御酒など賞翫仕候、從綾不動坊被來候、酒肴持せ也、參會申候、

一廿一日、如常、野村丹後守殿父子、夜前罷下候礼ニ被來候、又々御酒持せ也、此日瀬戸山大藏丞呼候間、穗村へ罷下候、種々會尺也、若衆中鞠など被蹴候、見申候て慰候、深更迄酒宴也、此夜ハ驪而大藏丞処へ留候、衆中あまた同心申候也、

一廿二日、早旦大乘坊へ礼申候、粥振舞也、從夫碁・將碁などにて候、此後池田志广拯可來由申候間、彼処へ行候、めし振舞候、種々會尺也、其後沙汰寺へ參候、彼庭にて若衆達鞠也、見物仕候、鞠過候て種々會尺共也、從夫加江田へ罷越候、天氣悪候て内山へ留候、△

一廿三日、圓福寺早朝來儀也、福昌寺大賢和尚去十五日御死去之由候、▽就夫鹿兒嶋へ使僧ニ頼入候、尤私ニも越有へき事候間、領掌被成候すれ共、頃脚氣然々無之候条、代僧被遣候てハ如何候する説之由也、當者代僧可然之由申候也、木花寺も御酒もたせ被來候、各拙者罷越候とて酒肴など持せ來候也、此晚上并次郎左衛門尉殿宮崎へ越候へ共、拙者留守之由於中途聞付、紫波洲崎へ越候由也、驪而使遣候也、此晚も内山へ留候、△

一廿四日、▽早朝城へ參候、次郎左衛門尉殿拙者へも御酒もたせ也、參會仕、種々會尺閑談共也、△此度有馬

渡海之儀ニ付、舟造作之儀共見舞候也、▽此晚中城御留守にて候へとも、彦兵衛尉御酒二郎左衛門尉殿へ祝言ニ申候すると申候間、恭安・吾等も同前ニ彼方へ參候て御酒也、此夜ハ彼方へ留候、

一廿五日、早朝騷ニ山へ登候、此日ハ二堞より二郎左衛門尉殿・拙者へ御振舞也、種々御會尺也、此晚安樂阿波介可來之由申候間、恭安御供申候て彼宿へ行候、種々會尺也、恭安ハ二郎左衛門尉殿被居候とて、早々御歸鞍候、拙者ハ薄暮ニ至而歸候、内山へ留候、△

一廿六日、▽次郎左衛門尉殿歸之由候間、路次にて候候、内山ニ茶屋構させ候て置候間、是にて會尺申候、茶過候て御酒也、未之刻計ニ打立歸也、此日清武より使也、(伊集院久宣)伊作州當年無沙汰被成候、養生氣故、又者拙者久々かこ嶋へ逗留申候つる間、無是非之由也、御酒被持せ候、即使者へ寄合候て賞翫仕候、此日狩之儀申付候、如右

隙入候間、夕鹿藏ニ漸登候、鹿一射候、已上鹿五取候、△此晚從宮崎加治木三郎次郎來候、趣者、敷祢越中守殿今日かこしまより歸宅候、肥州合志へ龍造寺取(縁由)出、日々相銘候、今分にて候ハ、合志之儀落居程有間敷候、御見次肝要之由、新納武州(忠元)まで限本・宇都より

之書狀、又者新武之書狀、彼是三通被爲持候、披見仕候、去十一日龍造寺出國候而、同十三日合志へ取懸候由也、就此等之儀、(兼久)太守様も來月二日必御打立可有候、然者當州之衆之事、此由可申渡之由也、兼日有馬へ御出勢之由候て被觸立候、乍勿論其人衆早々打立之由也、有馬へ御渡海之儀ならハ佐敷へ諸軍來可被着揃之由候つれ共、合志方御見次可有之間、八城へ各越着之由也、左候而亂引退様に共候ハ、如兼諾有馬表へ諸軍來可被指渡之由也、

▽一廿七日、諸方へ使者、書狀にて、續之儀觸させ候也、(兼色)此日宮崎へ罷歸候、此晚同名右衛門尉処へ可來由候間行候、薄暮まで酒宴也、(此脱カ)一廿八日、如例、日御崎寺入御候て講讀也、此日も行之談合共衆中と仕候、此晚清武より使にて續衆之儀等巨細之段共尋也、有之促ニ申候也、

一廿九日、金剛寺より使僧預候、當年拙者未參候、來朔日可參之由也、朔日之事ハ別方へ兼約申置候間、明日可致御礼之由申候也、此日清武之勢田寺礼ニ被來候、御酒預候、食籠肴也、即參會申候、此日衆中悉皆揃候て、今度續之談合共申候也、△

一晦日、▽從本庄学頭坊・萬福寺など被來候、御酒各被持せ候、此日金剛寺へ參候、時御振舞也、其後風呂焼せられ候間入申候、風呂過候て點心會尺也、終日酒宴也、此歸きに、△曾井傳ニ巷説候、甲斐(親直)宗運父子六ヶ敷事出來候て、子共ハ阿蘇之こたく退候、宗運事者限庄殿同心にて、八城へ參候由也、

三月

一朔日、衆中出仕如常、淨光明寺從都於郡使僧預候、必此方へ來儀可有御所存にて候つれ共、續前取乱之由被聞せ候間、無其儀之由也、御茶・龍涎香送給候也、并弓削名字之者二三年前山賊仕候、然間所領等召離候、光明寺を賴存候てゐ候間、路次免許申候へかしの承事也、此等之儀ハ不輕事候間、寄合中へ談合申候て、追而御返事可申之由申候也、此朝堀四郎左衛門尉殿可參之由候間罷下候、種々會尺也、茶湯會尺也、宇治之無上也、曾井加護八幡之座主常智院被有合、閑談共也、從穆佐使節預候、明日打立被成候、於八城万端可被仰談候由也、明日御打立尤可然存候、拙者事、小瘡氣然くなく候、養性共仕、必來四日打立可申由申候也、△一二日、▽如常、從折宇迫拙者舟出候之由候て、加治木

但馬搦上載にと候て打立候、同名縫殿助・江田安藝守(兼清)、是も上乘申候、其外役人共一兩人乗候、衆中荷物等も彼舟ニ被乗せ候、△此日忠棟(伊集院)より、内衆鳴田与一と哉らん、本庄へ親之処へ來候、次ニ此方へ傳言被成候、趣者、今度續之儀必定候、忠棟・拙者事者佐敷へ、(甲斐親直)太(義)守様御側へ罷居候する様ニ聞得候由也、宗運も此方へ可參之由申候通也、諸篇於佐敷可被仰談之由承候也、然者明後日之打立者留候、鹿兒島御打立來九日ニ相定候、如泉御通可有之由也、即所々へ拙者打立見合なされましく候、吾等事者忠棟より御側へ罷居候する由承候間、遅打立可申候、各者急被成候て可然之由、所々へ申渡候也、

▽一三日、如常、衆中なと被來候、何れも御酒參會候也、此日滿願寺へむすこ祈念賴存候由申候間、御登也、先御茶湯會尺申候也、其後むすこ懸御目候、從爰養被成候て祈念請取なさるゝ由候て、觀千代と名共付被成候、祝物等進入仕候也、終日祝言之酒宴也、此晚滿願寺より觀千代へ祝物共預候也、一四日、金剛寺御登之由申候て、御茶湯會尺仕候也、終日酒宴也、從曾井書狀預候、拙者打立日限尋也、忠棟

使其方へも被參候、由物語候、定而聞せられ候哉、拙者
 事者御側へ可罷居之段候間、鹿兒嶋御打立承合、罷立
 候、旁々御事へ、早々御打立可然候、但御校量ニハ過
 ましき通、返答仕候也、

一五日、如常、從藏岡吉利山城守殿代として二階堂出羽
 守使ニ預候、當年無沙汰被成候、尤自身御出候すれ共、
 行前之由候て酒肴持せ預候、即賞翫仕候、本庄地藏寺
 より使僧にて御酒預候、清武衆川野筑後守、久無沙汰
 申候とて被來候、御酒持せ也、次ニ柏原將(有樹)にて承候、

年内より地頭へ就天役之儀仕違候て、當時麓ニ罷居候、
 今度御出勢ニ可罷立候間、吾等ニ同心有度由也、尤左
 も候すれ共、地頭へ仕違なされ候方を、拙者左右方之
 時宜共不承合ニ同心可申事、納得不申候、於堺目、定
 而鹿兒嶋御使衆なと口にて委承候て、寄合中御談合次
 第同心可仕由、返事申候也、

一六日、如常、西侯七郎左衛門尉被來候、御酒持せられ
 候也、兼又此間かこ嶋へ抵候被申候、去晦日彼方打立
 候て、曾井まで被來候、虫氣出合候て于今遅引候由也、
 忠棟より御傳言候、前日鳴田与一方にて承候ことく、
 今度御出勢之儀、最前之御談合ニ無相違候、忠棟・拙

者事者 太守様御側へ可被召置候、其覚悟肝要之由也、
 然者御打立者來九日・十日たるへく候、新田宮へも御
 參詣候する、又泉へも御隙共入候する間、其校量仕、

佐敷へ參着候て可然之由承候也、彼西侯私物語ニ、御
 打立日限、九日・十日者悪日にて候間、十一・十二日たる
 へく候哉之通申共散候候、吾々打立者十五・十六日可然哉
 之由被申候也、弓削甲斐介殿酒肴持せられ候、若衆中
 此方庭にて鞠共蹴候て被居候間、振舞候也、此日鎌田
 源左衛門尉殿へ御供當候条、如かこ嶋被參候也、

一七日、如常、谷口和泉丞処へ行候、種々會尺也、衆中
 五・六人同心申候、此夜彼処へ留候、終夜酒宴也、
 一八日、谷和朝食振舞候、碁・將碁など也、此暮江田大
 宮司処にて鞠也、從夫種々會尺也、此夜彼処ニ留候、
 深更まで閑談共也、

一九日、海藏坊時振舞也、種々會尺也、從夫加江田へ打
 立候処ニ、又若宮拜殿にて、大宮司御酒持來候て會尺
 也、從夫谷口又於中途御酒くれ候、河邊ニ而酒宴共候、
 其後曾井加護八幡之座主可參由候而、種々會尺也、衆
 中一・兩人同心申候、曾井衆勝目方なと有合候て會尺共
 也、此夜加江田内山へ留候、衆中一・兩人同心申候也、

一十日、内山にて朝狩仕候、鹿一取候也、從夫しわす崎

へ參候、(上井兼兼)恭安様種々御会尺也、

此夜又内山へ行候而留候、清武より松下越中守殿、久無沙汰候とて御酒持せ

被來候、參會申候て賞翫仕候、八城へ移來にて候間、

明日彼方へ立候由也、平田殿(光秀)へ傳言共仕候也、

一十一日、於九平良ニ狩仕候、猪・鹿六取候、各爰かし

こにて御酒共くれ候、敷祢又十郎殿同心申候間、寄合候て賞翫申候、此夜又内山まで來候也、

一十二日、圓福寺など御酒預候、賞翫仕候也、此日宮崎

へ罷歸候、衆中各歸候とて被來候、此暮頃、鞠したゝ

めさせ候、若衆中被來候て被蹴候也、從夫風呂焼せ候

て、各入候て慰候也、此夜本田治部少輔殿御酒もたせ

被來候、出家一人同心也、是も樽預候、參會申候也、

一十三日、瓜生野へ八郎左衛門尉可來由申候間、下候、

種々會尺也、本庄萬福寺など被來合候て、酒宴共也、

此晚奈古大宮司泉鏡坊可參由候間、下候、若衆中鞠な

と也、從夫深更まで酒宴也、△

▽天正十二年△

一三月十四日、宮崎打立候、▽祝言之御酒等各預候、參

會仕、首途祝候て、△此晚瀬越迄越着候、▽於中途本庄

万福寺茶湯にて候、吉利殿(忠選)從女中酒肴共預候、賞翫仕

候也、此夜本田治部少輔殿など同宿にて雜話共也、△

一十五日、▽早旦△瀬越より打立候、▽衆中など中途にて

追付也、破籠之御酒など振舞候て、同道申候、△此夜

飯野本路ニ一宿申候、(義弘)忠平公へ明後日御打立有へき由

共、下々申候也、

一十六日、早朝本路より打立候、▽般若寺町にて敷祢越

中守殿吾々へ御酒振舞也、從夫坂之上にて又各へ拙者

破籠など振舞候、△此晚山野へ留候、彼地頭稅所殿酒

肴持せ被來候、(義弘)太守様昨日水俣まで御着にて候間、

今日へ定而佐敷へ御着たるへき由共物語也、有馬へも、

先勢十ヶ処計之衆渡海之儀共被語候、

一十七日、▽拂曉△山野より打立候、(忠長)圖書頭殿御立被成候

ニ湯浦にて追付申候、從夫御友申、(伊)佐敷へ未刻計參着

候、直ニ路次支度之俣圖書頭殿御同前ニ御座処へ罷

出候、白濱二郎左衛門尉殿にて躰臺御參之由御申候、

拙者も早々祗候申候するを、(伊集院)忠棟より今度之御出勢拙

者事者御側ニ被召置候する由被仰出候、然者來廿日比

佐敷へ御光儀たるへく候、其故者、路次續川内・泉な

とへ御隙共入候する間、其覚悟申候て佐敷へ可參之由、

西侯七郎左衛門尉又ハ忠棟内來にて兩度宮崎へ被仰越候間、依夫遲參之由申上候、御返事ニ、菟角之儀ハ不入事候、加判役を申拙者にて遲參、無御納得之由也、

▽從夫忠棟・親貞宿へ礼申候也、△

一十八日、昨日遲參曲事之由被 仰出候間、斟酌ニ存候て不罷出候、▽此日拙宿ハ忠棟・親貞御出被成候、△此

晚圖書頭殿有馬へ御渡海也、

▽一十九日、早朝忠棟より稻富金兵衛尉を以承候、御前より

田代刑部少輔にて被仰出候、拙者昨日より不罷出候、遲參之由被仰候、左様之遠慮にて如此候哉、早々出仕

肝要之由候、可罷出之由候間、即出仕申候、金吾公昨

日御參着之由候て、御差出被成、馳而御寄合也、

一廿日、出仕如常、忠平公御指出被成候、御樽・折肴御進上也、今年始而御參會候条、式三献御寄合被成、馳

而御寄合也、豊州御同前也、此晚忠平公御宿へ參候、△

一廿一日、▽相良殿兄弟指出也、御太刀・御酒・柴など

進上也、此日宮原筑前守御會尺被申候、御座躰上座太

守様、御次金吾公・相良殿・忠棟・宮原筑前守、客居

忠平公・攝州・本田紀伊守・拙者也、三献目相良殿持

參の御酒參候、四郎太郎殿御酌被仕候、舍弟長壽殿御

提也、終日御會尺也、御點心之時親貞參被成、奥之山

左近將監・松尾与四郎など被仕候、終日乱舞也、△此

日又四郎殿有馬へ御渡海、上原長門守御供被申候、其

外諸所之人數渡海也、此日中書公有馬へ御辛勞候、其

外圖書頭殿・平田殿・新納武州など辛勞共被成候由、

使書にて申入候也、拙者舟十二段帆、有馬へ渡候也、

▽一廿二日、出仕如常、釈迦院衆徒指出也、御酒など進上

候、御寄合被成、我々へも彼衆礼儀也、△

一廿三日、▽南林寺指出也、御酒進上也、△此日佐敷太郎

之峠へ御登被成、方角御遠見共也、忠平公・金吾・寄

合中、其外所々之衆御供也、▽宮原筑前守食籠着にて

御酒進上被申候、各召出之御酒也、此晚境之船頭六之

介拙宿へ來候、樽持せ候也、△

一廿四日、▽地藏菩薩看經別而申候、出仕如常、城一要

より使節進上候、爰元へ御光儀之御祝言也、御太刀・

片色二進上也、即使者上覽被成、△此日有馬へ中書公

御辛勞共候、其外諸人軍勞被成之段泉鏡坊にて申候、

歸帆也、新武・鎌雲書狀預候、此間者無人數之様ニ候

処、又四郎殿・圖書頭殿・平田殿など着岸候間、嶋原

有之由也、即御假屋へ祇候申候て、此等之段申上候也、
今朝從隈本之使者物語候、龍造寺頃肥後表へ絡候する
とて打立候処、肥前へ島地二三反程ニ虻多々死滿候、
依夫妖怪之由申候て、絡之事停候由也、

一廿五日、出仕如常、圖書頭殿・平田殿より書狀到來候、
趣者、從伊佐早落人來候、龍造寺隆信頃彼方へ着候て、
近々嶋原之御陣へ可相絡之由候、嶋原之事ハ今之軍衆
にて相應ニ候へ共、若く龍相絡候へ、今少御人數被
指渡候て可然之由也、今一注進被聞せ、我々も可被指
渡欵之儀共出合候、和泉之境・紀之湊之船頭指出候、
上覽被成候、有馬へ軍衆渡船之儀等御憑之由也、涯分
馳走可仕之通申上候、此日從八城御注進候、昨日廿四、
肥前衆有馬御陳へ取懸候処、被逐一戰、龍造寺隆信始
數千騎被討取、御大利之由也、從夫打續有馬よりも同
前之御左右也、又四郎殿・中書公・圖書頭殿、此外諸
軍衆粉骨高名之鉢取く申來候条、難尽筆紙候、各御
假屋へ祇候申候て、御祝言申上候也、目出之由被仰候
て、武庫公・金吾へ御酒御寄合也、攝州・忠棟・親貞
・拙者も御酒被下候也、此晚忠棟へ攝州・親貞・拙者
御振舞也、

一廿六日、出仕如常、有馬殿舎弟被參候、宇都よりも使
僧進覽也、此度御勝利共候、如此之刻へ、於其地施餼
鬼被成事御佳例候、福昌寺入院始と申、早々御越山候
て彼儀被執行候て肝要之由、被仰出候、即書狀を以福
昌寺へ被仰渡也、此節諸口御計策此事候間、明日八代
へ可被移御座之儀定也、此日從有馬隆信之頸到來候、
貴賤群集候て見候也、

一廿七日、出仕如常、隆信頸実檢被成、合木ニ被懸候、
太守様しやうきニ御座候て、良久御合掌にて御觀念共
也、其後合木近く御立寄被成、靜ニ頸上覽候也、武
庫・金吾・攝州・寄合中、其外諸軍衆蹲居候也、此日
八城へ御光儀也、酉刻計御着被成、鑿而御三獻參候、
平田濃州ハ留守にて候へ共、彼館へ御宿也、

一廿八日、出仕如常、宇土・隈本、爰彼より御祝言之使
僧・使者など到來也、肥筑表へ計策之書狀數通認、被
遣候也、

一廿九日、出仕如常、有馬表神白と申城未落居候間、彼
行等御談合のため、忠棟・拙者渡海之由被仰出候、御
使兼鎌田刑部左衛門尉・白濱周防介同心可申由也、^(重政)
日忠棟風呂燒せられ候、親貞・拙者可參之由候間、同

心ニ入申候、已後振舞被成、御茶など也、△鹿兒嶋へ
(重誌)
 三原昌安・高崎有閑御番ニ被召置候、彼前より、爰元
(能志)
 様子如何之由書狀にて承候、有之俣御勝利之由返答被
 成候、此夜有馬表へ御軍旁之衆へ祝言申候使長野淡路
 守、歸帆也、此日鎌田源三郎殿にて上意候、拙者春山
(破巻)
 野之輔毛、市來野父馬之爲御所望候、然処、彼馬從御
 既はなれ候て、大興寺之こなたニ候毘沙門堂之礼拜筵
 ニ、既ニ立候ことく居候由、鹿兒嶋より到來候、目出
 瑞相と被思食候間、御拜進有度由候、御尋被成ニ不及
 候、早々御拜進可目出由、申上候也、

『長谷場越前日記』

一御當家を高來の郡司有馬方より可被奉頼言上趣者、肥

【天正十一年癸未夏の比より】

前之郡司龍造寺へ多年之遺恨深重也、近國の成立を恣
 に被唆、其有様を見合せて、時之身命を延ため銚楯を
 構る處ニ、有馬方は小身なり、難叶心得て海上は隔共、
 薩摩方を一筋ニ枕神と再拜し、中務太輔家久まで言上
 を被致、此由を聞召て鹿兒嶋方ニ御執達之處ニ、無異
 儀可有御扶助事被仰出ける間、近國之軍兵を先勢に被
 卒御渡海ましますは、彌御利運被成宛歸院有りける、

其以來龍造寺隆延を始として、兩筑州衆ニ阿蘇家迄不

殘同心仕り、近國衆と遠國ニ種々の智略を廻して、有

馬方か格護之内深江の城を乗り取て憚り申す、其上ニ

【天正十一年六月廿三日ノコト也】

新納刑部太輔とて文武器量の若武者を無情討取りて喜
 ふ中ニ、悲の來る道ニ踏迷ひ、安德城を取巻故、有馬
 方者及一大事ける、彼の注進を聞食、中務太輔家久者

御曹子の拾三歳ニならせ給ふを御同陳ましくしてハ、
 御先祖忠久様十三歳ニ成玉ひ、錦城戸退治之御佳例と

て、高來の郡内島原の津に御着船にて、其俣攻陳取せ

【天正十二年甲二月下旬の比より高木へ可渡の評定相究る云々】

懸りける処ニ、肥前の國司龍造寺隆延者六萬余
 騎を卒し宛、薩摩の御陳ニ攻來る、其比天正十三年乙

酉三月廿四日の事成るに、御方の大將家久ニ押ならし、
 圖書頭忠長相並て又四郎、前後之隨兵河上上野守・新

納武藏守・平田美濃守・同左近將監・弟ニ九郎左衛門尉、
 又左近將監の嫡男ニ新四郎同心す、次男新七郎、相續

く兵物ニ新納治部少輔・川上三河守・同左京亮・鎌田
 出雲守・山田越前守・相良新介・平田孫六・同名狩野

介・高崎大煩助・上原長門守・同彦五郎・奈良原安藝

守・同源八郎・二階堂帶刀長・鮫島又左衛門尉、是皆

處々の地頭也、神津浦方・巢本方・太矢野方・眞木島

方、今一人の天草者、作り病を仕り參陣を停止して、世上之躰を見合せけり、此外之諸軍兵の我先ニと進つゝ、高木・有馬の陳衆も都合其勢式千騎ニハ過ざりけり、廿四日巳刻計り事成るに、龍造寺隆延ニ同正家・同五藤・山付・鍋島飛彈守を先として、大村衆ニ比良戸衆・西浦之者共と、又ハ筑後衆・筑前衆ニ到迄皆出勢とそ聞得ける、六萬余騎之軍兵ハ薩摩之御陳ニ懸りける、島原城衆ハ是を見て切て出んと勇ミけり、去間本口の押へ勢ニハ川上上野守大將にて、相良方と平田美濃守肥後之國衆を引卒し、如何ニも嚴敷矢師を被致、亦タ御陳表の大將ハ中務太輔家久之父子式人、又四郎・圖書頭久長其外宗徒之兵物の太刀を取て打從へは、我先ニとそ進ミける、中ニも吐氣太將ニハ河田駿河守と云し人世上ニかくれぬ役者也、進出て被申さ、今日軍氣を見るよりも時烈よきニ懸りなば、必ず大將可討取と、加下知ヲ、下よりも我もくゝと面々ニ手柄之程をあらわせり、先ツ濱之手の敵ぶりハ、島原衆ニ取り合んとせしか共、横入をたくミつゝ、先手之衆ニハ酒瀨川奉膳兵衛尉、相續く兵物に前田志摩守・四本主税助、此外ニも百騎計り指合て切り崩す、此場にて酒瀨

川・四本者戰死也、是を見て隆延衆戰儀を成し、岡の方ニ引上り、六萬余騎の者共を三手ニ作て攻懸る、薩摩方之兵物ハ無勢にて有なから、軍サに孤る事故ニ、御大將を三手ニ分て懸あはせ、猛勢の眞中ニ切りて入せ給へハ、追つまくつ數か度之合戦を被成ツ、致高名、其中ニ鎌田出雲守・二階堂帯刀長相續き軍勞す、於爰新納駿河守・久永九郎左衛門尉戰死也、日州飢肥之任人ニ上原彦五郎指合て太刀打す、其同心ニ宮原越中守・長谷場兵部少輔・竹之内備前守合戦を仕る太刀下にて分捕をそ致ける、又折目の御軍勞を被成時、圖書頭久長の御供を勤る也、其場ニ上原長州參らる、又於弓矢の方者、山田新介・稻留新介太刀打す、一段之軍勞也、懸りける処ニ、中務太輔家久父子御馬を駈入らせ給へハ、敵の兵もの指勘へ合戦を仕り、家久ニ名譽の疵をそ捧ける、軍陳軍旅の御高名申も余り有りけらし、相續き又四郎様十七歳にて御手柄の御太刀を被遊、御仕合無比類御事共たとへん方そなかりける、又爰ニ川上左京亮と名乗て若武者の事なれハ、薩摩方の兵ものが手なミの程を見せんとて散々ニ切て入る、敵大勢の中よりも、肥前方の太將ニ隆延者是ニ有り、請て見よ

と云俣に、太刀を取て打懸る、川上左京亮相切をば致し、隆延の爲被召鎧の袖の才切り落し、次く太刀にて首を中ニ打落し取て見せんとせし時ニ、弓手妻手の良等者首とらせしとふせげ共、即取てみせてけり、慈の兵もの落合てもみニもんで切て入り、曾木權介と名乗て守一軒と云へる武者無異儀首を給つて軍勞を仕る、跡より味方衆つゝきあひ、前後左右ニ入り乱れて太刀打テバ、敵猛勢の事なれ共、運つきぬれハ無力敗軍を仕る、見江の城の麓迄かはらふせニそ切り捨る、今朝目に余る大勢を數萬騎ハ討留る、残りて逃る者共の居城を捨て落て行猛勢ニ、道せまき事なれハ、我先ニ遁んとて人々馬を乗り重ね、馬ニ人が重りて心ハさきを望め共、姿ハ先ニ行兼る、爲方なさの余りニヤ、野山ニ入りてかせきつゝ高田表を出けるに、親子兄弟いさ不知、我もくゝと海ニ入り、舟取りくゝニ漕出し、竹島差而そ渡りける、乗り後し者共は、高田遁入て、其古ニ名のみ聞く松浦さよ姫あくがれて、唐土船を慕ひつゝ伏しつむ有様もかくやと思ひやられけり、高田方ハ逃來り、ゆうかいを落去してうんぜん山ニ引入りて逃行と告知す、若武者の是を聞、打果んと出合ひて懸

けつゞきける間、宮原左近將監・上原勘解由兵衛尉・蓼田李左衛門尉城麓ニ詰入て手を碎き合戦ス、其中ニ宮原者太刀始被致、然ハ城衆も出合て今を限りと防ぎ戦ひける間、上原勘解由兵衛尉・蓼田李左衛門尉戦死也、宮原左近ハ痛手負ひて聞きける、其より五日過ぬれハ、高田方ハ居城ニ命を替へ、御幕下ニそ參りける、扱落城之數々者、深江・島原・見江・平良・金屋・高田共ニ六ツ、五日の内ニ攻果し、高來の郡司有馬方が拜領し、忝き仕合を諸國之大名小名も世上之耳目ニ心を寄ぬ人はなし、去間圖書頭久長押並て又四郎、此外之軍兵も各々衆儀して安德城へ打歸り、大村・平戸・西浦衆・三池・小代やはに島原萬方をからくり付て、同五月上旬ニ島原・安德兩城津より順風に帆を揚て、佐敷の湊に着船し、諸軍兵一同ニ御太將義久様ニ御目見被成ハ御悅ぞ増りける、かの島原の合戦に、隆延を始として數萬騎の者共の戦死をいたす志シ、其吊を被成んと被仰付ける間、福昌寺の十八世代賢大和尚を始め奉り、薩隅日州肥後の國ニ到る迄、諸寺家の御僧衆來して大小船ニ乗り浮ひ、まとももの風に帆を懸て島原の津に着岸して、式千余僧は行道し、三拾杖の高卒都

婆を押し立て御經讀誦し給へ、靈空ニ響く声名ニ天人ハあまくだり、地神各來現する計也、是を見聞人々者無念無相と成ニけり、頃ハ弥生の下旬にて、春風にたなひける霞哉、雲の間も幡手の數の亂るゝハ、上竜と下竜と守護給かと思ふ事ハ、誠ニ靈鷲山にして釈迦牟尼如來之行粧と、亦ハ日連尊者の地獄化度の結縁も今爰ニ見當ぬ、則成佛者無疑と、上下萬人ニ到迄感涙を流し宛、恭敬拜見申す也、此趣を傳へ聞、諸國の人の褒美ニハ一見卒都婆也、うり三惡道の功德さへ辱き事をかし、前代未聞末代も古やためしならましと、猶々尊ミ申也、

「日向記」

一天正十二年甲申ノ春、嶋津中務太輔家久爲大將、同又七郎豊久・同又四郎彰久・同圖書助忠長副將トナリ、三千餘騎高來渡、有馬修理太夫ト相共ニ謀計ヲナシ、軍伍ヲ定嶋原ニ長陣ス、依慈三月廿四日、隆信數万ノ甲兵ヲ卒來テ防戦ス、隆信軍兵敗北シテ散乱ス、嶋津内河上左京亮忠堅ト云者隆信ヲ討捕、都テ首數三十餘ト也、頓テ高來ノ嶋中ハ有馬殿知行ト成、嶋津カ軍衆

ハ則歸陣ス、

1389

「忠元勲功記」

一天正十二申三月、貫明様佐數ニ被成御座、有馬方救として中書家久様ニ人衆三千被召付、有馬江渡海ニテ、鎮貴と御相談之上、嶋原城被爲攻囲、隆信六萬之大軍ニ而致後攻候時分、中書様者別ニ五百之人衆被召列、子息又四郎忠豊ニ惣勢被召附、忠元江後見被仰付、此月廿四日、於嶋原ニ被遂合戦候、其節川上忠堅乱軍ニ紛入、隆信と戦ひ其首打取、肥前方別而及敗北候、其時忠元者右通忠豊ニ付添加下知、敵三千餘討取候間、大口衆之儀者次男〔其比ハ左京亮と云〕弥太右衛門忠増召列加下知、自身太刀始をもいたし、大口衆ニ者白坂駿河入道杯殊ニ相働、鎧を合せ有名之士三十六人討取、切捨者不知數由、左候而其場江武藏戰場与高札迄相立、若相疑人於有之者、可承与爲書置由候得共、批判仕者無之由、右ニ付森山・三重城・大野・平良・神代・飯福六ヶ所御領爲相成由、左候而同年秋、忠元江肥後限府地頭職被仰付、大口地頭者本之通ニ兼務仕、同十月境目之物見可仕旨、忠元并伊集院下野守久治・山田新助有信・猿渡越中守

「大口土濱川西市丞覺書」

一天正十二年春比、薩摩軍衆高く渡と定、其時御大將家久様御父子、又四郎殿・圖書頭殿其外川上殿、又者平田殿・武藏殿・山田新助殿を始、舟治之衆漸人數千五百餘騎渡し被成、其外嶋五人・有馬殿人千五百、都合三千餘騎也、安徳江打入一夜之家陳被成、夫よりかけ引被成折節、肥前高信は薩摩衆せめほろほさんと、貳万五千にて三月廿四日嶋原へ打寄せらるゝ、右之人數へかけ合、家久様を始奉り、諸大將茂思ひきり軍被成、右高信打亡、四百餘騎打取、勿論高信も川上殿打取被成候、御家記有之由、あらゝ書付置也、其時肥前旗頭大將勝一けんと申候を、親紀伊も打取、大刀は北原安藝殿御使にて圖書頭殿江指上候の由、安藝殿某へも細く被仰聞置候、就其湯之浦之内しちやと申門を被下、三年は取納此方よりかけて仕由、おちなと申聞せて、十五年よりハ関白様薩摩入ニ付、御あけ地ニ罷成也、是ハ孫々ために書付置なり、

に被仰付、同八日、何れも人衆召列三池へ打入、高瀬町ニ陳を取、在郷諸所打破、此度茂降參爲仕由御座候、

天正十二年甲申

「殉國名數中」

三月廿四日、新納駿河守

仁兵衛祖なり、中書家久將として肥前に行き、有馬銀高を助て龍造寺隆

信と島原に戦て死、下同し、

久永九郎左衛門尉・酒瀬川奉膳兵衛尉武

安・四本主税介秀堅

鹿兒島士、或作秀真、

上原勘解由兵衛尉尚弘

或勘解由家村市左衛門・家村讚岐守・蓼田李左衛門八代、左衛門、住人、

貴嶋刑部左衛門尉・稻富左京亮

島津忠長家臣、

森讚岐守・稻

富小内記・長濱右衛門兵衛尉

以上四人皆忠長臣、

左京小者彌助・

前田志摩之丞範元

助六、範、春孫なり、

後醍院主殿助

頼演

冒高橋氏、蒙野間民部家純種子氏、創歸陣死、

定

二十三歳、島原戦死とあり、此時歿、新左衛門重正弟、子孫羽月ニ有り、

十一月廿六日、市來三郎次郎

肥後日平城戦死

「義久公御譜中」

「寫在末吉兼蓮光坊」

夫愛岩山大權現者、地藏薩埵應□切利天、於喜見城親受

釋尊付嘱、獨二佛中間導師救苦海群衆、六道能化大聖也、

□傳聞末世及濁乱、當世至澆季、爲聞信不、爲紀利尉、

掛忝改剃髮姿、翻忍辱袂、着降伏甲冑、法性執寶幢、握

眞如利釵、乘飛行白馬、遊第一義天、断無明怨靈、破逆

心災妄、勝軍高德秀余神道々々、爰源朝臣嶋津判官義懸憑於冥道知見、任勝於神明冥助、自他本陣互舉旗、双方士率各構刃、將欲決興廢、既出立太刀下令凶徒誅戮、競向雷動響令敵徒敗北、是豈所成神慮、所致信力、渴仰指掌、感應銘肝、然則開寶殿玉扉、備尚饗禮奠、獻再拜奉幣、立願成弁懇篤無外、丹祈無貳者哉、冀者信心願主義久者、三所和光并大郎房利生翹下生立、弥崇神道行仁義、倍貴佛陞重義理、依之傳武運兵略累代子孫、繼弓馬嘉名重代家門耳、願書成就旨欽言、

天正十二年三月十七日

下之坊福壽院

代官隅州住快法上人

1393 「義久公御諱中」

天正十二年三月九日、義久率薩隅日三州中軍衆首途、而赴肥後州、同十六日、到于佐敷、而在于此矣、
同月十九日、左衛門督歲久參陣、而見我也、其翌廿日、兵庫頭忠平來於八代見矣、今年之初參會以進式三獻也、
同月廿一日、相良四郎太郎忠房・弟長壽丸來見、太刀及酒漆等持參、終日所以爲遊興也、頃遣弟島津中務太輔家

久爲元師、其子又七郎後稱 豊久及川上上野守久信・同姓三

河守忠智・同姓左京亮忠堅・平田左近將監・同姓狩野介

・同姓孫六・新納武藏守忠元・同姓治部少輔・山田越前

守有信・鎌田出雲守政近・河田駿河守義朗・高崎大炊助

・奈良原安藝守・二階堂帶刀長重行・鮫島又左衛門尉

等、爲副將渡有馬、并上津浦某・栖本某・大矢野某・志

岐某等亦參陣焉、唯天草某者作病龜縮矣、又今日島津又

四郎彰久渡楫、令上原長門守從彰久、島津圖書頭忠長・

平田美濃守光宗其外諸所士卒渡海也、薩摩方共一千五百

餘騎、有馬氏之兵亦一千五百餘騎、總計三千餘騎、先屯

于有江、直過深江急入安徳、其夜陣幕悉成矣、未經幾程

而突出島原、設陣柵犯敵城、且復遣使僧於敵城云、速與

我爲和睦降參于有馬氏、而宜保命全身矣、雖然敵兵不敢

應諾也、

天正十二年三月廿四日、龍造寺隆信聞薩摩方師旅之不多、

則以爲、恃己之衆多不足敢懼、而引率六萬餘騎之甲兵、

爲三分填然鼓之進來、較此於彼、則衆寡強弱天地懸絕也、

我將中務大輔家久藏數萬兵於胸中、於茲乎、令我軍中曰、

寧死於肥前州之地、而莫苟生以歸薩摩之起微思、今也衆

士背我之言不戰、則島津氏之瑕瑾未嘗有大焉、息男又七

郎雖爲志學童子、勵勇氣決勝負、若不能者止再歸故鄉、男子而曝屍於戰場、則所以垂芳譽於後世也、宜決戰死於今日云爾、諸將僉云、誰敢有背今之令者乎哉、各達旗下士卒、以故軍來一心定志共欲以死爲限、川上上野守久信爲將師、相良氏及平田美濃守光宗率肥後州士卒從之、已向敵城、鳥原之城、飛羽箭致軍勞、河田駿河守義朗兵道者也曰、夫熟觀看今日勝敗、有必討大將之佳氣、面々顯勇氣無彷徨、可抽軍功之辰也、敵兵已逼我陣、兵刃既接、自辰至午、或進或退、互盡兵術無合戰之有間斷矣、其勢宛如蚌鷓之相持也、此際濱邊敵兵有漸將通鳥原城之勢矣、於茲遣逆瀨川奉膳兵衛尉・前田志摩守「助」・四本主稅助已下殆乎百騎許橫突出濱邊、奉膳・志摩・主稅魁衆兵爲督戰、敵兵敗焉、奉膳・主稅於此場遂戰死、惜乎哉夫、然而敵兵赴山方以欲計我軍、我師不亂行伍對之挑鬪、鎌田出雲守政近・二階堂帶刀長重行能指揮之相挑之際、新納駿河守・久永九郎左衛門尉戰死、上原彦五郎「鉄肥」・宮原越中守・長谷場兵部少輔・竹内備前守同所合戰獲敵首、又鳥津圖書頭忠長折目戰之時亦從之、上原長門守亦來其場矣、山田新介・稻富新介於其左地、盡筋力合戰、漸迄未之初刻、則隆信之軍體倦兵術既竭而敗走也、于時川上左京亮

忠堅欲得隆信之首、馳加敗軍中窺見左右之際、隆信不辨自他之師高聲叱曰、隆信在此、隆信在此、向何所敗走乎、忠堅聞其言、而始知隆信之所在、欣然以爲、不可不得渠之首、而直前以戈刺伏、欲拔劍誅戮之際、旗下步卒築瀨兵右衛門尉・萬膳仲兵衛尉・出石五郎兵衛尉馳來其場、斬隆信之首也、曾木權介斬首守一軒者、家久之息男又七郎忠豐斬首強敵一人、及彰久・忠長・久信・光宗・忠元・有信・政近・義朗等以下諸將乘勝競鬪、太刀音響動山川、軍衆呼聲轟州郡、彼此勝敗未分之際、有一人之實從者首於太刀高舉揚者、進家久之旗下來云、見之乎、見之乎、今日勝利唯吾耳、遂進家久之右而急刺焉也、家久見得其幾、倏向其方踊下斬獲渠首、軍衆見聞之而有言曰、致豫讓知伯之忠臣也、之忠者也、後聞其姓名曰、江利口正右衛門一本曰、江利口左衛門兵衛、未知孰是乎、隆信之旗下有名之勇士也、今日得敵首者三千餘員也、今日戰死者上原勘解由兵衛・養田左左衛門・貴嶋刑部左衛門賴辰及圖書頭忠長之臣稻富左京・森記・長濱右衛門兵衛等也、此時義久在肥後州佐敷待勝利佳期者日已多矣、此間有巷說曰、隆信將向肥後爲進發之際、領內島地死地衆多、殆乎庶幾于千步乎、因是止肥後進發、企有馬發向、未知是否、

「義弘公御譜中」
「二卷之書在包紙」

志布志ヒリヤウ權現ニ、爲嶋津兵庫頭忠平代内小野寺相模坊參詣祈念砌、從天狗直給一卷也、

天正十二年甲申二月十五日

1395

天正十二年甲申之春、肥前州龍造寺山城守隆信催軍衆進肥後州、侵合志城、自宇都・隈本告其急來、由是爲救渠之窮困、催薩隅日三州騎步、三月中旬、太守義久公赴肥後州在佐敷城矣、忠平亦發飯野追大駕、同廿日、詣佐敷之旅館祝當春慶賀、且述發大駕於他邦之勞苦、以獻樽着也、

龍造寺山城守隆信渡薩摩援兵於有馬者聞少寡、而告欲犯侮之急於太守、因茲已島津圖書頭忠長・平田美濃守光宗渡海矣、又三月廿一、島津又四郎彰久渡楯、副之以上原長門守、如斯薩摩甲兵共一千五百餘騎與有馬氏之兵偕三千餘騎、過深江入安德衝進島原、陣柵既成矣、隆信聞薩摩兵之不衆多、以爲、以多討少宛如湯雪、仍三月廿四日、率數万甲兵來、與薩摩兵相戰、實衆寡強弱天地懸絕矣、大將島津中務大輔家久定必死、而示我軍中、諸將諸

卒共耻保生辭死、是以自辰迄午、或進或退、任運於天競戰之際、忽隆信之軍敗、匪翹諸卒不逃殺戮、隆信亦爲川上左京亮忠堅所斬首矣、今日斬獲都三千餘員也、

天正十二年三月廿六日、持參隆信之首於佐敷、其翌廿七日、太守義久公遂實檢、而後梟首畢、忠平・歲久已下諸將步卒踰居其場、而所以警衛也、委曲記于義久公譜中、以故略于此也、

1396

「守右衛門彰久譜中
在忠興一
流卷中」

天正十二年甲申春、肥之前州高來郡有馬城主有馬修理大夫鎮貴、爲龍造寺山城守隆信所侵掠、請加勢於義久主、則使令弟中務大輔家久援焉、家久嫡子又七郎忠豐・圖書頭忠長・彰久以下諸將副之、其兵三千渡有馬、抵會戰于隆信軍之期、彰久大有戰功、

1397

「中務太輔初又家久譜中」
七郎

肥前州高來郡司有馬修理大夫者、同國爲龍造寺山城守隆信所逼者三年於茲、去年之夏、欲救渠之急難、而使新納刑部太輔忠堯・川上左京亮忠堅領師旅、在有馬之際、忠堯戰死於深江焉、太守患此戰不利、天正十二年甲申

之春、遣家久・同又七郎忠豊・島津又四郎彰久・同姓圖
 書頭忠長已下一族家臣都合一千五百餘騎渡於肥前州、著
 船於有江、與有馬氏之兵僅三千餘騎也、雖然各運籌策、
 過深江入安德、一夜之間陣幕已成矣、未經數日進衝島原、
 既備陣柵於愛宕尾、差价使於敵城曰、與我和睦而降屬於
 有馬氏、隆信聞此之言、則匪翹不應諾、恃己之衆多、笑
 援兵之少寡、而催數万之強兵欲挫我之陣營、而三月廿四
 日、鳴鼓鎗來、與我之兵挑戰、衆寡強弱天地懸絕矣乎、
 吾爲島津氏之將到于他州、臨于戰場無功得生、則亡將帥
 之任、故定必死召息男忠豊於諸將之中曰、汝雖爲十五歲
 之童、今日之戰若不得勝利者、勿保生全身再歸故鄉見母
 堂之有臆念、兵家之男子而瀑戶^{（瀑）}於戰場、則流芳譽於死後
 所以不朽也、宜決戰死於今日云云、諸將士卒聞我之言者
 僉曰、各以今之嚴令銘于心肝、是以共同剛志、以死爲限
 前進挑戰、自辰至午、或進或退、未決勝負之際、遣勇銳
 之士突出於濱邊橫破之、鎌田出雲守政近・二階堂帶刀長
 重行等指揮不退、數輩雖遂戰死、彌進不止、迄未之初、
 隆信之兵筋力倦兵術竭、已以敗走、我兵乘勝追亡逐北、
 川上左京亮忠堅斬獲隆信之首、曾木權介討殺守一軒者、
 又七郎忠豊斬強敵一人、其外諸兵發呼聲、以競進盡筋力

所屠殺、轟山里自他未分之際、忽有一人來于家久之前、
 以己之太刀刺貫從者之首、高上揚之曰、見之哉、見之哉、
 今日之高名未有如于我者、遂進我右而急刺於我、我即向
 左躍下斬獲其首矣、諸將感惜曰、有豫讓之忠者也、
 姓名則曰、隆信之旗下有名、
 之去、稱江里口正右衛門云尔、
 首者渡佐敷獻 太守、故同廿七日、遂實檢梟衝木云云、
 問其

1398 「又七郎忠豊久譜中家久之子」

元龜元年庚午六月誕生、母樺山安藝守善久女、天正十二
 年甲申三月廿四日、龍造寺山城守隆信率數万甲兵、欲陷
 我之島原陣、却而敗北、臨其戰場、斬獲強敵一人、實十
 五歲也、

1399 「樺山規久譜中」

天正十二年甲申三月廿四日、龍造寺隆信肥前島原敗走之
 時、規久太刀打及數度矣、

1400 「家久公譜中」義久譜ナリ

一天正十二年三月九日、義久率薩隅日三州中軍衆首途
 而赴肥後州、同十六日、到于佐敷、而在于此矣、

1401 「全」

一同年三月廿四日、龍造寺隆信川上左京忠堅誅戮而得首、
廿七日、隆信之首遂實檢矣、

1402 「全」

一同年四月十四日、令福昌寺現住天海和尚率二千餘口僧
徒、渡有馬修大施餓鬼也、今日於八代中務太輔家久息
男加首服祝言、不可勝言也、

1403 「全」

一同年六月十九日、令大日寺法印往三舟、甲斐宗運請和
諧、

1404 「雜抄」 「義久公御譜中此本在鹿屋大乘院」

三月廿四日、於高木嶋原表隆信戰死仕候人數付事、
一龍造寺山城守隆信

- 一同常陸 手五十
- 一同家成 手五百
- 一同備後 手六十
- 一同左衛門太夫 手五十

一同治部少輔 手七十

一同三郎兵衛 手五十

一同式部少輔 手五十

一納留能登 手千 是ハ龍造寺家のおとな也、

一小川武藏 手千 是ハ老名ニテ御座候、鍋嶋弟也、

一高木兵部太夫 手五百

一同三郎兵衛 手五十

一同大学 手三十

一鍋島淡路 手百

一大田隠岐 手貳百

一成松遠江 手五十

一犬塚刑部少輔 手百

一百武志摩 手三百 是ハ隆信頼切にて候者也、

一馬場同名三人 手百

一小田九郎左衛門 手五十

一小河玄番 手三十

一倉町左衛門太夫 手貳百

一副嶋寄合五人 手貳百

一大田右衛門太夫 手五十

一同伊豫 手四十

- 一 馬渡賢齋 手三十
- 一 綾部土佐 手三十
- 一 日賀嶋惣右衛門 手三十
- 一 北嶋左衛門 手五十
- 一 成留下野 手七十
- 一 朽井主計 手式十
- 一 前田伊与 手式百
- 一 加勢美濃入道 手七十
- 一 水町四郎右衛門 手式十
- 一 神代彈正 手百
- 一 同治部少輔 手式十
- 一 同近江 手式十
- 一 同次郎兵衛 手式十
- 一 石井寄合五十六人 手式百
- 一 原口對馬 手三十
- 一 西岡美濃 手式十
- 一 土肥佐渡 手三十
- 一 田原伊勢 手式十 是ハ連々藝州へ罷登候使ニ而候、
- 一 勝一軒 手三百 是ハ隆信惣役人にて候、
- 一 茂木式部 手三十 是ハ政家之右筆にて候、

1405

「義久公御譜中」

- 一 志摩上野親子 手式百
 - 一 鴨池常陸 手三百
 - 一 澁谷 手五十
 - 一 江利口左衛門兵衛 手式十
 - 一 大坪次郎三郎 手式十
 - 一 幡内羈田寄合幡方家中 我か心之儘ニ仕候者也、
 - 一 江上内執行越前 是も同前にて候、
 - 一 龍造寺政家ハ手負候、
 - 一 鍋嶋飛彈辻延候、手千、鎧をなおし候者ハ死候、
 - 一 田尻常陸入道ハ海ニ逃入死申候、十五
 - 一 西牟田紀伊 手二十
 - 一 同美濃 手十五
 - 一 蒲池鎮運・物下河攝津守
- 以上戦死三千余、手負一万余にて候、なにかし手いかほとと申候ハ、在陳之時之人數盛にて御座候也、

天正十二年三月廿五日、自八代至佐敷奔走告來曰、昨日廿四、隆信引率太軍逼島原之陣來挑鬪之際、隆信之軍敗、而屠殺隆信已下數千士卒云云、即忠平・歳久以下悉候旅館

述喜悅之祝詞矣、吾亦欣々然、即以揚盃酒彌祝武運之得
増利也、

在高來之諸將唱凱歌於島原、而後同月廿六日、持隆信首
於佐敷來、觀者宛如堵牆也、

1406 「義久公御譜中」

「正文在末吉衆蓮光坊」

彼快寶上人開門仁法華爲奉納、其許被致越着、從夫根占
可有渡海、路次等之儀、尖ニ罷通度由、彼仁念望之故、
尙簡如件、

「朱カキ」

三月廿六日

町田出羽守

久倍(花押)

穎娃

根占皆役人中

1407 「義久公御譜中」

天正十二年三月廿七日、隆信之首遂實檢矣、義久居牀机
合掌暫爲觀念矣、漸懸衡木、則近寄其邊靜覽首面、忠平
・歳久已下諸將軍衆悉以躑居者也、義久今日發於佐敷、
酉時到於八代、寄旅宿於平田美濃守光宗之宅也、

有馬之内神白城未屬手裏、由是欲陷彼壘、今日廿九、爲評
議矣、欲令伊集院右衛門大夫忠棟・上井伊勢守爲兼兩輩
鎌田刑部左衛門尉・白濱周防介兩輩、明日朔、渡于有馬
也、爰有告來奇異於慶島之事、先是上井伊勢守之所畜春
山野鴉毛馬請得之、將市來野之入父馬、先飼厩中、忽然
脱鞫ツキモウ放出厩外、直馳大興寺前邊入毘沙門堂、中立禮拜筵
上不敢出去、是亦佳瑞非人天也、所以拜進也、

1408 『紹綱日記』

一天正十式年甲申、肥前龍造寺高木之有馬殿を責由聞得
ける、如此候而龍造寺も後へ氣遣なく肥後之國一方江
取向候者、薩州番手も可爲太儀とて、有馬かた爲見次
と、安徳といへる在所江番衆を差籠らるゝ、落去未見
得、去程に 義久御方中務大將ニて渡海有て、島原と
云城之通路を切、龍造寺も自身走越、彼城見次鉢也、
高信之勢なん萬騎と可云様なく、薩州衆五千三千之衆
ニ而たいやうすへき事にもあらず、海路可思遣、規久
ハ中務同心にて罷渡、太刀打數度ニ及、然者高信打負
引退處ニ、なしはのかすへき、戰場ニ而高信を始數
輩を打取早、亡敵之首懸渡侍衆八百餘人也、如此御手

遣之爲後立と、 義久八代江御發足、高木江渡海被成たる人數、八代江有ける規久弟七郎久高ハ伊集院下野守同道にて、肥後隈本より内の空閑〔こか〕・わいふ〔服〕・かふし〔合〕・なとまで打廻けいりやく也、

「上井日記」

四月

一朔日、▽出仕如常、△伊集院〔本邑〕・親貞・拙者御用之由候間、

御前へ參候、鎌刑〔鎌田政意〕・白周〔白浜重政〕已上五人參候、有馬表・肥後

表兩口之御行、又ハ御存分共被仰聞候、又御申上共也、

▽從夫御暇申、躰而從德之溯出船仕候、此晚三角之養

之浦へ着船候、鎌刑同泊也、拙者着候へハ、躰而鎌刑〔殿〕

父子御酒被持拙者船へ被載候て、閑談共也、其後拙者

御酒持せ鎌刑舟へ礼申候而、遙く雜話共也、

一二日、忠棟之船相待候処ニ、夜中ニ通之由候間、早旦

養之浦ヲ出船候、嶋原にて忠棟へ追付申候、此沖にも

地下人なと御酒共くれ候、從夫三江へ着船候、諸番衆

船元へ被出合、吾々着津目出由也、忠棟同心ニ麟臺御

宿へ參候、御振舞也、此間之地頭嶋原伊賀守と申者、

圖書頭殿も御覽候間、忠棟・拙者見參申候へと新武〔新納忠元〕

と頻承候、麟臺御覽之上者無是非由候て見參仕候、祝物共くれられ候、忠棟御前候、平戸之松浦肥州へ計策之書狀、八木越後守へ認させられ候也、宿元餘々あかり城にて人せきにて候間、拙者船十二段帆にて家之内之様に候間、此夜ハ船中ニ明候、

一三日、神代・井福・森山なと船より各見償被成候、忠

長・忠棟・拙者同船より見申候、小村くハ、足輕舟

漕付候て放火共也、井福ハ柏原〔有明〕左近將監小舟より遣候

て、言戰なと申させ候、從夫城内より落合頼存候由申

候間、將監も陸に下候て菟角被申候、事和申候条、又

八木越後守相添指遣候、無別儀可申入候、併先刻騒動

ニ妻子等内端へ遣候衆多々候、是を今日船より召寄候

処、只今之船數を見候て從中途引歸候、各々見させら

るゝ前候、然間手火矢なと射させられ、城近き在家な

と放火させられ候て、先々今夜ハ船を漕退なされ候ハ

、明日・明後日之間必々可申入由也、眞実ハ不知候

へ共、彼城之様子可持堪躰にも不見得候条、任其儀、

各番処くへ歸帆候、此夜も拙者ハ船ニ居候、夜半之

鐘聲ハ吐氣聲ニ替たるまてにてこそ候へ、旅泊之躰對愁眠候、

一四日、早朝平田新四郎殿・猿渡越中守殿など船中ニ被

來候て、閑談共也、此日平良籠へ宿候間、船より下候、

一五日、平田濃州宿へ御礼申候、川上三州・有馬鎮貴・

山田新介殿など拙宿へ礼被成、御酒にて雜談共也、神

代・井福などより頼存候由を申候へ共、未然之候間、

山田新介殿・安富左兵衛佐同船にて可被聞果之由申候

て遣候、柏原左近將監・江田安藝守、拙者前より右之

衆へ相添遣候也、各酉刻計歸帆也、明日必神代より質

人取替可申由定候也、山新へ、忠棟大野へ宿被成候間、

彼方へ直ニ被罷出候、從有馬殿も、神代之儀又ハ井福

・森山よりハ、昨日到千岩表質人指出候由承候、△

一六日、早旦柏原左近將監殿被來、夜前井福より先日取

合候使兩人來候、此方へ質人差上候すれ共、杜山へ申

合事候間、千岩へ質人指遣候、備者八木越後守・柏原

方先日之首尾にて候間、早之請取なされ、狼藉等之儀

無之様頼之由申來候也、聽而此等之由書狀を以忠棟へ

事問申候也、可然之由返事候之条、八越・柏將・宮崎

衆・拙者人數相添、井福之事請取せ候、神代も此日請

取にて候、川上參河守・比志島式部少輔殿請取也、此

外西川・森山など、諸所之衆請取なされ候也、平田濃

州・穎娃左馬助殿・山田新介殿、拙宿にて閑談共也、

一七日、忠棟神代へ爲一見越着被成候、我々も其分候、

明日於彼方各着合御談合可有由相定候、拙者事、神代

にハ然之宿無之候間、又々平良へ罷歸候、肥後表小

代殿御奉公被申候、就夫慈之衆高瀬表まで打入之由風

説也、種子島殿船數卅艘計にて神代へ此日被着候、

一八日、於神代御談合候、衆、忠長・忠棟・光宗・新納

武州・川上參州・穎娃殿・比志島殿・山田新介殿・鎌

田出雲守殿・拙者、右之衆也、此表御行之事、當郡中

南蛮宗にて、温泉山坊中無殘破滅候、然者御再興之御

立願此度被成候、左様之儀ハ御神領過分ニ候ハてハ難

成事候間、此等之御談合也、伊佐早表計策之儀等出合

候、此日宇土殿より使書并酒肴預候、其使物語候、肥

後表ニ茂敵六十余被打取御勝利之由也、彼表へも北郷

彈正忠殿・吉利下總守殿・伊集院下野守殿などを始、

數多之軍兵被差登候也、此晚拙者ハ井福之御番ニ相定

候て越着候、地頭神代駿河守へ宿申候、舟本までさし

出也、

一九日、從早旦、伊地知伯州(重秀)を始鹿兒嶋被來候て閑談也、

此日川上參州・伊伯州にて有馬殿森山へ被居候ニ可被

仰之由、昨日御談合候、然者川三此方へ越着也、伊伯も呼申候て昨日之出合物語申候、趣、内端之番衆ハ不入事候間、深江・安德・嶋原・三江、此等にハ有馬殿火之番等被仰付、又耕作時分に候間、下々へも然々被仰付候て肝要候、其外之諸城へハ薩戸衆御番等可申付之由也、又ハ安德上野守・安富左兵衛尉別而有馬殿爲、又ハ薩戸爲御奉入魂被仕之御礼共也、上原長州より使預候、先日嶋原へ籠城候大村衆數多之内、四人然々之者にて候、彼衆歸宅申候て別而御奉公可申由候条、當者質人召寄候へ、歸宅させられへき由被仰理候、然間一兩日中質人參候由到來也、

一十日、海向五ヶ浦打廻候て可被見償談合候て、忠棟・拙者罷渡候、舟數百余艘也、五ヶ浦不殘放火共候、爰彼にて矢軍なと候、敵なと被討取候、未之刻竹崎椿一覽之爲諸船指寄候処、火矢射付候間、其促責崩候而悉皆放火候、敵少々被討取候、倅者福富平介・佐藤兵衛尉なと分捕仕候、其後船上にて勝吐氣也、川田駿河守殿へと候つれ共、隆信頸捨之吐氣候て餘々無程候ニ、雜兵之頸にて引導ハ如何之由候而、鎌刑軍敗被仕候、川駿船ニ頸被揃候て、彼舟にて作法也、從夫兵船津々

ニ歸帆候也、此夜從神代、忠棟書狀預候、今日拙者手之衆辛勞共仕、殊ニ高名仕候祝言承候也、次從有家、上原長州書狀爲披見被持せ候、趣、大村より質人銘々來候、口之津へ着岸之由也、就夫大膳房・市成掃部助、先刻島原にて大村衆へ懸引之使共被申候、然ハ彼兩人有家之様ニ越候へ、大村衆へ被爲合候する由也、若又時宜ニ依大村まで同心之事も可有之之通也、當所へ彼衆被居候間、即申付候也、從八城本野州書狀到來候、先日被仰出候大施餓之事、來十四日たるへく候、福昌寺嶋原へ御越候する間、諸篇可申調之由也、

一十一日、▽安德上野守被來候、即致見參、御酒寄合候也、太刀・百疋預候、此日忠棟ハ先日御使として渡海候間、爰元談合様子なと御申被成候するとて、如八城歸橋也、光宗も、太守様始而八城へ御光儀被成候、然者目出之由共申可被成爲參上也、圖書頭殿ハ其後御無音之儀、三江へ本田治部少輔にて申入候、并ニ御番所同者此方へ御なをしも候へかし、諸篇可得御意由申候、一兩日中森山へ御移可有候、左候へハ此方も近候間、御談合等節々被成候する之由也、△此日伊佐早表計策之儀、川上參川守殿へ談合申候、彼方よりも比志嶋

源右衛門尉殿にて巨細承候、神代殿書狀として認可被遣之通定候也、▽從頼娃殿使者預候、珍酒送預候也、△

一十二日、藥師如來へ別而讀經等申候、川上參州・神代殿同心にて此方へ越被成、伊佐早計策之儀談合也、并彼方へ神代殿書狀として可遣案文、八木越後守へ談合申候て書せ候也、▽其後殊之外酒宴共候也、△ 圖書頭殿・新納武藏守殿より、今明日ハ餘々悪日にて候間、明後日森山へ可被移せ之由、使書にて承候也、

▽一十三日、圖書頭殿へ長野談路守にて申入候、來十六日

塩時と申、吉日之由川駿被申候、然者海向被打廻せ、猶々被御覽合候て可然之由申候、於御納得者、三江より内端之船早々可被仰調之由申候也、此趣三江へ被居

衆へも御談合可然之由被申候間、其御杖量被成由也、有馬表などへ船之儀、即時ニ被仰渡之通也、此日義虎平良へ御番被成候、拙者へ御礼として入御候、樽御持せ也、菟角御会尺共申候て酒宴共也、此晚伊佐早へ計策之書狀持せ候也、神代殿書狀也、△

一十四日、▽^(親心) 柁山太郎三郎殿御出也、酒肴御持せ也、參會賞翫仕候、山田新介殿被來、閑談共也、△明後日兵船指出候する談合共申候、新武州より使者也、今日森

山へ御番ニ罷越候するを、麟臺温泉嶽ニ御參被成、然者御下向之刻御用之由候間、如何様明日わたり可罷越之由也、麟臺御用之儀候へ、無是非候、併森山不番に候間、手之衆成共早々被差遣候て肝要之通返事申候、^(親心) 栖本上野守殿より使者預候、久無沙汰之由候て、看過分ニ被送候、

▽一十五日、看經等別而仕候、各番衆中札儀被來候、祝言まてに御酒參會候、伊伯州宿へ礼申候、殊之外御酒酌酌共申候、麟臺より御使也、明日打立之事相定候へ共、今日順風悪候間、逆も有馬表之船廻間敷候間、先々留候て肝要之由承候也、尤之由申候て、諸所へ明日之打廻留之由申渡候也、

一十六日、早朝打立、爲御談合、三會へ麟臺御座候間參候、着船之刻、自八城巢山爲御使僧越候、趣者、爰元辛勞申候、次ニ者堺目計策等之事、無油断様ニ御頼之由共也、次先日三會へ打入之時分、鹿兒嶋少々、其内御小者衆など宿取ニ彼方へ行候処、狼藉仕候由、圖書頭殿内衆有馬武藏守被申候之状、然者実否相礼候て、鹿兒嶋聊余之儀候へ、其噉申候へ、又虚説申付候へ、其人一途麟臺御噉被成候へとて、御小者衆八城へ參候

へ共、無上覽、巢山へ召烈させられ、拙者何と様ニも懸引承合喫可申之由候て、被遣候也、從夫伊伯を以麟臺へ此由申候、僮者其事に候哉、驚被成候、併狼藉成敗之事、稱被仰付被指遣候間、内衆も不紛堅申候処ニ、如此候ハ力ニ及れざる儀候、麟臺御身上ニ御思案被成候する迄候由也、左とも候てハ餘々事六ヶ敷罷成候する欵、堺目御談合等者次ニ罷成、ケ様之不入事ニ御隙共入候てハ笑止（之み）ニ儀候、左右之口、新武・伊伯被承合候、互ニ然々之儀無之候、只有馬武藏守餘々早口之様ニ聞得候間、彼人へ被失面目候て欵可然候すらん、新武・拙者存分共候ハ、申候へ、被任其儀候する由麟臺承候条、兩人分別如此存由申候也、僮者兩人分別ニ御同懷之由候て、有馬方へ被失面目、口事邊事果候、然者御小者衆々と巢山ニ此由申分、八城之様ニ參せ候也、爰元様子、能仕合巢山越にて候、此次（長辰）稻富新介殿相添被成、八城へ御申被成候て可然由出合候て、条々御申也、此夜鷄鳴ニ伊福へ歸帆候、伊伯・矢野出雲守など同船仕候也、

一十七日、比志嶋式部少輔殿爲御礼御出也、御酒振舞候也、新納武州森山御番ニ通候とて御座候、御酒預候、

參會候、閑談共也、此晚加治木衆肝付藏人殿へめし振舞候也、河田駿河守一昨日十六此方へ被來候て、牆之繩結共被改候、并城戸之鎖なと被請取、加治（地）候也、拙者留守にて候つる間、其礼儀申候也、

一十八日、從弘曉觀音へ別而讀經なと申候、地下出家衆あまた被指出候也、此日穎娃左馬助殿・山田新介殿船にて伊左早表見させられ候、直ニ此方へ被來候、穎娃殿より京樽一荷持せ也、今朝拙者符ニ出候て、狸手火矢にて射候、是を矢野殿へ料理させ候て振舞申、終日酒宴也、穎娃殿・新介殿閑談也、堺目様子共細々物語也、從新武使者にて、昨日會尺之礼也、并堺目、大口衆・拙者手之衆談合を以見せ度由承候也、從麟臺八城へ御用之儀候間、手之衆者然と被召置、御一身近々御參上有度候、如何候する哉之由、使節にて承候、拙者留守にて御返事不申候、

一十九日、從有馬殿、爰元辛勞申候、無沙汰被成由候て、酒肴贈預候也、圖書頭殿へ敷祢越中守を以申入候、昨日御使者預候、留守にて御報不申候、八城へ御參之由候欵、從御前御參上候へなと候ハ、不及是非候、御私之御存分迄候ハ、此節者爰元御隙入御校量之前

候間、御留肝要之通申候、若又別条御存分候共、此節
へ如何之由申候、題目拙者一人罷居候てへ、爰元様子
何篇事果間敷之段申候也、御返事、八城へ御參上之事、
此節者御無用之由申候、鎌田出雲守なども拙者同前ニ
被申候へとも、はやく御打立被成候条、先々御參被
成へく候、御内存等無之候、併今度打入狼藉共被申候
而、各三會ニはなれかね被居由世間物沙汰候欤、然間
先々八城へ御參被成、又々此方御番之由候者、直ニ伊
福之様ニ御着船たるへき由也、此日伊伯・八木越など
終日閑談也、川參・比式より使預候、神代殿此度此方
へ御奉公候、就夫海向之領知少々不知行共候、然間此
方へ一二ヶ名可被仰付之通、先刻忠棟へ佯被申候、其
儀川參・比式存知にて候、拙者へ御談合肝要之由、棟
被仰候由也、不紛海向不知行之処少々候欤、併此度被
申入候事へ無了簡便之事候、少も忠節之条無之候、既
ニ當城などハ從神代先ニ申入候、如此共候間、右之条
我々ハ納得不申候、然共各劫者などへ談合仕、追而可
申理通返事申候也、

一廿日、森山へ越候、川參・山新・伊伯・八越同心仕候、
先新武宿へ行候而、諸篇打合談合共申候、種々會尺共

也、(親也)栖本殿拙者へ御酒預候、賞翫共申候、從夫地頭森
山殿へ礼申候、三献也、其後山田之城此度捨候、若々
持せられ候て欤可然候すらんと、右之衆同心にて見申
候、無余々椿にて候也、驥而此晚歸帆候也、

一廿一日、從武州昨日參候、并御酒進之候由、使僧にて
礼承候、此日從八城伊地知越中守・和田玄番助兩使に
て、爰元辛勞申之由蒙仰候、兼又条書を以、此界之様
子諸篇御談合之由也、然間即新武州・河上上野守殿・
同名三州・鎌田出雲守殿・比志嶋式部少輔殿・上原長
門守殿、此衆明日於此方可爲御談合候、早々越着被成
候へと書狀にて申遣候也、御使兩人へ食振舞候、種々
閑談共也、去十九日、太守様者御歸鞍之由也、今暫
御滞在候すれ共、被思召子細候間、与風御歸院之通被
仰分候、親貞御供候て歸之由也、八城へハ武庫公・忠
棟・光宗然と候由也、麟臺御事者暫爰元御入候て、拙
者へ諸篇御談合之段被仰候処、歸帆被成候、無是非之
通御使物語也、肥後表之儀、下野之城輒屬御手由也、
宇土殿八城へ出頭候つる由也、鎧・太刀進上候、從
御前も顯孝へ御鎧被下候由物語也、去十四日、中書公
御息御元服被成候、種々御祝言共之由、是も御使物語

也、△

一廿二日、於拙宿談合也、新武州・比志嶋殿・上原長門守殿・鎌田出雲守殿・伊地知伯耆守殿・御使兩人・拙者也、御談合相定、有馬とのへ伊伯・鎌雲にて申出候、趣、先年已來 太守様無二奉頼之由候間、度々軍衆渡海候て、勝利眼前候、就中今度隆信を始數千騎被討捕候、味方粉骨之事、各御存知之前候間無是非候、當者此節之事、諸勢日數を定渡海候条、永々逗留難成候、其上伊佐早御計策御行等も、此刻へ如何候する哉、然者諸卒可被打歸候、爰元諸城永々御格護肝要候、兼又今度温泉山御再興之御願候、本領之事へ被仰ニ不及候、爲修造料一二ヶ所寄々、此方より可被知せ候、其餘者悉皆鎮貴御校量專一之由申候、殊更從神代山田までへ、先規も有馬殿自領とハ不聞得候、西郷殿格護之通申者共候、併是も可被指遣候段申理候、返事之趣、如仰先年已來御方打頼入候外無他候処、兩度之御出勢打續而之御番中各御軍勞、殊更此度御勝軍無申及候、就夫、御高恩故有馬家之面目此上無之候処、剩落居之諸城被仰付之由、忝段不申及候、其上如此申上事、乍我笑止ニ存候へ共、俸家中之儀御存知之前候、逆御事ニ、今

一月も二月も覺迄に御番衆被召置候て可被下候、左候

ハ、其内爰元蹈靜候する由也、當者御神領之事、是又乍勿論何と様にも御意之外有間敷之返事也、前此方より申候意趣も、當時爰元拙者若輩と申、一人罷居候、先々存分共申迄候、自然寄合中各被承、後日御談合相吳之事も可有之候欤、是又届置候也、返事へ安富左兵衛尉・大村兵部太輔被弁由、伊伯・鎌雲被申候、右之談合之趣、後日も衆口同意之儀相吳有ましき由、右談合衆堅申組候、▽談合衆へ夕食振舞候、酒宴共也、各當所へ此夜ハ留也、新武ハ拙宿へ被留閑談也、△
一廿三日、▽有馬殿へ朝食振舞候、座鉢客居鎮貴・安德上野守・安富左兵衛尉、主居拙者・伊伯州也、有馬殿より太刀・三百疋・樽一荷并着預候、左様之御酒など賞翫仕、種々之儀也、有馬殿内衆召出御酒也、△此日又各被揃候て談合也、然處、先日八城へ遣申候稻富新介歸帆也、爰元談合衆意分、委細被聞召、太守様も寄合中も御同意被成候て、此度屬御手ニ所々、悉皆有馬殿へ被遣、御神領之儀迄申調、諸勢共ニ先々皆歸帆被仕候て可然之由候て、稻新徳之洲へ被參候処、麟臺彼方へ着船被成、今少御談合有へ候由被仰、新介同

道被成、又八城にて談合被成、承候趣、此度御所感被成候所々、有馬殿へ悉皆被下候する事も、又二三ヶ処も御格護被成候するとも、更ニ各無取覚候間、河田殿此方へ被居候者、御圖被申候て可然候、又頃八城へ被來候者、其御校量候て細々可被仰越之由也、然者昨日鎮貴へ申理候趣にハ少違候条、彼前へハ今度諸勢先々打歸候する由申候処、猶々御番衆の事承候、是ハ拙者一人して輕々と返事難申儀候、然者寄合中へ相尋、追而可申之通申候、さて八城へハ、伊越・和玄にて御返事申候、条々相應也、爰元諸城御格護様子、御使兩人、昨日よりの儀定御存知之前候、然処稻新を以御圖之事被仰候、吾々存候処者、御圖おり候共、爰元ニ二三ヶ処と御格護ハ可難成候欵、其故者、所領無余分様ニ聞得候、地頭持にも一所持にも誰人領掌仕可罷移所にてハ無之も哉候すらん、望候て移候する程之人ハ、御用ニ立間敷候、又被仰付御爲ニ成候する程之人ハ領掌被中間敷存候欵、然者御圖ハ大事之儀候、爰を能く御校量被成、其上御圖可然候欵、菟角此方へハ拙者一人罷る候、各其元へ滞在候間、能様ニ御談合被成、急々可承之通申候、并御番盛等も、從八城委細可承之由申候

也、此等之御返事被承、兩使馳而出船也、談合衆(もカ)所々へ被歸候也、此夜中兵船可出談合申候つれとも、順風惡候て留候也、

一廿四日、▽地藏薩埵へ讀經など別而仕候、鹿兒嶋衆など寄合、終日將碁にて慰候、隙々御酒にて雜話共也、△此日拙者手之衆少々、伊佐早口陸路之見切ニ遣候也、

▽一廿五日、天神へ別而看經共申候、此夜兵船可指出之由諸所へ申渡候也、新武より使預候、旅泊自他之儀ニ付、發句案し出候由候て書付預候、

事問よなれも旅ねの郭公、如此候、脇可仕由申候て留置候也、從義虎公御使書預候、種々左礼文章也、新武隨身候て平良へ可參之由共也、彼御宿實子惡候て、御座候する処なとさへなきよし共承候て、心よくいふくの人に見せまほしたいらかならぬ宿のすのこを、と芳札之奥に書付被下候、拙者も御狀之報答相應ニ仕候て、奥ニ、御すのこのたいらかならぬやとりよりいふくてふ名の風そはけしき、なと々戲言共書加、尊報仕候也、西川名寺家衆など被來候、御酒など持せられ候、大野へ落人候とて、此方へ被遣候、嶋原出雲と云者先日嶋原より落失候、彼者年來召遣者にて候、出雲ハ當

時梁川へ居候、彼者ハ少代へ廻候て、船をからくり候て落來由申候也、肥前衆敗北之跡共委語候、別ニ題目無之候也、不審之者にて候間、擲置せられ候て可然之由申候也、此晚兵船指出候する有増候つれ共、敵方説共聞ゆる子細候て留候也、

一廿六日、鹿兒嶋無足衆なと少々暇被乞候間、歸帆させ候、從新武、天氣悪候間、今日此方へ越被成候する由候つれとも留候、明日同心ニ、義虎公へも御礼有度由承候也、從義虎公も御使書にて、明日可參之由承候也、此日昨日武州之發句之脇申候て遣候、

うつし植たる軒のたちはな、と申候、大笑々、△

一廿七日、米良權助より無沙汰候て雉被送候、使者持せ也、新武誘引候間、同船にて義虎公へ參候、先神代へ船着候て、川上參州へ談合之儀候間、中途ニ被出合、被聞せ候、其砌船船慈舟ニ紛候て通候、無何事候、從夫義虎へ參候、種々御会尺共也、▽新武・八木越・柏原將座ニ被參候、已後忠永も御指出被成候、御酌などにて終日酒宴也、其後頼娃殿へ礼申候、彼方にても種々會尺共也、△夜入候て出船申候、從義虎兵船五艘にて、伊福まで御送被成候、

▽廿八日、種子嶋殿、同名衆にて承候、無沙汰候間、自

身礼ニ御座候すれ共、養性氣にて候由候て、酒肴持せ也、即使者へ寄合申候也、(小川有喜)龜嶋殿より、同名衆にて礼

承候、猪一丸・的矢預候、天草殿より肴音信也、八越・矢野出雲守なと被來閑談也、亭主吾々ニ御酒振舞也、

種々肴共也、此晚鹿兒嶋衆十人計夕食振舞候、御酒にて雑話共也、義虎より、昨日參候御礼承候、使者也、△

一廿九日、如常、川參・比式より比志島源左衛門尉・白坂二人にて承候、神代殿へ昨日質人ニ八城へ可被指出

之由拙者申として、川三・比式・山田新介三人被仰候、何と様にも御意次第可被罷渡之由也、當者有家・安德

あたりにて支度共候て、躰而渡海之由也、可然之通返答申候、▽新武より使也、先日粗承候深江之牢人、森

山へ隠居候、十人余にて候へ共、余者森山殿類ニ被頼候由候て侘候間、先四人生害させらるゝ由也、其妻子

・下人等如何暖候する哉、格護等之儀也、先々地下役人へ被仰付格護させられ候て可然由、返事申候也、從

鎮貴大村兵部太輔にて承候、此堺諸篇、吾々罷居候内ニ質人等之校量肝要候、次ニ者森山より一里程さきに、

城ニ可罷成処ともあまた候、是を誰劫者などに見せ申

候ハ、執困度被思之由也、即宮崎衆五六人申付、大口衆なと寄合候て可被見之通申候て、遣候也、又四郎殿より御使者也、其後御無沙汰之由也、次ニ者御通之御人數皆々御歸帆候、然者頃御歸帆被成度之由承候、上原長州御供にて渡海候、彼前よりも書狀を以、始而又四郎殿御出張被成候処、御仕合共宜候、日出候、然者先々早々御歸帆可目出存候由也、如承候、此度始之儀候間、早々御歸可然之通申候すれ共、上長先日存知之前候、八城へ御談合を以、神代殿を始多々質人ニ可被罷出之儀候条、此等之儀申調候する迄ハ、御勘忍可然之通御返事申候、上長返書にも委申候、町田周防介殿へも傳言ニ申候也、種子嶋殿へ使者遣候、猪一丸進之候也、

一晦日、野村備中守・同名加賀守、忠棟八城へ御座ニ暇之事申候へハ、早々可罷歸之由候とて、伊伯州にて被申候、曾以納得ハ不申候、併忠棟へ指越候て御尋被申候上ニ、拙者存分申候ても不入事候、早々歸帆御校量ニハ過間敷由申候也、鹿兒嶋衆各八城ニ被居候間、此方へ被居人數先々彼方へ渡海候する侘承候、此衆も八城より一左右までハ抑留申度候へ共、野村方兩人可罷

歸由候上者、無是非之由申候て歸候也、伊伯・八越者、拙者罷居候する迄ハ留被成候へと申候て留申候、野備者來月八日吉野御馬追たるへく候間、從夫内ニ參着候之様ニ歸帆之由、忠棟より承由被申候、其使、忠棟も昨日徳之洲へ舟元ニ下之由申候也、彼者ハ昨日朝出船仕候由申候、種子嶋殿より同名武藏守にて、無沙汰被成候、養生氣之由被仰分候也、使前より鹿草預候也、鎮貴へ神代殿舟元宿之儀申候、如有馬早々遣申候へと承候、西川質人之事も、有馬ニ格護候する由也、志岐兵部太輔殿千々石之番にて候か、無沙汰候とて礼承候、八越にて承候、深堀へ計策之書狀去中旬之比被遣候、其返書ニ三通被見せ候、いづれも伊左早同前たるへく候間、彼方へ先々御計策候て可然候、左候へハ、深堀之事ハ異儀有間敷之趣也、其内一通にハ、天草殿へより計策之儀共候、然者彼方之事等承合由也、義虎公御使預候、巽伯耆守殿・税所上総介殿也、此二三年御番手諸所へ節々被成候、就中夏計一兩年續候て御番候間、時分故一段民等勞果候条、自然此節御番前にて候ハぬ様ニ御憑之由也、菟角御番盛者從八城被成へく候条、御存分者委承置候由申候也、御自身も御養生氣候間、

先く歸帆被成度由也、是者人質沙汰なと當時申出候之
 条、暫者被聞召合候て肝要之由申候也、△

「上井日記」

五月

一朔日、早朝打立候て、温泉山爲一見參候、(新納志元)新武同道申

候、千々石のことく廻候て參候、言語道断殊勝之靈地
 不申及候、悉荒廢之跡無是非候、四面大菩薩漸礎計殘
 候、其跡にて念珠とも仕候、哀成爲跡也、寺院之跡な

と見候て哀涙濕袖候、住馴し我古郷も頃や浅芽(芽)か原に
 鶉鳴らん、と哉らん三井寺を讀れたる由共被思出、あ

はれく、さて四面大菩薩之御前ニおり居て、各破籠
 之餉なと受用候、新武・栖本殿(親也)三人參會候、互之御酒

共賞翫候、良久罷居候也、それより新武・栖本殿ハ森
 山のことく被歸候、拙者ハ如井福直ニ罷歸候、七曲・
 十五曲なと申坂共候難処也、七曲坂之下にて又御酒・

茶湯共也、夜入候て井福ニ歸着候、地下種々酒肴持來
 候て、物詣之祝言共申候也、△

一二日、長崎へ先日爲使遣候既肥泉玉泉坊・湯之浦衆早
 水方歸參候、先日嶋原へ籠城候大村衆より、我々前よ

りこそ、身命を御助被成候御一礼ニ人をも進上申候す
 るを、大村へハ理泉入道被打入候間、妻子等家内をも
 打捨、長崎のことく來候、然者當時夫の一人も不任心
 候条、御無沙汰背本意候処預御使ニ候、過分至極之由
 也、南蛮僧万天連よりも、西浦廿ヶ所計之質人召取候

而格護候、向後御入魂所仰候由也、質人銘々書記被持
 せ候也、長崎地下來者、有馬殿(論也)彼方ハ進退たるへき様
 ニ存候由、使僧物語也、是非以從鹿兒嶋御直領にて候
 へてハと、是も被申候也、彼方へ浮地などの候をも、悉

皆南蛮僧分別にて領置候由也、▽此日從八城忠棟廿七
 日之日付之書狀到來候、有馬玄番と哉らん申鹿兒嶋町
 之者持來候也、趣、先日伊越(伊地知重徳)・和玄にて申候条々、慥

屈候、此方談合衆分別共被聞せ候て、彼方之衆も御同
 前候間、御神慮も入間敷候、菟角番盛なと最中候、追
 而巨細可被仰越之由也、兼又鹿兒嶋衆之事、去年御出
 勢ニ罷立來者暫居留にて候、其内も、御諏方御頭懸

者歸宅之由也、

二三日、毘沙門へ別而看經共申候、八木越(島也)後守御諏方頭

懸にて候間歸候、其次鹿兒嶋へ、爰元之様子条々申上
 候也、吉田美(傳)作守・和田玄番を以從寄合中承候、并書

狀・番盛之日記相添候也、意趣、先日爰元御格護之儀

ニ付可爲御鬪欵之出合共候つれ共、此方談合之様共被聞せ候、殊ニ拙者一人之前よりとハ申て候へ共、(稱信)鎮貴

へ爰元様子一ヶ条申なる、御寄合中同前之事に候間、

御神慮も入間敷候、當者番衆暫可被召置之由先日懇望

候間、被召留候、然者寄々御番にて候ハてハにて候俟、

嶋原・三會ニ御番たるへく候、余々諸城御番等堅固ニ

有馬殿可被仰調之由申候て、諸勢者質人など執調候て、

拙者同心ニ各歸帆可然之由也、兼又從薩廣之御格護処、

又有馬殿へ被下候処ハ、いつかた／＼と追而從鹿兒

嶋以御談合可被仰定之由也、當番盛之衆、川上左近將

監殿・吉作州を始鹿兒嶋衆少々、義虎公・種子嶋殿・

天草嶋中衆、凡此衆を以、嶋原・三會之事ハ御番可開

目之御盛也、即右之所々へ申渡候、義虎公へハ、吉作

・和玄直ニ被參候也、此日神代殿爲質人八城ハ渡海候、

先安德へ中宿へ被行之由也、自身此方へ暇乞ニ被來候、

向後身上頼之由共被申候也、此晚吉作・和玄振舞候、

新武・伊伯(伊地知重秀)同前、深更まで閑談共也、此夜從義虎公御

狀被下御尋也、吉作・和玄にて爰元御番之由候、何と

様にも御下知次第候、當時御父子御座候、來端午就御

祭礼御隙入事候間、歸帆被成度由也、御報にハ、此節

者諸勢歸帆之刻ニ候間、肝心之御番手にて候、然者乍

御苦惱虎公奉頼之由寄合中被申候条、御父子御談合被

成、御一人ハ御歸楫專一之由申候也、川參・鎌雲(川上忠實)爲

談合明日可被來之由申候也、△

一四日、吉作・伊伯を以有馬殿へ申候、先日拙者一人前

より如申候、最前之御談合者嶋原一処さへ落居候ハ、

番衆をも不被殘諸勢可被打歸之通、鎮貴へも御届共候

キ、然処覺外(龍造寺)降信を始千余騎被打取候て、剩諸城御手

裏ニ參候条、于今御番衆等曾以入間敷儀候へ共、強而

懇望候間、寄々嶋原・三會ニ御番衆可被召置候、當者

諸勢歸帆たるへく候、諸城御番堅可被仰調之由申候也、

▽自然從彼方先日拙者申候御神領等いつかたるへき

か、又鎮貴へ拜領ハいつれの所々たるへき欵之由被相

尋候ハ、それハ於鹿兒嶋各談合被成、追而可被仰定

之由候て、あいしらい肝要之由、兩使へ申候、并軍衆

歸櫓の舟の事頼入由申候也、返事、先日之筋のことく

爰元諸城皆々格護可申之由、目出候、殊ニ一節御番衆

之事頼存由候処、是又被仰付候、忝由也、向後御入魂

奉頼候由也、嶋原・三會ニ御番衆可召置通候、御意次

第候、彼兩所之儀ハ子細共候間、必竟ハ鎮貴格護申候
 ハテハ難成通、對兩使物語之由也、此等落着之使者、
 鎌田雲州・伊伯州被申候、吉作ハ變而此日嶋原のこと
 く歸也、鎮貴拙宿へ被來、爰元様子等終日懸引也、大
 野方質人として八城へ可召烈通鎮貴へ申候、是者有馬
 ニくつろかさる様ニ然と可召置候間、吾々心遣入間敷
 由也、夕食振舞候、衆有馬殿・新武・鎌雲・伊伯・有
 馬右衛門尉・安德上野介(繪惣)・大村兵部太輔、此衆也、深
 更まで酒宴也、從有馬殿段子一端被持せ候也、
 一五日、節供之様子如恒例、衆中なとへ粽肴にて御酒銘
 ゝニ參會候、此日嶋原へ越着候、伊伯同船仕候、船中
 酒宴にて候、酉刻計嶋原へ着岸候、吉作・和玄など指
 出也、新武類船仕候、是ハ安德へ被通候也、
 一六日、新武より使を以今朝無沙汰之由也、拙者も使を
 以新武へ、神代殿今日出船たるへき由申渡候、并嶋原
 殿も拙者ハ不知案内候、彼人も今晚・明朝之間出船た
 るへき由、武州前より可被仰渡之通申候也、神代殿二
 三日支度候て渡海之由候、如何候する哉之新武返事也、
 又使進之候て、類ニ出船たるへき由、武州可被仰取之
 由申候、鎌雲も安德へ今日被着候、然者兩人談合被成、

再三被仰理候間、さてハ明日渡海可仕之由被申候之返
 事也、此朝忠永公多比良ハ御番候間、内衆巽伯耆守殿
 ・市來加賀守より書狀候、趣、神代殿ハ質人ニ被指出
 候、内衆伊佐早へ談合申、人數繰入手替候する企之由、
 蜜被聞付、乍楚忽註進之通也、此狀も、新武・鎌雲爲
 存知とて、安德へ持せ候也、此日川上左近將監殿・吉
 作、此外鹿兒嶋衆振舞候也、酒宴共也、此晚新武・鎌
 雲へ、神代殿必明朝之塩ニ出船肝要候、今夜ハ御兩処
 無油断番被成候て可然之由申渡候也、從有馬軍衆送之
 船等當津へ着岸也、日記を以請取せ候也、
 一七日、早朝舟盛事成候間、諸所之人衆へ乗船遣候也、
 午刻計從嶋原出船仕候、川左・吉作、此外鹿兒嶋舟元
 迄被指出、御酒など也、從夫安德へ塩かゝり仕候て、
 新武・鎌雲など待合せ候、神代殿も同出船、宮崎衆中
 敷祢越中守・上井右衛門尉(繪惣)、其外廿人計神代殿へ相添、
 如八城遣候也、嶋原殿ハ一兩日支度可仕之由、類ニ新
 武まで被申候間、當者吾々跡より一兩日中出船可然由
 申定候也、安德上野守沖へ船にて被來候、御酒肴など
 持來也、其次面談ニ、嶋原殿一兩日中船等被仰調、八
 城へ可被渡之由申定候、請取由被申候也、此夜ハ柳之

戸へ懸候、従未明打立候て、

一八日、未刻計佐敷へ着船候、即宮原筑前守殿(兼總)より使也、

吾々着船之由聞得候間、風呂焼被相待、早々参し候て
くつろくへき由也、馳而参し候、新武・鎌雲同心申候、

風呂過候て種々之酒肴にて会尺也、碁・將碁などにて
慰候也、薄暮旅宿へ歸候処、新武・鎌雲拙宿へ來入候、

夕食振舞候、又御酒などにて雑話也、福永藤六殿被來
候、御酒持せ候間、右之衆寄合候て賞翫申候、其刻宮

筑も被來候、閑談共にて酒宴也、寺家などよりも御酒
預候、

一九日、早朝打立候、伊伯州湯之浦より被出合候間、同

道申候、久木野之村にて伯州へ御酒寄合候、其次鹿兒
嶋へ直ニ抵候申候て、有馬表様子等雖可申上候、召烈

候者など直ニ者難成候条、所存之外之由申上候、并有
馬表之儀、此間吾々鎮貴へ申事等、伊伯使被成候間、

具ニ御申可然之由共申合候、従夫天氣悪候て、漸小川
路へ留候、亭主丸田、着候へ、即御酒会尺申候也、

一十日、早朝打立候、大口にて新武籠ニ被出合、沙汰人
処にて會尺也、衆中・寺家衆など御酒預候、拙者も武

州へ酒進之候、彼是酒宴共也、武州送之馬・夫丸等な

とまで多く被仰付候、此日も洪水などにて、漸般若寺
之川向龜澤と申村へ着候、

一十一日、早朝打立候、飯野もと地之村へ立寄憩候、爰
より大口之送之馬・人歸候也、従夫野尻之町へ着候、

市來美作守殿御酒持せ被來候、賞翫仕候、此夜衆中各
拙宿へ呼候て酒宴共也、

一十二日、早旦打立候、衆中皆々隨身候、田比良坂之上
にて破籠思々ニ用意共也、良久酒など賞翫にてやすら

ひ候、申之刻計宮崎へ着候、堺酒など到來候て賞翫申
候、衆中・悴者など歸宅之儀申候て、酒肴など持來候、

種々之儀共也、

一十三日、從早朝衆中・寺社家之衆被來候、滿願寺入御
候、御酒持せ候、參會申候、従夫茶湯会尺申候、金剛

寺御出也、酒肴被持せ候、酒宴共也、折節野村丹後守
御酒持來候、彼是閑談にて御酒など也、鎌源処へ礼申(兼田兼忠)

候、種々肴にて御酒也、終日衆中・百姓等迄歸陳之祝
言と候て酒肴など持來候間、無寸隙候、

一十四日、如常、寺家衆其外下々まで歸宅候とて來候、
酒肴共持來候、此日御崎野馬追のため海江田へ越候也、

天正十二年五月

一十五日、早朝内山より紫波洲崎之城へ參候、(上井兼兼)恭安様種

々御会尺共也、御酒持參仕候、是又御賞翫共也、此日

明日馬追之儀申付候間、立之普請させ候て見申候刻、

今町より御酒到來候間、普請衆へ吞せ候、此日肝付彈(兼)

正忠殿近日上浴之由承付候間、実否可承とて飛脚遣候、

書狀たと認候也、各長旅わひと申罷越候とて、御酒共

持來候也、

一十六日、木花寺夕來儀候へ共、拙者沈醉故空歸候、御

茶其外種々持せ共見せ候、然者、夕見參不申候、慮外

之通早朝捻を以申候也、悴者なと越候とて來候、御崎

寺・同大門坊被來候、いづれも御酒持せられ候、茶屋

にて參會申候、御酒過候て茶会尺申候、宗琢・源左衛

門尉、殿所町衆兩人來候、堺酒持來候、是も茶屋にて

見參仕候也、終日酒宴也、

一十七日、從中城可參由候間、早朝城へ罷登候、中途ニ

南俊房・蜜藏坊なと御酒持せられ候、躡而馬より下立

候て、其衆寄合賞翫申候、中城ニ參候、めし御振舞也、

種々御会尺共也、從夫恭安様へ參候、是にても御酒共

也、此晚ねらひに野ニ出候、夜入候て内山へ歸着候也、

一十八日、早朝御崎之觀音へ參候、靜念珠申候、從夫寺

より可參之由承候間、其分に候、時御振舞也、其後立

花一瓶仕候、暮なと打衆も候、種々慰候而酒宴共也、

下向之刻、弓場之上之風呂焼せられ候由、恭安齋被仰

候間參候、御茶湯なとにて風呂ニ入候、御酒なと持來

人共候て、種々之儀也、從夫中城へ參候、彼方にても

御酒也、其後恭安齋にて夕食被下候、種々御会尺共也、

此夜ハ紫波洲崎へ留候、

一十九日、早朝内山へ行候、路次にて川魚なと取せ候て

見申候、此日從祖三寺可參之由承候間、彼方にて終日

閑談也、種々會尺共候、嶋陰漁唱なと披見共申候、再

誦再吟無是非候、此晚從宮崎加治木但馬丞なと來候、

御酒持せ候、賞翫仕候刻、折宇迫假屋、今日釣候とて

纏持來候、彼是賞翫共候て、深更まで雜話共也、

一廿日、丙申吉日にて候間馬追也、早朝より野ニ登候、

諸人或馬上、或陸立之衆も有、矢旗・笠驗なと思く也、

取駒一疋候也、棧敷ニ而者酒宴也、寺家・社家之衆、

其外各酒肴持來候也、棧敷之後にハ網を曳せ候、魚な

と多く見え候、終日之慰共也、此晚駒懷させ候て見申

候也、すはら一疋候つる間、是をも取せ候間、乘せ候

て見候也、

一廿一日、肝付彈正忠殿より返事到來候、必定當年上洛

之由也、來廿七八日打立之日限之通承候、美々・細嶋

より出船之志候由承候也、此朝從圓福寺可參之由候間

參候也、昨日之駒なと路次乘坐候て見申候、於圓福寺

御時振舞被成候、種々之儀也、從夫碁なと若者共ニ被

打せ慰也、山谷なと見せなされ候、青州從事賞翫させ

られへきためと見え候、彼是良久閑談共也、從夫御伊

勢へ、今度於有馬疫病多々候間、供之人衆なと彼病氣

除候様ニ、御伊勢へ奉射千矢之立願共申候、然者吉日

にて候条、成就之由申候間、彼弓場へ行候、矢數千成

就候て、其後小的なと也、如常各酒飯にて候、種々會

尺共也、薄暮ニ内山のことく歸候也、△

1411

「喜入季久譜中」

「正文在當家」

(本文書ハ一三四八号文書ト同文ニツキ省略ス)

1412

今度出水郷之者共差押候、多人數差入候得共、無事不相

調、其方被差越候處、無難ニ相治り、誠ニ神妙之至ニ候、

仍而忠勤之働ニ付、出水以下大河内鹿倉遺置候間、子孫

ニ至り入用之節、此書を以可申出候也、

天正十二年八月十八日 嶋津義久印

山田民部少輔殿

(本文書ハ偽文書ナラン)

1413

「義久公御譜中」

天正十二年四月三日、有馬之内神白・井福・森山等諸所

爲窺量之、島津圖書頭忠長・伊集院右衛門大夫忠棟・上

井伊勢守爲兼同船解纜於三重、乘步卒於小舟、下之於諸

所陸地、放火區々村舎去矣、使柏原左近將監乘小舟到井

福爲放言、丁此之時、城裏之士出濱邊曰、欲憑汝請和平、

由是將監已下陸地、聞和陸之實否、粗將向和諧、將監達

其故於三輩、於茲副八木越後守、而再往定和睦約束、及

此之時、無異違屬旗下可抽忠功、然而先是騷動之時、教

妻妾男女退邊境、今日將遣迎船歸入私宅之際、見纒籠之

進來、返船於半途、再赴邊土矣、公等所以看見也、請今

日放鐵炮以放火城下村舎、今夜必歸船於陣所、明日明後

兩日之際、可言和平實否云云、各窺看彼城、則非所以可懼

之地、先以歸帆者也、

天正十二年四月五日、使山田新介・安富左兵衛佐安富、有馬氏之旗

也。同船到于井福・神代、彼等前雖曰請和平未以果之、

今日可定成否、宮崎之土柏原左近將監・江田安藝守同副之往、各酉時歸帆曰、神代質人明日必可獻、井福・森山之質已昨日如千々岩令進遺矣、同日之夜從井福差兩使曰、所進之質與森山質俱遺千々岩矣、然則八木越後守・柏原左近將監明日可到井福、可去居城、敢請所受來之士卒堅止狼藉云爾、應渠之言、今日六日兩輩往受井福矣、使川上三河守・比志島式部少輔領神代之壘焉、西郷・森山亦俾諸所士卒以領納之者也、

天正十二年四月七日、在有馬之諸將入神代、種子嶋氏亦兵船三十艘許、乘從兵今日到于神代、其翌八日、島津圖書頭忠長・伊集院右衛門大夫忠棟・平田美濃守光宗・上井伊勢守爲兼・新納武藏守忠元・川上三河守忠智・山田新介有信・鎌田出雲守政近・穎娃左馬助・比志島式部少輔等爲評議、其條目曰、有馬表御行之事當郡中南蠻宗故、溫泉山坊中無所殘破滅畢、御再興御立願可爲專一、御神領非多分者、相調間敷事、伊佐早表計策之事、件條數也、今日宇都氏寄使書於我將等之在有馬者、其使到于神代有語曰、肥後州亦有戰場之得勝利、北郷彈正忠・吉利下總守・伊集院下野守等領數多之軍衆發向、而獲敵首者六十

餘員也、

天正十二年四月九日、在有馬我將等使川上三河守・伊地知伯耆守差森山達有馬修理大夫曰、止內端之警衛、深江・安德・島原・三重等諸所如元分有馬之士卒、入守兵勿怠慢、其外諸所可使薩摩士卒入守之也、又安德上野守・安富左兵衛尉兩輩今度爲有馬氏・島津氏兩家功勞多矣、述其禮詞者也、

天正十二年四月十日、催兵船一百餘艘、伊集院右衛門大夫忠棟・上井伊勢守爲兼渡五个浦悉以放火、彼此敵兵雖曰發向、只放鐵炮飛羽箭耳、然而斬敵首者亦有之、已迄未時窺見竹崎壘、則諸船爭前近壘岸放火箭、的中其焰既熾、故乘其變忽陷之悉以放火、雖然敵兵速得遁去、而斬首鮮矣、爲兼之家臣福高平助、佐藤兵衛尉等得敵首、欲使川田駿河守義朗唱凱歌、而辭曰、捨隆信首、而未經幾程、又引道雜兵之頭如之何、以故鎌田刑部左衛門尉唱凱歌於船上、而後各歸帆于陣所也、今日上原長門守寄一書於上原伊勢守、自有江達井福、開滅誦之曰、大村之質船有至口之津告、大善房・市成掃部助結兼約於島原、速來有江、而可言前日首尾、兩輩馳赴有江矣、

天正十二年四月十三日、未伊佐早氏之降旗下、欲降參運

計策、教神代氏裁媒書寄伊佐早氏也、

天正十二年四月十四日、令福島寺現住天海和尚率二千餘口僧徒、渡有馬修大施餓鬼也、今日於八代中務大輔家久息男、加首服祝言不可勝言也、

天正十二年四月中旬、肥後州下野之城輒屬手裏、城主宇都左衛門尉顯孝出頭于八代、獻太刀・鎧、義久亦昇鎧於顯孝也、

1414 「御自筆在中原爲兵衛尚昭」

(本文書ハ一三四九号文書ト同文ニツキ省略ス)

1415 天正十二年四月十九日、義久忽然揚歸鞍輒於八代、本田下野守親貞從歸駕矣、居兵庫頭忠平・伊集院右衛門大夫忠棟・平田美濃守光宗於八代、居島津圖書頭忠長・上井伊勢守爲兼於有馬、而令運策於帷幄者也、

天正十二年四月廿二日、上井伊勢守在有馬井福、而招新納武藏守・比志島式部少輔・上原長門守・鎌田出雲守・

伊地知伯耆守・本田刑部左衛門尉・白濱周防介兩輩使役、擬群議爲治定之後、使鎌田出雲守・伊地知伯耆守達有馬修

理大夫鎮貴曰、先是鎮貴窮困之際請援兵於薩摩、我太守

義久不得已、而渡多勢於此地、匪翹爲警固、自上隆信至

下士卒、切伏數千甲兵於原野、爲軍勞者公之所能知也、

我軍國遠、而難爲長陣之勤、今也殆乎屬平安、有馬中之諸城俾鎮貴自兵入區々壘無怠警衛焉、次伊佐早氏未屬旗下、然而伸諸卒長陣之勞苦、可待後來之佳時、先止我士卒警固、宜解向本國歸帆之纜、鎮貴之舊領如元悉可領知、

其中温泉山本領如元寄附一二村里、而可遂再興以爲崇敬、於其地者、可鎮貴之任所好、自神代至山田者、雖曰西鄉氏之舊領、共以可被領知焉、是亦伊勢守一人之所言也、

若有衆口之所變違、則再可達其旨也、鎮貴報曰、催救兵

渡當地者、匪翹警衛長陣之爲勞苦、屢遂合戰屠殺太敵、

救吾早家於將墜、且復舊領不欠寸土、有附與旨、無言欲謝、爰有欲不言而不能之事、舊領城郭數多家臣少寡、公

等所以能見知也、庶幾待一兩月、而後隨安否定去留、於神領者、不可薩摩之背令旨、件返言令安富左兵衛尉・大

村兵部少輔辨焉之段、伊地知伯耆守・鎌田出雲守反命者也、

1416 「義弘公御譜中」

天正十二年四月十九日、太守義久公丁自肥後八代歸鞍

之時、有高命曰、忠平及伊集院右衛門大夫忠棟・平田美濃守光宗等同在八代、宜肥筑前後州之運計策、以故留滯彼地、終其事、而後辭八代歸飯野也、

1417 「北郷忠虎譜中」

同十二年壬申四月、吉利下總守・伊集院下野守・彈正忠忠虎討肥後賊徒、得首級六十餘、

1418 「御文庫二番箱義久公二軸中」〔義久公御譜中正文在之〕

態啓上仕候、仍貴國与就御一和之儀、近年數度申拵、就中去年冬八城表迄一兩輩致上進、及成就申候之処、就依不慮之變化、無首尾不算是非候、併爲某聊非疎略之段、先書以神名忠棟迄申上候事、定而可被達 上聞候之款、然者今度於高木表隆信戰死、御案利之至候、隨而存慮之旨爲可申上、普光寺・内田九郎左衛門尉上進仕候、此由可得 貴意候、恐惶謹言、

〔御譜朱カキ〕
〔天正十二年〕卯月廿四日

種実(花押)

嶋津殿參

人々御中

秋月三郎

〔上包〕

嶋津殿參
人々御中

種実

1419の1 「御文庫二番箱義久公二軸中」〔義久公御譜中正文有之〕

態令啓上候、仍御當家龍造寺御和融之儀、秋月方雖被申噯、不落着之故、及干戈被屬御勝利候、然處彼龍造寺民部大夫方新先非御侘言之段、對秋月方被申達之趣、至御宿老中被致言上候之条、被成御分別、御免許奉仰候、此之由可得尊意候、恐惶謹言、

〔御譜二天正十二年ト朱カキ〕
卯月廿八日

舜有(花押)

嶋津殿

參人々御中

1419の2 「朱ニテ」
〔別紙有之〕

追啓、

織筋一段致進上候、誠補御嘉礼計候、恐惶々々、

同日

舜有(花押)

〔上包〕

嶋津殿

參人々御中

彦山座主

舜有

「義久公御譜中」

天正十二年五月二日、飢肥之玉泉房・湯浦之早水氏某前日使於長崎、今日歸於有馬矣、先述所降參於島原大村土之言曰、薩摩將帥垂仁愛全身得逃死焉、獻一价欲報謝有不能故、理泉入道入部乎大村、由是捨妻子奴婢家財退去乎長崎、今也無一奴之爲扶助者、而所以不意之及返言也、又南蠻僧萬天連曰、領西浦廿餘个所質堅在長崎矣、各記姓名自今以後垂愛憐無騷動得安居者幸也、且復止有馬氏之爲領知、而欲薩摩之爲直領、又曰、長崎近邊無主田園亦、悉所以領置也、

天正十二年五月三日、麿島使節吉田美作守・和田玄番助到有馬達吾言曰、薩摩士卒可警衛之地、定三會・島原、使川上左近將監・吉田美作守及麿島士卒・島津薩摩守義虎・種子嶋氏某・天草島中之士卒等爲固守、是已下於諸城者、有馬氏之士卒堅可入守、於上井伊勢守者、數多之所質悉以領之、與諸卒偕可歸陣也、次所許鎮貴之地、與薩摩直領之地、他日可麿嶋之定評議焉、

同月四日、上井伊勢守使吉田美作守・伊地知伯耆守再達鎮貴曰、入置薩摩守兵於三會・島原兩城、餘軍悉以可歸帆之解纜、諸城之警衛勿敢怠慢、鎮貴報曰、諸城警衛可

用自兵、三會・島原兩地可被入置薩摩守兵、共以得聞其

旨矣、鎮貴對使者有言曰、島原、三會有由緒之地也、欲領知之云云

天正十二年五月廿二日、秋月三郎種實差兩使曰、去年諸將在八代之際、薩摩與龍造守爲和諧之媒粗已成矣、不計隆信忽變其約爲讎敵、然而專私慾變兼約背天命故歟、匪啻一身會殺戮、領土之士卒大半不得逃死、暴屍於數里田野、非種實之知爲謀而爲媒价、公其勿疑我云爾、

1421 「案文有之」

到龍造寺一和之儀、累年種實懇望候之處、其辻轉變之儀大半案中候責、然者今度高木表之一戰、不慮之勝利風聞候之哉、使書怡悅候、猶右之鬱憤媒介候之歟、巨細年寄可申達候、仍織筋二端來着、御慰勸之儀候、從是何、進之候、補祝詞計候、恐々、

〔朱力キ〕天正十二年
五月廿二日

彦山座主

1422 「上井覺兼日記」

一廿二日、折宇迫湊之口之普請申付候也、此日宮崎へ罷歸候、▽中途跡江之石坂寺へ立寄候、種々會尺共也、

此晚罷歸候とて若衆達被來候、鞠にて候、御酒なと振舞候也、從鹿兒嶋吉野駒被下候、大山肥前守書狀被相添候、今年吉野牧一番之駒にて候、拜領候間能く秘藏可申之由也、△税所新介殿(備和)より書狀到來候、秋月殿(種実)より頃兩使參上にて候、然者拙者へ書狀來候間、被持せ之由也、種実書狀到來候、即披見候、去年八城へ吾々滯在中、御當家と龍和平之儀(龍造寺隆信)媒介共候、成就之様に候処、隆信不慮ニ變化候て、于今無首尾候、聊秋月非疎意之由被述候、▽并織物一端預候也、

一廿三日、今晚月待たるへく候間、別而讀經等仕候、駒懷させ候て見申候、石坂寺、昨日立寄候礼ニ被來候也、被下候吉野之駒、同名右衛門尉(兼忠)へ預候、然者鞍付なとさせ候、此日拙宿風呂焼せ候て、若衆中呼候て入申候、風呂過候て御酒種々振舞、茶湯なと也、其後又々若衆中被集、鞠被蹴候、此衆へも御酒なと振舞候也、此夜月待候、看經等如常、若衆なと被來候て種々雑話共也、△一廿四日、▽地藏薩埵へ別而祈念共申候、△秋月殿返狀認候、趣、去冬當家と龍和睦之儀懇望候、然者御媒介ニ任候由申候処、旁御謀略にて愷變被成候、曲事千万存候刻、今度有馬表不慮之勝利、誠各御謀計背天道候欵、

巨細鹿兒嶋へ兩使被指越由候間、寄合中可被遂御報候、拙者當分日州へ居住候間、鹿之様子不存候間不詳之由也、▽袴面一進之候也、此晚も若衆此方庭にて鞠也、大泉坊・大乘坊上落候条、はなむけニ鹿皮兩所へ進之候、

一廿五日、大泉坊・大乘坊暇乞ニ被來候、茶湯会尺にて首途祝候也、此日駒共乗せ候て見申候而、從夫西方院風呂ニ入候、同馬共洗せ候、大門坊庭にて鞠也、種々會尺候、此晚へ大門へ留候、本坊・西方院なと來儀候て閑談共也、誹諧なとにて慰候、△

一廿六日、▽駒共乗せ候て見申、城へ罷歸候、從夫馬之血出させ候て見申候也、△此日忠棟(伊集院)・親貞(本田)よりの御狀、從庄内土持攝津介書狀相添被持せ候、來月中旬之比御談合たるへく候、日州兩院之諸地頭致同心參上可仕之由也、次ニ殿中築地上屋未閉目所々候、爰元糺明候て、當時霖雨中と申、彼是指急かせ申へき由也、▽次ニ和田江左衛門尉息、當年市來・伊集院之間之御頭殿たるへく候、御神慮之儀候間、無正表様ニ早々申付へき由也、各其心得令申候通、御報即申候て、又土持攝津介まで持せ申候也、

一廿七日、如常、和田江左衛門尉へ御頭殿之事申付候、
即自身被來候て、未成年にて候、其上遠方と申、諸篇
難成候間御侘之由也、當者明日打立被成、かこしまへ
祗候候て、愚存之分御申肝要候、御侘立候へ、別人へ
可被仰付候、左候するにも、遅候てハ彼是可然も有
間敷候、御油断候ハぬ様にと申候也、此日善哉坊被來、
同名右衛門尉・関右京亮を以承候、頃大泉坊・大乗坊
爲入峯上洛候、就夫野村加賀守大護^(重)廣之立願共候、去
年已來別人ニ被頼成就候する様ニ聞得候間、善哉坊之
事、從前代無余儀野村黨禪那之事候、其上年行事職等
被仰付候儀、吾々判形を既格護候、然処大乗坊彼儀を
請取、於峯中護廣成就たるへき有増候欤、野加へ去年
已來此儀ハ被仰理候、其上今年も、野加・大乗坊へ右
之旨趣雖被仰理候、何と哉らん返事共無分候て、早々
大乗坊被打立候、打立前之返事ニハ、善哉坊承処尤ニ
存候間、野加へ護廣之調儀等者返進之候而罷登候、併
野加内ニ罷居候三樂と申山伏、跡より可罷登候欤、左
候ハ、彼山伏若輩にて候条、峯中之儀頼由被申候間、
於其儀者護摩之事も、於峯中被頼申候する由承候、ケ
様に共候ハ、野加へ内談共候て如此候らんと推量候、

六ヶ敷候すれとも、拙者書狀にて使にて相添候へ
かし、左候ハ、美津へいまた大乗坊逗留候らん俣、
此由頻停止候する由也、拙者返事、當者其事にて候哉、
山伏之御法を我々ハ不知案内候、併當國惣先達職善哉
坊御承之上者、是程大願成就之事、從願主貴所へ無届
慮外候、兼又同宗旨之衆之無届ニ被護廣請取候事も分
別不申候、雖然拙者文・使之間相添候へハ、即大乗坊
曲事之由申唆迄候、其上彼大乗我等家中ニ召置候へ共、
一口此事我等ニ尋無之候、然間菟角到我等難申候、殊
ニ護廣之調儀等、野加へ返候て登之由、善哉坊へ被申
候欤、左候ハ、善哉御推量にこそ如此申候て、變々
申候すると承候へ、先大途へ善哉承処尤候間、悉皆
野加へ返候、大乗へ存間敷由、返事被申候へハ、無残
所候欤、善哉如推量此上愀變被申、於峯中護廣取成候
ハ、其隱有間敷候条、後日之御沙汰肝要候、菟角連々
被仰談中之事候間、猶々右之存慮等我々へも承候由、
大乗坊へ能く御届被成候て可然之由申候也、此晚柏原
將監^(有明)殿庭にて鞠稽故之由候間、彼方へ行候、鞠過候て
種々會尺共也、從夫閑談共候て、深更ニ罷歸候也、△
一廿八日、▽御崎寺講讀ニ御越也、如例、善哉坊昨日よ

「正文有之」「義久公御譜中」

り越候、一ヶ条承候儀、細々返事共申候礼ニ被來候、
 茶被持候、御酒參合候、物語之次太平記望候間、一卷讀
 候て聞せ申候也、△此日鹿兒嶋より被仰越候築地上屋
 之事、御談合ニ來月中旬之比、諸地頭參之申渡候也、
 吉利総州・新納縫殿助殿・河上備前之守殿へ本田大膳
 亮にて申候、(忠徳) 桃山殿・(忠助) 吉利山城守殿・(宗徳) 平田狩野介殿へ
 原田大膳亮にて申候、(政近) 鎌田出雲守殿・(宗徳) 平田新左衛門尉
 殿・(政心) 新納殿へ江田源七兵衛尉にて申候、(有也) 山田新介殿・
 鎌田筑前守殿へ前田勘解由左衛門尉にて申候、伊集院
 美作守殿・大寺大炊助殿へ和泉伴左衛門尉にて申候也、
 ▽此晚此方庭にて若衆中鞠也、△
 一廿九日、▽和田江左衛門尉、御頭殿就御佗之儀かこし
 まへ被參候、乍次吉野駒拜領之御礼鎌刑まで申入候、
 此日雨中之間盤之上にて慰候、大圓坊被來候て、上落
 候、然者縣堺可罷通候、曳付之一通頼由候間、同行八
 人之事無吳儀可被通之段、土持殿へ令啓候也、△去廿
 五日、雷落候て瓜生野ニ畑打ニ出候者ヲ一人顰殺由、
 各物語也、

1425

「義久公御譜中」

「正文在飯野衆本田與右衛門」

「是ヨリ前欠」
 一限部親子被召置候御様躰、初中後之儀共、今度鐘江紀

追而今度高木・島原表被得勝利候、尤环重候、此等之儀
 爲可申達染筆候、仍新勅撰一冊定家卿進之候、於御自愛
 者可爲本望候、猶稱名寺其阿可有演說候、恐々謹言、
(朱カキ)
(天正十二)五月廿八日
(大友) 左兵衛督義統(花押)
 謹上 島津修理大夫殿
 1424 「義久公御譜中」
 天正十二年六月十九日、令大日寺法印往三舟、甲斐宗運
 請和諧、應其求許容之矣、爲達其報禮、贈之以太刀・馬
 者也、
 天正十二年六月廿一日、爲祈國泰民安、令數多眞言僧讀
 誦法華千部、今日始之待廿九日必可結願也、有馬修理大
 夫鎮貴使一僧述禮詞曰、垂仁愛救窮困匪翅全身命、因去
 春之有大利、得數年之散胸霧、且再領土地何時忘之乎哉、
 贈于我以太刀・馬及南蠻笠・水晶花瓶・唐墨十挺・眼鏡、
 今日遂對面于使僧者也、

伊介被差下候砌、道輝・宗歴依入魂具致承知候、既御一着之由候之条、目出度相存候、斯御座候ニ付而茂、筑後表之御閉目、片時茂被差急候へてハと申居計候、

一至薩州以稱名寺近々被成御入魂、殊御秘藏之御馬被差遣之由候、一段目出度候、毎々申候様、到薩州者ひた／＼と被成御入魂候者、先々敵方者失行可申事、不可有疑候、細碎先日申懸候条、今更雖不及口能候、頃者一入薩州へ申歎之由候辻者、何とか廻計略、到筑後目御出勢之段、一日成共取延申候而、其間ニ薩州之儀可申調行之通、致相談候、衆之内ヨリ密通候、構而不可有御油断候、

一至秋月、以坂本新右衛門從御座所被仰聞旨御座候様、方々批判候、万一於事实者、能々被遣御念候へてハ、忽御失ニ可罷成候、更々秋月表裏之段者、申ても／＼餘ある事候、殊更坂新事、無比類未練之族、盗人之最長ニて候間、御油断候而者無勿躰候、只々如何様ニ茂計略ヲ申廻、御加勢一日成共取延申候者、何篇ニ付而、手前之徳者可有之之通申之由候、從高來遁歸候鍋嶋飛彈事茂、蒲池鎮運親類肥後守与以内談、貴國へ言上候様普風聞候、於有形儀者、是も御出勢ヲ取延可申計略

迄たるへく候、其故者、於山下者、彼肥後守一人之任所行、龍造寺深々申組、剩隆信因果候後、鎮運弟百千代重々爲人質鍋飛へ差渡置候、爰以可被成御校量候、從何方如何躰ニ申上候共、先々被懸断候而、黒木表ヲ早々被打崩、山下表へ一陳被張懸候而、可致佗言者共之邪正被相糺候へてハと存候、御先陳衆境目ニ被相扣、被聞合なと候てハ以外之可爲敵案候、此段始宗歴御先陳之方々へ、能々被加御下知候へてハの御事候、

一豊前目之儀、親家以御才覚、弥可然成立申之由、頃從長野外記大夫所態以飛脚被申越候、乍案中目出度候、適家御近邊へ御堪忍之儀候条、無御油断、節々以御相談御調儀可目出候、筑後表之依様躰、鑿而豊前目へも可被及御行儀候条、野中鎮兼・城井長輔其外寄々衆不致油断様、折々可被加御下知事、可目出候、誠ニ重言之様候へ共、於于今者筑後目之御行一入被差急候而、彼國之被明御隙、至肥前國薩州衆可被取出時分柄被聞召合、被成御加勢候而社、都鄙之聞覚も能御座候するや、自然御油断候而、薩州衆肥前國へ被取入、殘黨之可有閉目時分迄、筑後一國不被切散候而、結句薩州衆之被預加勢候候而者、御無二之御間と申ながら、公私御

油断之様にも諸人可致批判候哉、是非ニ先々筑後ヲ一國被明御隙度事候、御分別之前候、

一從敵方者、兩御陳所へ目付差置申之由候、爲御存知候、中々雖不及申候、御陳中被成御法式度御条々、多

く可有御座候哉、每物御油断与從敵方見懸申候へぬ様ニ、夜白被遣御氣候する計、可目出候、

一先日鐘江紀伊介・日隈藏人致上進候處、別而被副御心、

尖被逐御披露預御取合候故、種々忝請 上意、從下目

之申事共致一念御證判等被調下之条、一段忝安堵此事候、

一至此表、御警固船二三十艘茂被 仰付被差下候者、面

白御行茂多々御座候する哉之由、度々雖申上候、御警

固衆被申事共御座候由被 仰下候、既御屋形様被出御

馬候上者、縦差立貴國諸浦へ警固船被号御用被差置候共、斯砌寄事於左右、心安在宅者無勿躰儀候哉、御警

固無馳走候共、陸地相應之馳走者不可有余儀候哉、被

取集候而者、二三千茂徒被差在宅候事、以外御油断与存候、適親家御近邊へ御堪忍之儀候条、不限彼条、每

物無御油断様御相談可目出候、從前々相定御警固衆社不被及御催促候共、御嘉関之者共、先々一兩年之公役

ヲ万端有御赦免、彼浦之賊船十四五艘被差下候へかし、さ候ハ、於爰元茂何とか以才覚、警固船五十艘茂六十艘茂相調候而、一行取催促申度候、此儀者濃々口上にも相含候条、不及重筆候、

一於山東一城取付申候而、一兩人差籠可申之条、粮析可被成御加力之由、先日以中嶋式部入道・吉田右京亮申

上候處、尖被達 上聞之故、以御分別先々老貫五百目、

嚴重ニ右兩人へ被渡下候、忝存候、當時其調半候、必

踰時分柄一城取付可申候、不可存緩候、此等之趣、以御次卒度可被達 上聞事、可目出候、何様御陳中節々

可得御意候、恐々謹言、

〔朱カキ〕
〔天正十二年六月廿二日〕

〔戸次〕
道雪(花押)
〔高橋〕
紹運(花押)

1426 「義久公御譜中」

天正十二年六月廿四日、宇都氏寄使書以述歸陣之祝詞、

贈以太刀・馬、又赤星氏亦同述祝詞、以太刀・巻物、使者西郷越中守者也、

天正十二年六月廿七日、五島之宇久左衛門大夫純幸遣使書、以述高來勝利之祝詞、且贈以太刀・巻物矣、同廿八

日、合志藏人親重遣使書達歸陣之悦、贈以太刀・單衣焉、先是大友氏之賊兵滅亡乎日州高城者數千餘輩、已會是歲七廻忌矣、欲修大施餓鬼於其地、以令乎有司者也、

「上井覺兼日記」

陸月

一朔日、▽如常、看經等別而仕候也、衆中各被來候、水寄合候て、其後茶湯にて候、此日敷祢殿内衆十六人物語申候、縣境如豊後通候する間引付頼由候條、土持殿(久御)へ、不審有間敷衆にて候、早々通有へく候由、一通進之候也、江田へ大圓坊今日へ逗留候間、合力として鹿皮進之候、此日△從鹿兒嶋紙屋傳(伊集院)ニ、忠棟・親貞書狀到來候、趣、遮而御談合之儀候間、必來十日參着申候様ニ、諸地頭同心を以て祗候之由也、▽次栗野八幡宮造榮番匠・材木等之儀調達之由也、即諸所へ申渡候、此暮此方庭にて若衆達鞠也、過候て長野談路守、各同心ニ可來之由承候間、彼宿へ行候、種々會尺閑談にて、深行候て罷歸候、

一二日、如恒、雨中にて候間、終日碁・將碁などにて語暮し候、

一三日、毘沙門へ別而讀經等任心候、若衆中被來、碁・將碁など也、御酒なと振舞候、此晚殊之外雨風也、從鹿兒嶋被仰儀、諸所へ使にて申渡候、返事承候、皆々委被聞せ之由也、水流之普請共させ候也、

一四日、如常、風間ニ衆中被來候、殊之外洪水也、此日普請させ候て見申候、此暮若衆中被來鞠など也、高野之客僧賢順房と云、滿願寺へにて候、是なと鞠被賦候、種々曲共也、各へ御酒振舞候也、上洛之衆暇乞とて御酒共持來候也、

一五日、如恒、鮒之大なる餘多到來候間、衆中あまた呼申候て寄合候、從夫鞠蹴らるゝ衆も有、又ハ碁・將碁・茶湯などにて、終日慰暮し候、

一六日、如常、移望之衆多々被來、懇望共也、相應ニ返事申候、菟角鹿へ參上申候間、御寄合中へ談合申候て、落着之儀返答可申由申候也、栗野八幡宮就造營之儀、番匠彼方へ越候事等申付候也、此夜柏原將(有間)など被來閑談也、御酒寄合、雜話共也、深更まで慰候也、

一七日、從滿願寺可參之由承候間、其分に候、觀千代丸も召烈候、立花・すなの物院主被成候て見せられ候、時御振舞也、種々之會尺共也、此暮拙者庭にて若衆中

鞠也、和田江左衛門尉歸宅候、御頭殿御仕之事へ、當時寄合中留守に候、親貞一人御座候条、拙者參上之刻談合被成、落着之返事可有由也、吉利殿鹿兒嶋參上之事、洪水故遅々たるへき由、使者にて承候、鎌田雲州よりも、足いたゞ候まゝ此度參上難成候、然者子息(政虎)參有へく候、諸篇頼之由承候也、

一八日、早朝打立海江田へ越候、殿所町にて宗琢呼候間行候、種々之会尺也、從夫内山まで行候、此方へ着候由申候て、各々酒肴など持せ來候也、

一九日、早朝紫波洲崎へ參候、恭安(上井兼兼)様種々御會尺共也、

從夫暮打候て慰候処、本田治部少輔殿被來候、酒肴預候、風呂燒せ候て会尺申候、中城より可參由候間、本治同心ニ參候、殊之外御会尺也、其後恭安にて本治へ御会尺也、時分纏到來候て、前にて包丁なと候て種々之儀也、此夜本治同道申如内山歸候、茶屋にて本治なとへ會釈仕候、深更まで閑談也、從夫本治へ歸宅也、△一十日、早朝鹿兒嶋へ打立候、▽田野にて破籠共受用候、然処大寺殿、長藏坊を以、かこ嶋へ祇候之由申候、尤被待合同道候すれ共、先々今日早且打立之由也、△此

晚吾々山之口へ着候、▽此日肝付霜臺(兼寛)へ使并銀子廿兩

進之候也、

二十一日、弘曉打立候、都之城へ暫憩候て、朝食受用候、從夫急候て敷祢へ着候、休世齋(敷祢預實)へ參候、種々御會尺共也、拙者も御酒持せ候、賞翫共也、從白濱迎船來候て相待候間、纏而座事果候へへ、敷祢脇本出船仕候、一番鳥時分白濱へ着船仕候也、

二十二日、藥師別而祈念共申候、鹿兒嶋へ加治木雅樂助にて、去十日參着之由蒙仰候、其覺悟候処、日州殊之外之雨風にて候、洪水故遅々無是非候、尤今日早々可參候へ共、炎路急候故少所勞出合候、然者養性仕、今明日中祇候可申候、遮而御急用候へへ、何と様にも養性申今晚も參上可仕之段、書狀相添令申候也、纏而御返答かこ嶋假屋持來候、儲者爰元へ越着候哉、少惱氣之故明日參上之由、尤肝要ニ被思さ候、未諸地頭被相揃候、平田新左衛門尉殿・稻富新介殿(長辰)・大寺大煩助殿(政)、此衆まで祇候之由承候也、然間此日ハ白濱へ逗留候、少養性氣能候之間、船ニ乘候て網曳せ候て見申候、魚多々漁候、とある松陰にて賞翫共申候、御酒などにて慰候也、

二十三日、虚空藏へ別而讀經等仕候、未穩乱然々候間養

性申候、家景之者共御酒持せ候て、拙者徒然之計共申候也、此晚鹿兒嶋へ參着候、即本田信州御座候、其外若衆中一兩人被來候也、

一十四日、早朝殿中へ罷出候、御虫氣出合候、笑止之由、

白濱次郎左衛門尉殿にて申候、并吉野之駒被下候御礼

申上候也、忠棟・光宗・親貞へ御礼申候也、各にて御

酒也、伊知地伯州先日於有馬永々申承候条、左様之儀

可申理とて礼申候、種々會尺被成候也、此晚忠棟風呂

燒せられ候、可參之由承候間、參候て入候、新納右衛

門佐殿・長谷場筑後守殿などにて候、從夫長谷場筑

市來掃部助・岩永可丹同心申候て、拙宿にて深更まで

雜話共也、御酒也、此日も拙者罷着候とて、當所衆各

御礼也、△

一十五日、早旦罷出候、出仕様子如常、城一要齋より、

久御無音之由候て使者也、刀・太刀・釜進上也、使城

主計助也、御見參被成、太守様就御虫氣、寄合中以

談合千部會張行之企也、巨細之段共被仰付候也、親貞

拙宿へ御出也、此外衆中皆々礼儀承候、外城衆新納狩

野介殿・山田新介殿・平田新左衛門尉殿・大寺大炊助

殿・川田駿河守殿・新納縫殿助殿など礼儀承候也、圖

書頭殿へ御礼ニ參候、御留守也、此晚祇園はやし例年のことく也、圖書頭殿より祇園はやし一覽有へく候、

拙者宿へ先々御礼候する由也、聽て使を以、目出候由

申候、并御兼約申置候間、折ためのしやくく一進入

候、御大慶之由也、やかに麟臺入御候、御同前ニ祇園

はやし見物申候、猩々・芭蕉・簾之梅也、不断光院な

と見物被成、各御同席也、從夫麟臺拙宿へ入御候、楚

忽ニ御着なと調儀申候て、深更まで御酒宴也、山田新

介殿・鎌田又七郎殿など御座へ被參候、種々御閑談共

也、又四郎殿御宿へ此日參候、阿多掃部助殿・可丹齋

同心申候、御酒御寄合也、彼御宿にて鞆御稽故と見得

候、奥之山左近將監被居候、其外ハ地下稽故衆也、

△一十六日、出仕如常、當年當所御頭殿之儀、左忠棟之次

男、右村田雅樂助息たるへき由定候也、此日稅新・町

田久徳へ礼申候、不断光院拙宿へ入御也、御酒參會候、爲

阿弥被來候、久美崎へ唐船着候、然者油之壺一・木綿

一持せ被來候、彼所江暖候故也、此日御側衆など同心

ニあまた被來候、各へ御酒參會申候也、於平田殿又四

郎殿鞆御稽故にて候、爲御會尺拙者可參之由光宗承候

間、參候て終日聽聞申候、奥之山左近將監指南也、稽

故之衆、又四郎殿・平田新四郎殿(増宗)・税所助五郎殿・本
 田大炊大夫殿(親兼)・川崎織部助此等也、笛(河野通貞)・新納右衛門兵
 衛尉殿・又四郎殿御内衆一人也、一王雅樂助頃申候、
 此外岩切三河守殿(善徳)・長谷場筑後守殿・木脇大煩助殿(祐光)・
 伊知地越中守殿(重徳)など也、此晚御会尺にて候、座鉢客居
 又四郎殿・新納右衛門兵衛尉・奥之山左近將監・岩切
 三河守・長谷場筑後守・主居拙者・本田大煩大夫・平
 田濃州(光宗)・木脇大炊助也、深更まで乱舞・御酒宴也、
 一十七日、出仕如常、御談合衆各被着揃候也、圖書頭殿
 一昨日拙宿へ御出候爲御礼參候刻、阿多掃部助殿・白
 濱次郎左衛門尉殿・爲阿御寄合最中也、然者吾々へも
 同前ニ御酒、閑談共被成、掛繪など見せなされ、種々
 御雑談にて御酒也、從各被歸候、拙者ハ暫御用之由承
 候間居残候、其後吉田作州(清左)なと被召寄候て御茶湯也、
 夕食八木越後守(信徳)・拙者・市成掃部兵衛尉へ御振舞候、
 從夫上之山觀音へ我々被召烈、堂參候、折節南林寺東
 堂通夜被成候、然々種々御雑話にて御酒宴也、町衆な
 と有合候て乱舞共仕、良久御慰也、御下向之時、八木
 越後守処へ麟臺御立寄之由被申候、然者吾々も御隨身
 候、種々御会尺共被申候、深更ニ御歸宿也、△

一十八日、▽觀音ニ別而祈念申候、出仕如常、△此朝御談
 合衆へ御意趣被仰出候、御使伊知地伯州(伊知)・税所新介殿
 也、条々、一今度御出勢有馬表・肥後目諸軍衆軍勞御
 礼之事、一肥後表御行之事、一八城御格護之事、一有
 馬御番手之事、一弓・鉄放弥御馳走之事、先々此等也、
 此日忠棟拙宿へ御礼と候て入御也、▽祝言計ニ御酒參
 會候、從夫殿中へ定而御談合衆被揃候哉と候て、我々
 御同心にて參候、然共今日ハ御談合無之之由候間、忠
 棟御宿所へ被召烈候、左候て立花一瓶頻ニ御所望候条、
 乍斟酌仕候、惠玄なと申候て京都之人にて候も、同一
 瓶被仕候、同床左右ニ仕候間難儀千万候、併種故と存
 候て無異儀仕候、如此最中、麟臺入御候、吾々立花共
 一覽被成候、寔々一笑、其後忠棟茶湯被成候、忠
 長・拙者也、忠棟御息増喜殿宮仕共候間、一段我々折
 角候、種々之儀共也、殊更秘藏之壺なと一覽候、御茶
 之手前へ惠玄也、△

一十九日、▽出仕如常、三舟へ△此度一和之御礼被仰候、
 御使僧大日寺法印也、▽御太刀・馬一疋被遣候、太刀
 者御使僧被渡候而ハ似合ましく候欵之由候て、八城衆
 へ誰にて候へ被仰付候へと、光宗へ寄合中談合候、△

此日從 御前被仰出候、いつも御談合之事成就候て、
忠平公へ御尋候、乍勿論尤之由被仰及候、是等にてハ
如何有へく候哉、今度ハ肥後國中へ諸卒可被打登候之
間、能く御談合候へてハの儀候、先く条數等、武庫へ
被仰渡候て肝要之由 上意候、懸而平田新左衛門尉・
稻富新介兩人被仰付、如眞幸被參候也、▽此日珠長連
殊全老人爲追膳月次連歌企候、併御弓箭取乱、于今
無其儀候、當時隙にて候間興行候、出仕歸ニ直ニ彼宿
へ各御座候、其座躰客居忠長・忠棟・宗運・可丹・鮫
嶋備後守・高城左京亮、主居吉利下総守殿・拙者・珠
長・鷹梓主殿助、彼衆也、夜入候て百韻成就候、種々
酒宴共也、

一廿日、出仕如常、吉利総州・伊集院野州へ礼申候、新
納武州・猿渡越中守殿同心申候、兩所にて種々會尺也、
從夫直ニ殿中へ御談合ニ祇候申候、△

一廿一日、▽早朝祇候申候、從今日法花千部始候、太
守様御聽聞也、出仕之諸侍不及是非候、今度千部、聖
家御誦經也、彼調儀、寄合中噯之所又ハ當所衆懸地頭
之所々也、△從有馬殿使僧進上候、今度御勝利之御祝
言、并御高恩を以日來之散胸霧之由也、仍御太刀・馬

并南蛮之笠・水晶之花瓶・唐墨十挺・鏡形也、右之使御
對面被成、出仕歸ニ新武・吉利山城守殿・拙者、忠棟
御宿所へ同心被成候、▽座躰常住御座候所也、客居拙
者、次新武、主居吉利山城守殿・忠棟・伊地知越中守、
種々御會尺無申計候、女中も見參被成候、此日本田丸
部少輔殿より木脇大炊助殿にて承候、去年已來向嶋白
濱と二俣と堺論之事、于今不事果候、何と様にも拙者
校量次第、事終候様ニ憑之由承候也、返事、尤可然承
樣に候、併愚領之境沙汰を吾等分別にて候噯する事、
覚悟ニ不及候、只向嶋地頭御分別にて御噯肝要ニ存候、
然者本刑・拙者同前ニ、川上源五郎殿へ佗申度存候由
申候、即我等申処尤ニおほされ候、同前ニ木大にて川
源へ可理之由也、從有馬殿、今度諸軍衆歸帆已後迄伊
福表へ罷居辛勞申候とて、使書并馬・太刀預候、此晚
猿渡越中守殿被來候、御酒持せ也、遙々久雜話共也、
一廿二日、早且出仕申候、各御經聽聞仕候、御談合共也、
此晝千部之御經衆へ於殿中御酒、拙者用意にて振舞候
也、此晚福昌寺へ參候、食籠着にて樽一荷持參申候、
懸而東堂御對面也、御酌仕御酒申候、種々御雜話共也、
拙者事代賢和尚御弟子之様ニ候条、向後別而被仰談候

する段承候、老僧衆などあまた被召出御酒也、此夜可丹齋・幸若与十郎・一王雅樂助來候て深更まで雜談共也、酒宴也、

一廿三日、出仕如常、南林寺へ御參被成、御談合ニ被着合諸所之衆御供也、御時參候、御座鉢客居 太守様

・又四郎殿・圖書頭殿・拙者、主居福昌寺東堂・南林寺、種々御會尺也、御持せ樽五荷・折看也、又四郎殿

・圖書頭殿・我々も御酒持せ候也、諸所地頭衆住持御酌被成、召出之御酒也、寺僧達へ御持せ之御酒被下候

也、躡而御歸興也、此晚新納越後守殿(忠也)・山田新介殿・上原長門守殿(高近)・猿渡越中守殿、拙宿にて閑談共也、酒宴也、此夜新納武州・伊集院野州無沙汰候とて來儀也、

月待之由候て、深更まで種々之物語也、△

一廿四日、出仕如常、宇都殿(名和彌孝)より、御歸陳之御祝言、使書にて申也、御太刀・御馬進上也、從赤星殿(統家)も右之御祝言也、巻物・御太刀也、使者西郷越中守也(幸勝)、此度御

談合之内隠蜜之条、口外有間敷由之神判各被仕候、▽淨光明寺去冬已來遊行ニ被着、日州へ逗留候て頃歸宅被

成候、然者指出被成御見參也、此日於護广所、明日御連歌之一順仕候、其歸ニ忠棟風呂焼せられ候、可參之

由承候間、心靜ニ風呂ニ入候、從夫惠玄之立花一瓶いたされ候、一覽申候て歸宿候、

一廿五日、御月次御連歌也、殿中御經讀誦最中にて候間、圖書頭殿御會前と申、彼御宿可然之通 上意候て其分

候、早朝各着揃候也、座鉢主居不断光院・圖書頭殿・新納武州・可丹・税所新介殿、客居川上三州(忠智)・忠棟

拙者・宗運・伊集院野州・喜入大炊助殿也、種々御會尺、夜入候て事果候也、

一廿六日、出仕如常、此日珠長在所にて稽故連歌也、吉総州御興行也、種々之御振舞也、深更ニ各罷歸候也、座

鉢客居麟臺・新武州・伊野州・宗運・喜入大炊助殿、主居忠棟・拙者・吉利総州・珠長・税所新介・竹迫主殿助也、發句珠長、脇吉総州、第三拙者也、△

一廿七日、▽出仕如常、△五嶋より、今度於高來表御勝利之御祝言使書也、▽并太刀・巻物進上也、出仕歸ニ、

本田野州へ被召寄候、座鉢客居麟臺・新武・奥山左近將監・猿渡越中守・伊地知越中守、主居吉利総州・拙

者・伊野州・親貞也、種々會尺被成、奥之山方こうた

たと立候て舞候、閑談共也、此日於殿中御談合也、此晚伊地知(重則)右京亮殿より可來之由候間、其分候、伊野州

・拙者也、絮阿なと被居合候、種々閑談にて酒宴也、

夜入候て罷歸候、此夜平田新四郎殿二人拙宿へ御座候、

御酒もたせ也、御會尺共申候て深更ニ御歸也、△

一廿八日、▽出仕如常、△從合志殿御歸陳之御祝言被申

候、使書・太刀・袍面(親書)あまた進上也、▽吾々へも使書并

油送預候也、入來院殿(重時)より夏問之御音信被申候、折着

にて樽あまた進上也、此朝御談合事澄候、△日州高城

表に而豊後衆滅亡候、當年七廻ニ相當候、然者於彼堺

大施餓鬼之由被仰出候条、山田新介へ談合申、閉目候、

都於郡地頭へ長持寺高城へ越有へき由申候、并御物等

之儀申候、財部地頭へも此由油断候へぬ様にと書狀認

候て、山新へ渡申候、▽高崎有閑齋(能志)より、田布施金藏

院、伊作花熟里名之内ニ門格護被成候、御諏方御頭役

を難澁なされ候、いかゝ有へき由申也、即書狀にて曲

事之由也、其故者、新寄進なされ候へ、御神役所々以

堅固ニ御沙汰被成之由也、出仕歸ニ忠棟立花一瓶被成

候、見申せ之由承候間、同心にて一覽仕候、言語道断

面白風情にて候、此日忠棟へ參候て、蹴鞠之條々、飛

鳥井殿(雅教)へ上洛之刻被得御意、其一とをり相傳申候、然

者雅教御自筆之書物共写候へと承候間、書写候、此日

不断光院・道場へ御礼ニ參候、兩所共ニ御留守にて候、

此日淨光明寺拙宿御礼ニ御座候、御閑談也、御酒參會

候、此晚河嶋殿被來候、市來野之駒髪切せ申候、左候

て見申候処、本田信州來入候、從夫彼衆へ夕食寄合、

酒宴にて閑談也、△

一廿九日、▽出仕如常、御談合衆各隙明候条、御暇被申候

也、此日法花千部御成就候、御聽聞也、布施等於殿

中被曳候也、吾々も御暇被下候間、御寄合中へ御暇乞

ニ參候、所々にて御酒也、忠棟へ蹴鞠之書物書写申候

而返進之候、是にても御酒にて閑談候、芋頭なと申候

水さし見せなされ候也、光宗拙宿へ御座候、御酒御も

たせ也、矢野方なと被居合候て、各參會賞斷仕候也、

此日税所新介殿にて御寄合中へ申候、先年肝付ニ對御

弓箭ニ之刻、廻ニ町田左近將監と申候、敷祿殿計策被

成候、乍勿論御門之人にて候間、守護方へ罷出候する

を大慶ニ被存、廻を取て上候する談合然と落着候処、

此方より御疑共被成、一兩日遅々候て、謀略露顯候て、

彼人生害候、依妻子等、又其母にて候へ拙者母方之娈

にて候、それなと迄死罪候、然者此類當時皆々御所領

被下候て罷居候、彼へ其跡候へぬへ無其儀候、拙者無

余儀ゆかりの事候、此跡を可被召立事各頼存之由町田
 出羽守殿へ談合申、同心ニ申候、此儀御納得ならハ、
 右之將監之甥にて候肝付名字之者、拙者家景ニ罷居候、
 是を一跡ニ取立可申候、是又御門(門)之儀候間、私にハ
 成ましく候条、各次之時御披露頼存候由申候、御寄合
 中御返事、程久儀候間然々覺無之候、併町羽・拙者申
 候、其紛有間敷候、拙者も定而宮崎などへ、彼跡ハ取
 立置候するとそ存候へんすらん俣、左様之明合之時、
 無異儀談合可被成由也、又新介殿へ申置候、今度有馬表
 へ拙者一人久々被召置候、諸篇諸人へ申事等無承引方
 も候、左候へハ、必竟御爲ニ罷成ましく候間申事候、△
 來八月ハ必肥後國中御出勢相定、談合事澄候、然者彼
 表などにて老中役ニ拙者一人、いつかたへ罷越候へ又
 居留候へ、なと承候共、一圓ニ罷成ましく候、御寄
 合中誰一人も御座候する御同心と候する時者、何と様
 にも御供可申候、無其儀候へ、是非以御侘可申候、其
 時ニ望候て如此申候へハ、或ハ境目辞退、又ハ苦勞な
 とに依候て申ニ可相當候、然間兼日申置にて候、巨細
 存分ハ其節可申候、堅御届被聞置せ候て肝要之由申候
 也、▽又去正月三日、深水名字之人宮崎之衆中にて候、

慮外ニ盗いたされ候、既ニ鳥目を懐中より曳出候、其
 外一兩程懐中ニ被盜候者候、然者其人も無余儀被思候
 哉、刀ヲ拔追払候、然処若者共落合ノ仕詰候、様子
 ハ衆中各被存候間、無是非候、併御内之人にて候つる
 間、此由申置候、年頭祇候之砌、餘々不祝言之事にて
 候間、不申候、従夫御出勢旅中ニハ不存出、于今遅候
 由申置候也、此晚白濱のこたく出船申候、船元まで若
 衆中なと暇乞ニ被出候、此夜ハ白濱へ留候、

七月

一朔日、如例、看經等申候、白濱にて種々會尺共仕候、
 此日渡海と存候つれ共、天氣悪候て彼所ニ滞留申候、
 御酒など、又盤之上なとさせ候て見申慰候也、

一二日、早朝出船申候、此日宮内桑幡殿へ御礼之爲濱市
 へ着岸候、馳而桑幡殿より使者預候、并馬被遣候、然
 者即桑幡殿へ參し候、先三献也、其後會尺にて候、留
 守式部(式部)太輔殿被來候、御酒預候也、同座にて種々會尺
 也、座過候て茶湯などにて雑話共候、拙者持せ之御酒
 酌申候て、各々へ申候、此夜治部殿御酒持せ被來候、
 深更まで各閑談也、

一三日、毘沙門へ別而讀經共申候、留守殿へ使者進之候、

海鹿荒卷進之候也、留守式部太輔殿被來候て物語共也、
名乗之字占之易之書持來見せなされ候、(夫脱カ)從閑談候処、

朝食出來候、由候て、纏而桑幡殿振舞也、數篇御酒參候、
史部將基拙者とさすへき由候間、四五番さし候而慰候、

勝負いつかたにも不落着候、其後留守殿へ歸宅也、政
所殿へ礼ニ參し候、御酒持せ候、桑幡殿二人も彼方へ

にて候、種々會尺共也、座過候へハ、直ニ敷祢のこと
く打立候、各大津川之邊まで被送候也、臨薄暮敷候へ

着候、(敷祢願賀)休世齋へ直ニ參候、種々御會尺、深更まで酒宴
也、

一四日、朝食休世齋御振舞也、敷祢(願元)三郎五郎殿も下被成
候て相伴也、種々會尺候、玉寶唐人御酒持來候、酌共

申候て戯候、大笑々、纏而敷祢を打立候、都之城にて
破籠など受用候、俄ニ雨降候而、輿など雨紙にてふか

せ候、從夫雨いたく降候て、日も暮行候候、佐野之渡
など思ひ出られ候、漸うハもと云村ニ着候て、留候

也、

一五日、早且上本を打立候、田野にて破籠など受用候、
從夫加江田來者直ニ歸候て、吾々ハ宮崎へと急候処ニ、

田野之渡に行かゝり候へは、水増候間、成ましき由地

下衆指出申候、從夫地下之若衆中廿人計指出、荷物等

など各被持渡候、然者宮崎へ通候するハ鷺瀬之渡難成
之由候条、又加江田のことく罷越候、さき衆に木原町

ニにて追付候、爰かしこの川深く候て、菟角候て漸薄
暮ニ至、加江田内山へ着候也、

一六日、早朝より各指出候、(上井兼兼)恭安様よりも御使にて、城
可罷登之由承候也、尤可參候へとも、一兩日雨ニぬれ

候故、氣分然々なく候、明日ハ必宮崎へ急可申候間、
此度ハ御無沙汰可申候、乍憚申刻計御下候へかし、可

拜尊顔之由御返事申候也、此日肝付雅樂助殿、此方へ
越候由聞付被成候とて來儀也、曾井ニ堪忍難有候条、

何方へも移候する由地頭へ暇被乞候、可然之由候間、
いつかたへ移なされ候て可然候する哉、拙者へ尋之通

也、さてハ移之志候哉、御存分次第候、就其移処之事
承候、此度かこ嶋邊之出合共承候分へ、當秋中諸方

角移之儀ハ難定存候、然者急被成候へすと、次第へ
に聞合られ、移之儀御定肝要に存候、菟角御地頭比志

鳴殿(義志)被頼入候て專一之由申候、御酒參會、閑談共候て
歸宅也、恭安様御下被成、圓福寺・祖三寺御物語ニ相

手ニ呼申候、茶屋にて終日御會尺申候、四方山之雜話

共にて、時々茶・酒など也、及夕陽各御歸被成、此晚雨降候俣如此申候、

今日よりの雨心せよ天川あすの渡の水や増らん

一七日、旅泊之麻衣なと七夕へ借申候、虫干なと候する書物ハ無之候間、不及是非候、昔之人ハ我腹中ニ書物候とて、腹を日ニ干たると申候、吾々も酒ニ虫干する物にて候ハ、左も候するやと大笑迄候、此日宮崎之様ニ越候、於殿処宗琢瓜なとくれ候、やさ原渡にて賞翫申、良久やすらひ慰候、申刻計宮崎へ越着候、歸宅候とて衆中なと被來候、拙宿風呂焼せ候て入候、此夜柏將(柏原將)なと深行まで酒宴にて雑話共也、

一八日、衆中各被來候、茶湯なとにて物語共申候、從財部使預候、鎌田新介也、此間かこ嶋へ辛勞申之由、高城表にて施餓鬼之調達之事申候、難成侘之事、財部衆廣田名字之者、屋敷持にて候、然ニ此度御出勢にも、人なと立候へて聊尔申候、其上御物等をも借用申、返進不仕候而氣任迄候、如此者被指置候ハ、衆中皆同ニ、御公役等時宜ニ依侘可申由候通承候也、施餓鬼調達之事者、連々被成候儀候、殊ニ豊州衆滅亡候て今年七廻ニ相當候間、別而大施餓鬼之由被仰出候、寄々之

儀と申、是非共ニ御閉目肝要候、御物等之儀者、今少山田新介(有徳)へ談合申候て、委可申候、又廣田方事、只今如承候者聊尔千万候、早々所領没取候て可然之由申候也、此日雨中之間、終日暮・將暮にて慰候、折節西俣

七郎左衛門尉京樽一持來候、各々へ寄合賞翫申候也、△一九日、▽如常、就施餓鬼之儀、高城・財部へ関右京亮越候する由申付候へ共、洪水故留候、此日も雨降暮候間、盤之上なとにて慰候時分、関治部少輔御酒被持來候、各參會賞翫申候而、終日雑話共也、△今度御出勢諸勢辛勞共被申候、然者新納殿・樺山殿(忠助)へ爲御使、衆中進之候へと鹿兒嶋にて承候間、新納殿へ和田江左衛門尉、

△一十日、如常、此日も雨中徒然ニ有暮し候、海藏坊御酒被持來候、數祢越中守なと寄合申、賞翫仕候、終日暮・將暮なとにて候、白木之弓なとあまた撰せ見申候、

一十一日、御會所作之切符、皆同檜材木之由承候間、山裏へ可申付条、彼方不知案内候間、嶽米良殿(重徳)内衆廣原より召寄内談共仕候、從新納殿使者預候、御使者之御礼也、并拙者へ無首被成由共也、次ニ者御親父三年忌にて候間、風流させられ候、就其小袖餘多御借用候、

即借進之候也、若衆中あまた被來、暮・將暮などにて被慰候間、御酒振舞候、此晩者此方庭にて鞠也、從財部施餓鬼調達佐之儀前刻承候つれ共、頻と申候間、何と様にも校量次第候、併御物之事ハ被下候へてハのよし也、柏原將監殿(有勢)まで使也、委承由返事なされへき由、柏將へ申候、

一十二日、如常、高城へ遣候書狀返書到來候、施餓鬼之儀細く納得候、然者調達之事、從財部佐之様に候哉、左も候へ、高城より一かたに閉目候する由承候、御物等之事ハ拙者校量可申之由承候也、御主殿作之切符書狀相副、嶽米良殿へ遣候、并山裏諸所へも同前ニ遣候、此日竹箒風呂長野談路守番前にて被燒候、可來之由候間其分に候、夫過候て大門坊庭にて鞠共仕候、薄暮歸候処ニ、西方院より可參之段候て參候、非時振舞也、種々之會尺也、誹諧などにて閑談仕候而、深更ニ歸宿候也、

一十三日、坪之弓場普請させ候て見申候、鎌田源左衛門(兼政)尉此間鹿兒嶋へ逗留申、夕歸候由申候て來候、寄合中より承候、栗野八幡作ニ付、當國番匠衆之事被仰候、拙者噯之番匠計彼方へ越候、其余者無其儀候、依夫去

月中にも造畢無之候、曲事ニ候、涯分糺明可仕之由也、

次にハ當年御諏方居頭役、一方ハ新納御名字へ被仰付候、今一方長野名字たるへく候、早々當國へ被居候長野名字之衆へ可申付之由、承候也、此日高城へ施餓鬼之儀談合之爲、関右京亮遣候也、滿願寺此間無沙汰被成由候て來儀也、西大寺茶預候、觀千代へ牛黃圓預候也、御酒など參會、閑談共申候、此晩坪弓場にて的射候て慰候也、各弓場始とて御酒くれ候、種々之儀共也、

一十四日、早朝都於郡へ長野殿惣領被居候間、居頭之儀校量候へと可被仰付之由、鎌田雲州(政近)へ長山兵部少輔にて申遣候、并栗野へ番匠不被遣候、糺申理候、居頭役之事者從鹿兒嶋彼方へも直ニ五日前被承候間、其校量候由也、番匠之儀不紛拙者前より申付候条、可被遣候へ共、此前彼方へ數日番匠詰させられ候間、此方へ届共候へて不用候、不及是非之由也、從高城関右被歸候、施餓鬼之儀高城・財部談合を以調儀可輒之由也、此晩拙者悴者共踊仕候、見物共申候也、

一十五日、祈念等別而申候、吉利殿(忠孝)へ使進之候、久無沙汰申候由、并的矢羽先日所望被成候、持せ進之候、次ニ三城へ長野名字被居候間、居頭役之事申渡候也、衆

中各被來候、御酒參會候也、吉総(忠應)へ之使歸候、居頭之儀即可被仰付之由也、的弓拙者ニ預候、此日柏田より踊來候、見物申候、此晚若衆中此方庭にて鞠被蹴候、此夜衆中達踊也、見物申候、即御酒なと振舞候、

一十六日、如常、從山田新介殿使者也、関右京亮へ意趣聞せ候、前刻より度々申渡候施餓鬼之事、來廿三日・四日ニ相定候、然者調之事、財部と談合可被成之由申候、何と様にも拙者分別次第校量可有之通也、先日財部と談合被成候へと申渡候、彼方之儀共承合候へハ、六ヶ敷共被申候、僮者此度之事者、新介殿一方に高城より御調達肝要候、財部之事ハ指置候て、此等相應之御奉公後日可申付之由申候也、兼又新介殿并衆中かこ嶋御祭礼御供之事、施餓鬼御日取指延候間、其隙過候てハ迎も參上成ましき由承候、是又尤存候、當年之事ハしかと被居候て、施餓鬼閉目被成候て肝要之由申候也、此晚此方坪之弓場にて的也、拙者倅者共、衆中も少く被射候也、酒飯振舞候、夜入候てまで酒宴なとにて雑談也、

一十七日、如常、此日曳目之口弓場普請、衆中被指揃いたされ候、普請あかり候て、鞠たるへく候とて、拙者

庭へ被揃候、然処ニ雨降來候間、無了簡候、漸々風呂焼せ候て、各寄合申入候、本田治部少輔殿無沙汰候とて越候、是も風呂へ入候也、閑談共也、

七月

一十八日、觀世音へ別而讀經仕候、寺田壹岐丞を以伊集院(久也)作州へ申候、今度かこ嶋へ參上申候、從談儀処申せにて候、先年根占殿假屋(重張)へ(兼心)太守様御光儀之御歸殿時分、御氣分笑止にて候キ、就夫、其時分鹿兒嶋へ被有合候諸所之衆談合被成、神舞之御立願候、于今成就無之候、御人數ハ誰／＼にて候哉、伊美使被成候間、御願果被成候て可然之由申候也、并如舊例御祭礼御供ニ、各かこ嶋へ御祇候無油断様にと申候、返事、神舞御立願其分に候、肝付霜臺(兼寛)など別而勸之儀候つる間、談合被成度候へ共、當時者上洛之留守に候、菟角作州自分に成共成就有へく候、委被聞置由也、御祭礼御供之事も得其心有由也、此方坪弓場にて的各射候、鎌田源左衛門尉殿・敷祢又十郎殿、的衆に酒飯振舞被成候、種々之儀共也、鞠被蹴候衆ハ傍にて其分にて候、色々之慰也、此晚沙汰寺・穗村衆同心にて踊被成候、御酒共參會候也、右見物共候て、直ニ若衆中拙宿にて酒宴、

閑談也、此日桃山殿(忠勤)より使預候、先刻使節進之候御礼也、

一十九日、如常、竹筥へ淋汗之風呂也、和田刑部左衛門

尉番前也、拙者入候へと被申候へ共、先年鹿兒嶋へ居

候砌、京之四条之道場之時宗日當と申下候て立花共申

候、一兩年拙宿へ留置候、彼人當時与州川野殿(河野通直)頼候て、

寺家格護候て被居候、此前我々懇申候、其礼として被

來候、參會申會尺共仕候、京邊之物語也、葉柴筑州打

負之由共被語候、依是風呂にハ不罷下候、日當より関

之小刀十・伊勢物語二條殿御筆とて預候、内々までへ

も関之はさミ・硯・小刀など預候、此暮此方庭にて若

衆中鞠被蹴候、同坪弓場にて的被射衆も有之也、此夜

竹筥より踊來候、踊衆へ御酒振舞候也、

一廿日、如常、重阿へ朝食振舞、閑談申候、此日坪弓場

にて的也、鞠被蹴衆も候、又暮・將暮之衆も有、種々

慰也、井尻伴兵衛尉右之衆へ酒飯振舞候也、此晚敷祢

休世齋御越被成、種々御會尺共仕候、雜話共也、

一廿一日、如常、本田弥六殿へ鷹可進之由兼約申候条、

餅原方へ鷹掬(鷹)させ、鹿兒嶋へ遣候也、重阿歸國之由候

間、御酒參會候て暇乞申候、段子一端進之候也、此晚

此方庭にて鞠也、

一廿二日、弓場朝普請させ候て見申候、其刻市來作州從

野尻被來候、即同心申城へ登候、作州承候趣、先日紙

屋へ弓場普請候趣、若衆中種々邪礼共被仕候、然処脇

刀輪走候て、大村名字之人越度候、刀之主も疵付候、

十四五人組合候間、誰人相手共更ニ不知候、地頭稻富

新介(長辰)もてんほう無益之由被止候處、如此之儀案中出來

候、曲事之由稠被申候、然者新介殿二男を始、若衆中

邪礼被仕候衆十四五人、霧嶋のことく頼存候て被參候

を、先々野尻へ被留置候、此由先日作州より使にて承

候砌、拙者申事ニ、相手共不知候ハ、更ニ無了簡候、

併てんほう被申候衆ハ曲事迄候、新介殿堅被仰候尤候、

菟角御内衆一人越度被申候事候条、鹿兒嶋へ御申候て

肝要之由申候、依其作州自身越にて候、尤鹿兒嶋へも

可被申候へ共、同前之儀候、殊ニ何と様に被聞合候て

も、相手之仁有へき事にも無之候、當者被失面目候衆

も、被召直候て坎可然候すらん之由也、柏原將監殿(有明)に

て承候、先一ヶ条、先日之返答之ことくかこ嶋へ御申

候て可然候、拙者一人にて菟角と難申由申候、又々承

事ニ、勿論かこ嶋へも可被申事ニこそ候へ共、何篇當

國之事ハ拙者存儀候、殊ニ後日も、彼儀相手なと候つ

る物を無禮被成たるなと、候する儀ハ有ましく候、是非共承分候へと支而承候間劫者之承事候、左候ハ、何と様にも作州校量ニ任せ候由申候也、御酒參會、閑

談共候、持せの御酒なと賞翫仕候、池田主馬首、同名之者として拙者見參之由候て來候、御酒持來候、井木綿

・中紙くれ候、此日茶の始にて候、本田治部少輔・上井右衛門尉(兼成)、此外十人計の前也、麓之弓場にてと候つ

れ共、天氣無然と候て、此方坪弓場にて各被射候、敷祢休世齋見物被成候、酒飯にて終日種々之儀也、晚氣

雨降候間、從夫的者不成候て、碁・將碁・乱舞なとにて、至薄暮まで酒宴也、穂北より衆中一兩人、無沙汰

候として御酒持せ被來候、參會候て賞翫候、從福嶋八木名字之者御酒持來候、即賞翫申候也、

一廿三日、如常、雨中にて候間、然と罷居候、休世齋なと終日御物語申候、野村大炊兵衛尉召寄、唄いはせ申

候て承候、太平記なと一二巻、休世齋へ讀候て聞せ申候、并直心抄として西明寺殿子息相模太郎殿へ被遣候、

是なと讀申候、其内に有歌にて候、憂世にハかゝれとてこそ生れつれ理しらぬ吾泪かな、是を各感し候て、

日を暮し候也、

一廿四日、地藏菩薩へ別而祈念申候、弓場之朝普請させ候て見申候、猿渡大煩助殿御祭礼御供ニかこ嶋へ被參

候、拙者尤參上可申候へ共、早晚之痔病當時無爾と候、其上來月者御出勢定候、爰元隙候間、連々之立願なと

はたし申度候、私にてハ候へ共無余儀事候条、不參之儀とも御寄合中へ申述候也、此日瓜生野正祝宮本之弓

場誘候間、的射ニ可罷下之由申候間、衆中少々同心申罷下候、休世齋も御見物之由申候て、御同心申候、種

々御会尺共申候、終日之的也、休世齋者此晚城へ歸被成候、吾々ハ留候間、此夜正祝処へ留候、終夜酒宴な

と也、衆中同宿申候、一廿五日、天神へ別而讀經共申候、此朝鞆被蹴衆も候、

又的射衆も候て慰共也、又々正祝種々會尺共申候、從都於郡竹之下名字之人使也、鎌雲事(兼田政近)、此度御祭礼御供

之事者、都於郡へも御諏訪御祭礼候間、申通被成候、二男御供ニ參上之由候間、其分に覚悟候処、洪水にて

難成候、今日も本庄之川見せさせられ候へ共難成候俣、不及是非候、然者先々拙者へ聊尔なきよし承由也、先

々委承置候由返事申候、當所衆中三町衆通、御祭礼御

供ニ今日打立也、支度者烏帽子上下たるへき覚悟にて被參候也、從金剛寺より風呂燒せられ候、可參之由承候間參候、風呂過候て御酒御振舞也、從夫歸候處、大門坊にて鞠也、至薄暮城へ歸着候也、將亦去晝程、休世齋使を以瓜生野へ罷居候ニ承候、拙者留守にて御徒然候、急候て歸宅之由、捻にて承候、夕より慰被察由共戲言共候て、奥ニ、独ねの永き夜すからいたつらにおもひこそやれ君かまとゐを、と書付預候、即御返事共委申候て、又奥ニ、まと居してたゞまくおしき心にハ独し有そうら山れぬる、と申候、寔々客人ハ留守ニ置申候て遊山、慮外至極候、無御隔心候、(上井兼兼)恭安齋より休世御越之由候て使被下候也、

一廿六日、如恒、泉長坊上洛候、下向候とて被來候、太神宮御拔并扇子・帶預候、鞍馬寺妙法坊より書狀・扇子二本など預候、意趣、武運長久之御祈念無緩之由也、并拙者暖之内ニ御神領共候、夫役等之專用捨仕之通被聞せ候、大慶ニ被思候、弥頼被成之由也、京邊念々敷之駄物語共也、葉柴筑州被打負、松平良家(康)保勝利之由也、此日休世齋野大へ唄被聞せ候、此晚此方庭にて若衆中鞠也、御酒なと振舞候、

一廿七日、如常、休世齋など終日御雜談共申承候、泉長坊召寄京邊之物語共也、駕川方御酒持參候、各參會賞翫申候、泉長坊京茶預候、此等も各賞翫申候、此暮此方にて的・鞠なと也、△

一廿八日、▽御崎寺如例講讀ニ御座候、此朝△和田刑部左衛門尉八潮御祝言ニ進上申候也、次を以御出勢之儀、先刻之御談合ニ無相異候哉、委承候て、可致其心得之由申候也、并京説共泉長坊被申分、寄合中まで申候、(義忠)大友殿・龍造寺、(政家)節々葉柴筑州頼入之由被申上せ之由也、就中龍之事、對御當家ニ迎も弓箭者成間敷候、然者何と様にも筑州分別にて家を被殘候様ニ頼之由共也、菟角九州之事ハ、(義久)嶋津殿御進退程有間敷之由、諸國申散之儀共也、▽此晚從都於郡野村(金剛)民部左衛門尉、久無沙汰之由被申候て被來候、鶴戸山參詣之覚悟候て、此日より拙者精進入にて候、能仕合民部左衛門尉被來候間、百韻興行申候て法樂之由申候、彼ハ劫者之事ニ候条、斟酌ニ候へ共、兩吟ニ可仕之通申候、何と様にも候俣、發句類ニ彼人と申て候へとも、法樂にて候間、拙者申候て可目出之通支而被申候間、其分候、
月に雲吹あはせすの風もかな 又、

岩屋戸八月さへ磯の草葉哉 如此二句申候て尋候

へハ、いづれも可然候する哉、月に雲の句へ、此前於
 鵜戸山當國之劫者之發句ニ、花に風吹あはせすの春も
 かな、とせられ候由物語候、當者同類にて候、無是非
 候、殊更來月二日參詣と候条、月も見らくすくなる
 へき折に候間、彼發句可然之通被申候間、岩屋戸之相
 定候、然者脇・第三ハ民部左衛門尉被仕候也、此晚め
 し寄合候也、

一廿九日、於毘沙門堂法樂之連歌仕候、爲綱と兩吟也、
 執筆野村大炊兵衛尉也、此日成就申候也、此朝普請目
 曳之口ニさせ候也、

一卅日、目曳之口普請也、爲綱寄合候て、昨日之懷紙指
 合なと見候、并大炊兵衛尉へ懷紙清書申させ候也、此
 日民部左衛門尉ハ歸宅也、

八月

一朔日、祝言等如恒例、衆中各礼儀承候、御酒など預衆
 も候、寺社家同前各御參會候也、諸方よりも礼儀共承
 候也、此日鵜戸參詣之爲海江田へ越候、(數祈願賀)休世齋同道申
 候也、日暮候間、蘇山寺へ留候、休世齋・鎌田源左衛門
 尉殿・柏原殿・野村大炊兵衛尉殿・上井右衛門尉殿、

此衆同心申候、蘇山寺殊之外會尺被成候、終夜酒宴共
 也、

一二日、早朝出船申、鵜戸へ參詣申候、先船本まで別當

より御使僧預候、(夫脱之)從宿坊へ着候、御案内者と候て使僧

預候、驢而同心申別當へ參候、先三献也、食籠着にて

樽二荷進入申候、案内者被仰付候間、即神前ニ參候、

言語道断之靈地無申計候、日來之念願之祈并讀經等申

候、御弊頂戴仕候、御鑑之坊主御縁起之趣共委物語也、

參錢百疋進献申候、其後御本地堂へ參候、別當庭まで

指出被成、類と承候間又御坊へ參候、座躰客居休世齋、

次(上并兼卷)恭安齋・柏原左近將監殿・愚弟神九郎也、主居別當、

次拙者・鎌田源左衛門尉殿・上井右衛門尉也、種々御

会尺無申計候、三篇目拙者持參、別當へ酌申候、即又

別當御酌被成候、衆僧へ拙者持せの御酒、同名右衛門

尉酌にて申候也、吾々悴者などへも銘々ニ御會尺被成

候、召出之御酒など也、御兒・若僧達御酌などにて、

種々御懇志共也、二王堂にて追酒也、八町坂上まで別

當送ニ御出也、拙者始而參候とて、百疋別當より預候、

至薄暮從鵜戸出船申候、矢野大炊大左衛門尉、小目井ニ

頻可來之由申候て中途まで來候間、此夜小目井ニ留候、

種々會尺、終夜酒宴也、圓福寺も同心申候也、

一三日、早朝矢野大炊左衛門尉會尺申候也、野村大炊兵衛尉昨日船にゑわれ候て、野嶋ニおろしき置候、然者陸路より參候するとして被來候、鵜戸別當へ昨日御懇勸之儀共御礼申候也、恭安齋、伊比井へ休世齋・吾々御同心之由候間、伊比井へ着船候、此日川下共候て河肖遙也、棧敷共候て、種々珍敷御會尺共也、從別當昨日參候処無會尺なされたる由候て、御使僧也、即參會申候、酒宴也、纏而御礼申候て歸し申候、此晚鞆にて慰候也、假屋種々會尺申候、地下之者共吾々宿へ踊入候、見候て慰候也、圓福寺御座候間、種々我々耳ニ不入御物語共被成候、聽聞申候、深更ニ各小宿へ被歸候也、△一四日、▽假屋種々會尺申候、從野嶋頻可來之由申候へ共、先々隙入事候間、急候て紫波洲崎のことく歸帆候、着船之時分、野嶋之者共中途海上にて御酒と存候つれ共、順風荒候て難成候間、此方へ持參之由申候、種々之儀共也、即賞翫申候、纏而風呂焼せ候由候間、行候て入候、柏將・野大同心申候、折宇迫濱之者共御酒持來候、各參會賞翫仕候、蘇山寺も御酒持せ被來候、此晚於中之城悴者共各寄合候て坂迎申候、深更まで酒宴

也、△此日長野談路守、就居頭役ニ鹿兒嶋へ被參候、歸宅候て野村大炊兵衛尉殿まで書狀にて承候、趣者、御出勢之事、先日吾々祇候申候砌之御談合無相替儀候、來廿六七日、必肥州隈本へ諸勢被着合候様ニ打立肝要之由承候、然者同名右衛門尉宮崎へ歸候て、此趣諸方へ觸させ候也、

▽一五日、早旦内山茶屋にて休世齋御會尺可申之由申候間、掃地等可申付ため彼方へ行候、柏原殿・野村大炊兵衛尉殿同心申候、先今度宮崎衆可被立衆等書立候、其外種々盛共申候也、此朝ハ天氣悪候て、未刻計休世齋御下也、茶湯會尺申候、柏將・野大座ニ被居候、御茶別儀にて候、此夜ハ茶屋ニ被衆留候て、終夜閑談、酒宴也、

一六日、早朝茶屋にて會尺申候、圓福寺、休世齋又ハ各同心申可參之由承候間參し候、時御振舞、種々之儀共也、無門関四五則讀なされ候て聞せられ候、百丈之野狐ニはかられ候て大御酒ニ罷成、各沈醉申候、柏將・野大ハ宮崎へ申付事等候間歸申候、休世齋ハ紫波洲崎城へ御登也、拙者ハ觀千代丸參宮之ため罷越候間、木花寺まで迎ニ指出候、木花にて種々會尺共候、從夫御

諏方へ參詣申候、參錢百疋進上申候也、御幣頂戴候、
 従夫御伊勢へ社參申候、參錢同前、式三献參候、御幣
 頂候、それより城へ罷登候、於内城式三献、觀千代ニ
 百疋被下候、深更まで種々御會尺也、持參之御酒など
 賞翫共被成、酒宴也、

一七日、中城へ觀千代召烈參候、三献同前、従夫御崎へ
 參候、百疋持せ候也、座主坊にて終日會尺被成候、院
 主より觀千代へ百疋給候也、休世齋・恭安へ留守ニ御
 座候、座主にて珍酒候つる間、拙者兩老へ使ニ而、右
 之酒送進之候、捻之奥ニ、

おもひきや出しし跡ニ君をゝきてかゝる情をかハす
 へきとハ

なと戲候也、御兩所よりも即返歌共被成候也、此晚中
 城へ留候、折宇迫衆踊共仕候、二三番入は共舞候也、

一八日、中城寄合被成、種々御會尺酒宴也、此晚加江田
 御伊勢之前弓場にて的也、種々之儀共也、此夜ハ内山
 ニ留候、

一九日、如宮崎打立候、蘇山寺弓場築せられ候て、拙者
 會尺とおほされ候、然共此度繁多にて無其儀候、そと
 通ニ見可申之由候間、立寄候て見申候、殊之外御酒な

と也、此晚宮崎へ着候、

一十日、歸宅候とて各被來候、暮・將基など也、行前に
 て候間、諸細工させ候て見申候、此晚柏原殿庭にて鞠
 慰ニ蹴候へと承候間其分候、種々會尺にて、深更まで
 酒宴也、

一十一日、此日も細工なとさせ候て見候、時々暮にて
 慰候、此暮休世齋從紫波崎此方へ御越也、

一十二日、藥師ニ祈念等別而申候、脇刀上野弥左衛門尉
 へ作せ候、打立候也、丸ぬき也、此日從紫波洲崎より
 内へ歸也、各供共仕來候、歸着之時分、當所北方・南

方より雜掌くれ候、寄合候て賞翫申候、供衆などへも
 召出之御酒也、一昨日、遊行上人より使僧預候、其趣

者、後住定、鹿兒嶋へ被請 御意、來廿日祝儀必定候、
 左候て聽而當住之定之方者、又遊行ニ打立たるへく候、
 美々津まで送之儀頼被成由也、就夫鎌田雲州へ談合の
 ため堀四郎左衛門尉殿越申候、歸也、雲州者差合事候
 て無見參候、小牟田方にて被相達候、巨細明日使節を
 以可承之由也、

一十三日、如常、觀千代供申候て越候、同名神九郎・加
 治伊与介(本脱)なと歸候間、恭安様へ御礼等申入候也、

二十五日、早朝佐土原へ中書公御二人御歸宅候御祝言ニ

參候、樽一荷・食籠肴にて進献申候、衆中十人計同心

申候、銘々瓶酒進上被申候、家久御父子御指出御寄合

也、折節新納殿又都於郡興善寺被參候、同座にて御見

參也、種々御會尺也、持參御酌申候、又中書公御父子

共ニ御酌被成候、表之御座終候て、奥へ被召寄候、是

へも食籠肴にて御酒持參候、奥にても御酒宴共也、殊

之外酌共申候也、弓削太郎左衛門尉処へ宿申候、罷

歸候へハ、鑾而又七殿御酒御もたせ候て御礼ニ入御也、

又暫酒宴也、又七殿へ拙者刀進入申候、康光也、漸薄

暮ニ打立候て如宮崎罷歸候也、

一十六日、(有殿)如常、柏原將監殿、子息へ帶此方にて解せ申

候へと同心候て被來候、即帶進之候、祝言とて酒肴預

候、終日酒宴也、△此日上原長州より書狀到來候、此度

御出勢之儀、於飯野又々御談合共被成、其趣具ニ此方

まで御注進候する由被聞及候、如何之由相尋也、聊不

存事候間、其分ニ返答申候、鎌田筑後守都於郡へ使ニ

越申候、趣者、今朝從鹿兒嶋之書狀其方より持せ預候、

彼趣者、(大友義統)豊州より使僧かこしまへ被參候、頃歸宅たる

へく候、送之夫丸等縣へ可申付之由也、彼使僧遊行上

人へ被參候、然者歸宅之日限、(鎌田政定)鎌雲前より委被聞せ可

承之由申候、未都於郡へハ不被來由也、彼使物語にも、

今度御出勢指延候様に坎候らん、瀧聞宗運前より都於

郡へ聞え候処者、於飯野御談合共候て、宮崎まで其趣

可相聞之由候通、鎌筑後守物語也、

▽一十七日、如常、鹿兒嶋淨光明寺、遊行之後代定ニ付、

都於郡へ御越候由候て使僧預候、趣者、遊行送之事、

美々津迄可申付之由也、

一十八日、觀音へ別而讀經等申候、中書公より預御使者

候、川上左近番長殿也、先日祇候申候御礼也、折節美

々津より安藤方御酒持來候、使者へ參會、種々肴にて

酒宴也、

一十九日、幕仕立させ候、見申候、從高城使也、趣者、

遊行上人より、近日中被立せ候、然者都於郡より高城

まで着せられへき由候、宿等之儀頼之由候、續前と申

難成候、其上高城ニ者二三反之道場御座候へ共、是ニ

ハ迎も成ましく候、其上一夜御逗留候へ、調達等如何

候する哉尋候由也、拙者返事、此方へ遊行より承候処

者、都於郡より美々津迄と承候、さてハ高城までと候

や、彼方へ猶と尋させられ候て可然候、又調儀之事、去年飢肥より海江田常瑠璃寺まで御座候て、彼寺へ一宿候、吾々へ肥後立留守にて候つる、彼処にてハ調儀ハ不申候、野菜・薪などハ申付候、此分にて候つる、若く左様にもや候すらん、菟角能く都於郡へ御談合候て可然由返事申候、此日都於郡興善寺被來候、久無沙汰之由共也、御酒預候、參會候て閑談共也、此日所へ遊行上人送之儀等申渡候、從本庄萬福寺御酒持被來候、即參會申候、△

一廿日、從海江田人數など召寄打立候処、從かこ嶋庄内役人衆までの御狀持せられ候、其趣、御出勢之儀、來廿七八日隈元へ越着之由雖被仰渡候、御談合替事候、然者來月二日・三日、隈本へ着揃被成候様ニ可然候、此由宮崎へも可被仰渡之趣也、依其打立之事留候、此由當國中へ申渡候也、▽此日幕之加治等敷林休世齋被成候て祝儀也、從穗北兩使也、同名右衛門尉・柏將被聞候、本田治部少輔殿、先年平田孫六殿楚忽之儀共候て、其六ヶ敷事故當所ニ付公役共候、又く本之ことく穗北ニ公役共候様ニ拙者頼之由、平田新左衛門尉殿より承候、是ハ拙者分別にて治部殿此方へ公役被申事に

てハなく候、就口事之儀、中書公など聞めされ候て、穗北之衆中にてハ有ましきに定候て、此方へ公役なされ候条、吾等として意見ハ難申候、本治部少輔殿へ御談合被成、彼校量次第其方へ公役共候ハ、一段可然之通申候、次ニ遊行上人送之事、かこしまより穗北一所にて閉目可被成之由當候、難成おほされ候処、拙者前より彼盛承候分者輒候、目出由也、此返事、不紛遊行送之義盛を以申候、然ニかこしまより直ニ御當候哉、僞者其ことく御閉目可然候、拙者所へ申付候分ハ留候する由申候也、

一廿一日、彼岸入にて候間、別而念仏共仕候、諸所へ續指延候由申渡候返事等到來也、都於郡へ本田大膳亮にて申候、前日遊行上人送之事、所く盛を以申渡候、然処、穗北へかこしまより直ニ被仰付由候之間、さてハ私前より諸所へ申付候てハ指過たる儀候間、先私申付候分ハ差留候、然間盛之書立進之候へとも不入事候条、可返預之由申候也、返事、彼送之事とちまるへくおほされ候処ニ、又く如此候哉、笑止ニ候、併菟角拙者入魂申候ハてハにて候由也、

一廿二日、彼岸中看經同前、此日柏原將監殿頼候て、遊

行上人へ久無沙汰之由申述候、并俵四十徑(魁)微ニ候へとも御合力之由申候て進入候、鹿兒嶋常光明寺へ京樽一荷進之申候、いづれも御大慶之由也、此晚此方庭にて鞠也、各へ御酒振舞候也、此夜長野淡路守・野村大炊(兼綱)兵衛尉、明日休世齋御歸之由聞付候間御暇乞と候て、種々酒肴持來也、深更まで酒宴也、

一廿三日、看經等如恒、蓮香民部少輔処にて細工させ候、下候て見候、種々會尺也、終日慰候也、此日於都於郡遊行上人後代定被成候由也、光照寺・川原田道場、彼兩寺を藤澤ニ被成由也、△

一廿四日、▽別而愛宕へ讀經申候て祈念仕候、休世齋歸被成候、柏田船本まで送ニ罷出候、從夫直ニわち川原ニ船繁候する入江候由申候、然者其邊ニ村を仕立候すると存候条、左様之躰見償候する爲罷下候、齋藤讚岐丞処にて會尺也、各御酒など持來候也、△從清武使也、肥立日限之事、并▽來月十五日祭礼候間、衆中なとも隙入事候、然者祭過候て立有度由之任也、返事、當所も△來月十五日兩社御祭礼候、殊ニ衆中・百性ニ相懸事に候間、祭を指延罷立候、御祭礼ニ指合候へ、諸方以同前たるへく候条、御出勢無人數たるへく候、是非以祭礼

にハ取合なく、來月二日・三日限元へ越着候様ニ各打立肝要之由、返答申候也、從樵山殿(忠助)も續打立日限使者にて御尋被成、同前ニ申候也、▽此日從忠棟曾井傳ニ書狀預候、趣者、來廿六日必打立被成候、拙者も其覺悟可申由也、今度御大將兵庫頭殿御當之通、爲存知とて書載候、大野治部(忠志)太輔殿より、山田百性逃散仕、此方へ居候由被聞及候、此等之儀御法度之前に候間、無異儀歸候様ニ頼被成由、使者にて承候、即歸申候する由、返答申候也、

一廿五日、天神へ別而看經等申候、行之談合共衆中寄合候ていたされ候也、此日新納殿入御也、即申請候、御酒御持せ也、座躰客居四郎殿・鎌田源左衛門尉殿(兼茂)・新納右近將曹、次新納殿内衆上井名字ノ方、主居拙者・柏原將監殿也、種々御會尺共申候、御持せ酌被成候、即拙者も御酌申候、此夜ハ柏原殿へ御留被成、拙者御礼ニ參候、將監殿御會尺共被申候也、△

一廿六日、鹿兒嶋へ參せ候飛脚歸來候、親貞・忠棟より書狀到來候、先日被仰越之様ニ、無油断早々打立肝要之由也、秋月(種彦)より使者返事も未落着候、彼是今少御談合可入子細共候間、來廿九日於馬越御談合可有候、忠(義)

平公も彼方へ御出合可有候、其外談合衆彼方へ可被揃候、拙者事も必く可罷出合之由、上意之由也、▽此日吉日にて候間、首途ニ岩戸へ參詣仕候、滿願寺城へ御登候、此度御出勢別而御神慮肝要之儀、鹿兒嶋より被仰候、然者不動護廣廿一座歸宅次第修行可仕候、立願頼存候由申候、懺而祈念被成、願書預候也、△

一廿七日、肥後表御出勢ニ付打立申候、於馬越御談合と候間、定而一兩日ハ彼処ニ可爲隙入之条、衆中ハ明日可被打立由申候、▽此日紙屋邊までと存候処、吉利殿御（忠徳）父子竹田ニ出合被成、於假屋種々御會尺也、然者斜陽ニ罷成候俛、彼処ニ留候、頻総州御館へ可參之段雖承候、沈醉申候俛、加治木雅樂助を以申述候、△

一廿八日、▽鷄鳴ニ荒神へ看經申候、△未明打立候、▽野尻町にて破籠なと受用候、然処從飯野來者申事ニハ、武庫公御打立今日と定候つれ共、如何候哉指延由申候、（上井秀秋）然間愚弟次郎左衛門尉処へ人を遣承合候、一定忠平公御打立者今日指延候、菟角今夜ハ彼処へ留候へと候て、使者被遣候、就其彼館へ行候、茶屋にて會尺也、種々肴酒にて閑談共申候、△

一廿九日、▽早朝次郎左衛門尉殿振舞也、種々之儀共候、

從夫打立候、般若寺麓之川原にて破籠共受用仕、△漸馬越田中之大官司処ニ越着候、即忠棟御宿へ使進入候、趣者、今日於此方御談合之由候俛、急可參着覺悟候処、忠平公御打立遅候間、當者今日御談合ハ迎成間敷存候て、路次等心靜ニ只今參着候、尤參候て可申承候へ共、路次之疲勞之由申候也、さてハ越着申候哉、可然候、▽明日御談合たるへき由返答被成、△

1428

「久四郎忠清一流系圖」

忠清

女子

千鶴（緋御下）

天正十二年甲申七月六日誕生、母同子 太守家久公、初爲伊集院源次郎忠眞之室産一女、忠眞伏誅、而後嫁島津下野久元、

1429

「中務大輔家久譜中」

家久平生嗜歌道、因茲師於禪山安藝守善久入道玄佐老、傳授古今集進禮書、于時玄佐老之有返簡、共記左、

今度古今集傳授之事、雖不淺儀候、以御懇志令成就之段、過分至極候、誠々末代之面目不可盡筆舌候、仍乍些少金十兩・銀廿兩、并水田納之堅約令進覽之候、聊補御祝儀計候、恐惶謹言、

〔天正十二〕

七月十日

家久(花押)

玄佐公

參人、御中

〔全〕

如貴意、今度古今集之儀被仰下候之条、從宗祇公、近衛禪閣様御傳授、同、大閤様、御家門様代々之御抄物書寫進覽、以其次而乍斟酌令口舌事、獸之似吼雲上、然者爲御祝詞御太刀・御馬、此上金銀卅兩、秋之樂露命之仙藥等愚老存生間、拜領過分至極、難盡短筆候、諸吉、恐惶謹言、

〔天正十二年〕

七月十日

(樺山善久)
玄佐

中書様

參御報人、御中

〔卷末ニアリ〕

三原遠江守昌安有所與岩切三河守之書、雖爲他家證書、其中記自久逸幼稚至知天命之事、以故記于此矣、

1433 「正文在岩切二右衛門」

奉對嶋津殿様江岩切一統之夏、上古以來一日片時無違變、普代御奉公之儀無比類候、就中、忠國様之御代仁可樂齋〔大書様〕祖父之夏、別而被抽忠勲候、其謂者、伊作殿之御息、大安殿与申候御子候ツル、御若年之時死去候、其御伊作之夏無主之爲躰候之間、乍恐忠國様之御三男之〔河州之御見之名〕龜房殿様を伊作殿ニ申請度之由、鎌田方鹿兒嶋へ以參上數ヶ度雖被申上候、忠國様依無御領掌之、鎌田方心苦敷被存候之折節、龜房殿様爲御遊覽表方へ御指出候を、鎌田方奉見、是者与天之処と被存、龜房殿様を無是非懷取被申、我か假屋へ奉入被申候、此儀殿中へ被御聞召、御簾中様其外上下御驚さハき無限様躰候、餘々笑止奉存候而、岩切方被申上候様者、某、龜房殿様ニ追付御供可申候、於我等御供申候者、少茂無御心元子細有間敷間、可御心安之由頻被申上候へハ、御簾中様被聞食、於其儀者御満足たるへし、偏ニ御頼之由蒙仰候、此由を、忠國様も被聞召、さてハ岩切左様に申上候欵、御感悅至極ニ被思召候、

1434

肥後立之事示給候、得其心候、替儀候者、將又可預御注

「上包」
岩切參河守殿
御宿所

昌安
「上包裏ニ有之」
三原前遠江入道

從爰者岩切之夏、龜房殿様之可爲御乳人、龜房殿様ニ付添申、野山之終迄も御供御憑之由被蒙仰候、扱者從今日者岩切之事、龜房殿様へ御參せ候通、龜房殿様へも岩切へも、即御點合被成候、然間、河州様も侍を御持初之岩切にて候条、元日其外諸事御祝之時者、岩切を最前ニ被召出候事、無其隠候ツ、以其一筋目、河州様福嶋江御移之時も御供候、又自福嶋伊作へ御移之時茂御供被成候、此類之士御家中ニ無二之儀候、當時數万人之侍雖多候、奉對當、御家之一筋に、岩切方ニ可相并御年來之仁者二人とハ有ましく候欵、至愚老先祖之儀御尋候間、大方書付進入申候、恐々謹言、

天正拾二年甲申八月十二日
三原前遠江入道
昌安(花押)

岩切參河守殿
御宿所

進候、仍宮崎へ茂即御狀之趣申越候、恐々謹言、

「天正十三年比カ」
八月十九日
北郷(時久)
一雲(花押)

本田下野守殿
返報

1435

「義久公御譜中」

肥筑前後四州之中、未屬旗下者多矣、吾往欲盡攻平、而當日罹微恙不得進發、是歲天正十二八月下旬、使弟兵庫頭忠平爲元帥領薩隅日三州中軍衆赴肥之後州、諸將等九月朔日、先群集菱刈院馬越、而爲評議定其道矣、同四日、諸將引太軍到八代也、

是以降肥筑陣中諸事、載忠平譜中也、

1436

「御文庫ニ番箱義久公一軸中」
「義久公御譜中正文有之」

畏而言上仕候畢、抑八朔之御吉兆千喜萬悅、珎重幸甚々、猶以不可有盡期際限候、爲如斯之御祝儀、御太刀一腰・織筋一端致進上候、此趣、可然之様御取合可預御披

露候、恐惶謹言、

「朱力字」
「天正十一年」八月一日
重時(花押)

進上 伊集院右衛門大夫殿

〔上包〕
伊集院右衛門大夫殿

重時

1437
〔義弘御譜中〕

天正十二年八月廿九日、奉 太守之高命、爲大將以率薩
隅日軍衆發於飯野欲赴於肥後州、先招諸將於馬越、而欲
定評議也、

同年九月初日、招諸將於馬越旅宿令爲評議、其條曰、

龍造寺肥前守政家憑秋月三郎種實、而與薩摩請和諸、

裁起請文寄種實、種實亦同裁起請文、遣四使贈平田美

濃守光宗之在八代、光宗亦使町田出羽守達飯野、而未

落著和平與一戰、諸將議之於臧（其）云云、

又曰、太守之病痾未平復、由是今度不發大駕、孰能

有 太守之盡兵術乎、

今日各評議曰、故隆信勢盛之時、去肥後之領地、有請和

者、今也政家漸矢竭弦絕、而請和、不去肥後、筑後之領

地者、爲謀計非心服明矣、有所到八代之四使、其中留兩

輩於八代、俾兩人與我僧差秋月待再報、而後可定成敗云

爾、

1438

〔島津世錄記〕

一天正十二年甲申、合志藏人・隈部但馬守・宇動左衛門
尉欲屬薩摩、遣使聞達于 太守義久主、由是八月廿八

日、兵庫頭忠平主率軍旅、赴肥之後州熊本、而構陣

於吉松、當此時、赤星〔割府之
城主也〕三池皆屬來、而後換陣於

高瀬、則白間野・大野・大津山・和仁・邊春・田島・

鹿子木・東郷・小代來降焉、龍造寺肥前守正家亦以添

島長門守爲質也、且筑後之蒲池某・草野宗養・星野九

左衛門尉・筑紫之秋月種實・原田伊賀守來于旗下也、

因茲 兵庫頭忠平主歸陣矣、

1439

〔正文有之〕

歸洛之儀、從上口言上趣、委細相含、柳澤〔元政〕新右衛門尉重

而指越之候、此節一廉馳走可頼入、仍太刀一腰康次、鞍

一口作、遣之、猶昭光・昭秀可申候也、

〔朱カキ〕
〔天正十二年〕九月四日

〔足利義昭將軍〕
〔花押〕
嶋津修理大夫殿

〔右ノ太刀、片傍不動ノ尊形、片傍梵字ノ彫ル、鞍ハ施栢桐山雀金具

之紋、制延徳年中、本所珍作也〕

〔義久公御譜中、天正十三年二月到來トアリ、同年ニ柳澤氏ノ事ヲ載
タリ、參照スヘシ〕

(張紙)
「此九月四日ノ正文ハ、旧御番所御文書ニ番箱中歴代龜鑑中ニアリ」

1440 「義弘公御譜中」 「此正文ハ旧御番所御文書ニ番箱中歴代龜鑑ニ在リ」

「正文在加世田來尾形彌五左衛門惟基」

歸洛之儀、從上口言上趣、委細相合、柳澤新右衛門尉差越之候、此節一廉馳走候様、對義久可申聞事、可喜入、

仍肩衣・袴遣之、猶昭光・昭秀可申候也、

〔朱カキ〕
〔天正十二年秋〕九月四日 (義昭) (花押)

嶋津兵庫頭とのへ

1441 「義弘公御譜中」

天正十二年九月四日、諸將共到着肥後八代、其翌五日、俾町田出羽守・税所新介馬越評議旨趣於秋月之達使者、使者等應諾而曰、與島津氏使僧俱兩輩歸秋月報高命、而後再宜到當地、往還十日之際、侵封疆勿放火、若亦不然、則筑後・肥前騒動、而不能和平之成謀計、勿敢違背云爾、各爲群議曰、算天運之可否、則自十一日十方暮、而非發師旅運、然則容渠之請者可也、同六日、裁返書畀兩使、所以赴歸路也、

1442 「義久公御譜中」 (義弘譜ナリ)

「正文在飯野白鳥山満足寺」

上洛之後者、依遠遠書音不輒之条、乍存無音之處、俊寛坊下向、御勇健之由承候、大慶候、然者彼方再住之際、

用腐毫候、必遂住山、下國之刻委曲可申達候、佳事、恐

く謹言、

〔朱カキ〕
〔天正十二年〕九月六日 忠平(花押)

満足寺

吟窓下

1443 「義弘公御譜中」

「上井伊勢守日帳有之」

天正十二年九月八日、使島津圖書頭忠長・伊集院右衛門大夫忠棟・上井伊勢守覺兼、立高札於肥後州、

1444 一神社佛閣并構四壁等の竹木切取事、

一諸耕作あらし濫妨之事、

一所・たひの衆ニよらず喧嘩口論いたす事、

右条々、堅令停止早、於違犯之輩者、速可被處罪科者

也、仍下知如件、

天正十二年九月八日 右三輩在判也

1445 「公御譜中」

天正十二年九月十日、發八代往隈本、寄宿於城入道一要之宅、同十一日、俾老將等爲評議曰、諸方計策用捨事、豐後陣使僧事、陣替之事等也、

1446 「圖書頭忠長譜中」

肥前州高來郡中有有馬修理大夫者、爲龍造寺山城守隆信所逼、請救於薩摩、太守義久主聞之、則去年癸未遣援兵渡于高木警衛之矣、隆信逐年逼迫者無間斷焉、故使島津中務大輔家久與同姓又四郎彰久・忠長爲將帥、以天正十二年甲申三月、渡于高來構陣於嶋原、隆信聞薩摩之軍衆有漸來增益、則催數万之甲兵、同廿四日、發來一戰將陷我陣、與我之奇兵相戰、其勢衆寡強弱實天地懸絕矣、雖然、家久・彰久・忠長已下各以必死之志、自辰至未防戰不怠、隆信之兵漸筋力倦將向敗北、見其變乘其費指揮、則衆兵競前以得勝利、自隆信至騎步斬獲敵首者三千餘員也、雖然、神代・井福・森山已下諸所未屈旗下、故四月三日、與伊集院右衛門大夫・上井伊勢守俱同船、相從來

船發棹歌、到件城邊、或放火城外村舍、或爲降伏謀、是以悉請降旗下、而後皆入我手裏矣、感其軍勞也、賜三江

・嶋原地於忠長、迄天正十五年爲其履矣、

天正十二年在肥後之際、定法度製高札、其文曰、
「上井伊勢守覺兼日帳有之」

禁制

神社佛閣構四壁等之竹木切取事、

「外義弘公御譜中ニアリ略ス」

天正拾二年九月八日

(上井覺兼)

伊勢守在判

(伊集院忠徳)

右衛門大夫在判

(島津忠長)

圖書頭在判

右之右筆者、本田刑部少輔也、

同月廿三日、從於兵庫頭忠平、發於八代寄一宿於山北、翌日廿四、到于高瀬、或破却城郭、或爲降伏之謀也、

1447 「義久公御譜中」「此正文旧御番所御文書二番箱中歴代龜鑑中ニ在リ」

「正文有之」

「前之御内書同時到來」
「九月四日付前ニアリ」

就 御歸洛之儀、輝元委曲被申越之間、重而對義久被成御内書候、抑東北國之諸卒、悉可勵軍忠旨依言上、弥東

西一統、被及御行候、然者、從豊後至防長境、自然取出、

可相妨候欵、畢竟此度被抛万事、豊州表匠作於御亂入者、

可爲御供奉同前之御忠信之由候、就其向豊筑爲御手合、

來正月頓防長兩國之諸勢、可被差渡之条、肥州龍藏寺被

仰談、被抽戰功、御當家御再興之段、偏頼被 思食旨

上意候、被得其意被加吳見、此節別而御馳走肝要候、猶

輝元・隆景・元春可被申越通、相心得可申旨、被仰出候、

恐々謹言、

〔朱力寺〕
〔天正十二年〕九月十一日

昭光(花押)
昭秀(花押)

伊集院右衛門大夫殿

喜入攝津守殿

〔忠棟〕
〔季久〕
〔天正十二年〕
「眞木嶋玄蕃頭
一色駿河守」

1448 「御文庫二番箱義久公一軸中」 「義久御譜中」

追而馬介一懸、太守江令進獻之候、可然様可預御心得候、

隨而太刀一腰進之候、誠表祝志計候、恐々謹言、

〔朱力寺〕
〔天正十二年〕九月十一日

玄蕃頭昭光(花押)

謹上 伊集院右衛門大夫殿

眞木嶋

〔上巳〕
謹上 伊集院右衛門大夫殿 玄蕃頭昭光

1449 「義久公御譜中」

「正文有之」

態令啓達候、抑去夏御使僧被指越、上意可被遂御馳走

之通、被仰上候、殊更向後之儀、輝元別而可被仰談候旨、

旁以被存本望候、此表之事、爲御入洛催、上口被及御行

之處、大友事動廻計略候事、御歸京非無其妨候、然間一

勢指下、防長兩國之者共申付、於豊筑堺目及鉾楯候、貴

國之御事改候者、至日州被成御發足、切々可被相動事、

併御歸洛御供奉同前候、於御忠儀者此節候欵、猶万端此

僧申合候條、宜預御心得候、恐々謹言、

〔朱力寺〕
〔天正十二年〕九月十二日

隆景(花押)
元春(花押)

伊集院右衛門大夫殿

喜入攝津守殿

御宿所

吉川駿河守

小早川左衛門佐

「上包」
伊集院右衛門大夫殿

喜入攝津守殿

御宿所

隆景

1450

猶々寶之河内へ御番衆勢々与差籠申、其上肥後へ忠
虎可罷立事、曾而難成次第候、諸家も兩口之御奉公
者、不被召様承候、具足之多少者可相定候欵、庄内
衆計被仰付事不致納得候、

來諭令披見候、

一寶之河内御番手之事、此間之人衆逗留可申之由承候、

兼日廿日之日數相定候之間、如其替合申候、爲御心得

候、

一此度之替之人衆、先日之御番三ツ一ツ立申候、其故者

肥後へ彈正忠可罷立之由承候、他國之出張、且遠方、

且可爲逗留候間、其用意乍不如意相納申候、難遠左右

方之御奉公候之条、如此候、

一肥後立之人衆者、菱刈へ逗留申可承合之由承候、得其

心候、近所之御人衆御立之刻者、彈正忠茂可罷立覚悟

候、

一菱刈口御番之事、三ヶ國三番被仰付候由、先日承候間、

如其分別之處、諸家之御番手無御見得候之由承及候、
無御心元候、

一寶之河内之事、御番代茂尼輕奴之御人衆も無御見得候
様承及候、其外普請等も無御沙汰候由聞え候、於如今
之御覚悟者、一定惡事可致出來候欵、愚拙忤者共若輩
耳候之間、一段氣遣存候、爲後日申入候、恐々謹言、

九月十二日

北郷左衛門入道

一雲(花押)

本田下野守殿

御返報

1451

「義弘御譜中」

天正十二年九月十三日、發於隈本陣於吉松、丁此之時、

山鹿氏憑伊集院下野守、請屬薩摩之旗下、且復有言曰、

前代之山鹿氏當日居住合志、於吾心非無疑、如之何乎、

吾報之曰、早速出質心服無貳、則前代之山鹿氏雖曰爲訴

之有旨趣、不敢許諾、以畀證狀、由此迄十四日黄昏、俾

稱宇藤伊賀守者爲質來也、於茲乎、使町田出羽守・伊集

院下野守往山鹿也、爰隈部但馬守憑城入道一要有爲訴之

事、元我之領地三郡、今也被収公三郡許山鹿一郡、是幸、

雖然伏冀欲所在隈部城邊之免田地千町許云云、諸將聞此

訴各未稱心、期後日者也、

天正十二年九月十五日、町田出羽守・伊集院下野守寄飛札曰、今朝到于山鹿近邊、謂于山鹿氏曰、以山鹿城可定薩摩陣營也、山鹿氏曰、當地三里四方妻子・童女避兵亂令散亂、以故不得招入大軍於城裏、爰城外有稱宗像之地、以彼地爲陣營者可乎、兩輩廻智計欲成和議、而山鹿氏漸以變言矣、由此兩輩請加勢之兵、是以將使八代・七浦・菱刈師旅明日到山鹿也、

天正十二年九月十六日、小代・白間野等請屬旗下致軍功也、山鹿氏未隨我言、是以出羽守・下野守宿途中言成否之際、俾稱宇藤^{一劃カ本マ、一}藤彈正者重爲質來矣、

天正十二年九月十七日、山鹿氏屢聞我言、而後應諾、由此各率守兵將進發之際變其約曰、敢不能屈旗下、故出羽守・下野守令一价報計策之所以不能也、

天正十二年九月廿一日、隈部但馬守憑城入道一要請屬旗下致忠功、以故今日一要攜稱木場氏者、爲質來格也、渠者隈部有司也云云、前日俾秋月氏使者與我使僧往筑前、今日歸來而反命曰、龍造寺氏之領地在肥後州之内者、悉以去與屬島津氏旗下、無貳心服可抽忠節之旨、裁誓紙有血判者持來矣、

天正十二年九月廿三日、隈部但馬守之弟爲質來矣、

此日忠平及島津右馬頭征久・同姓薩摩守義虎・同姓圖書頭忠長發吉松到於山北矣、先陣之軍衆發於吉松入於高瀨也、

天正十二年九月廿六日、島津右馬頭征久爲一覽敵城封疆輕進發也、諸所步卒等聞此事、追跡進者多矣、白間野氏構一陣於小代城腰在于此矣、各競進陷彼陣、而斬獲數百人也、

天正十二年九月廿七日、合志藏人馳以參陣、忠平即遂對面矣、

今日俾稅所新介・上原長門守達反言於龍造寺政家曰、去肥後州之領地、而請和平以誓紙、由是吾亦莫所疑、而應其求也、且復裁誓紙曰、政家後來守今日之堅約、勿敢違變、然則予亦不棄捐汝之起變情焉、且復大友氏與島津氏雖有讎敵之故、先是隨京都之媒介、既成和睦矣、今也忽以無可爲寇之理、於秋月氏・龍造寺氏與大友氏之和而和者、各任情意之所向者可也、

1452

「古御文書三番箱中」「善弘公御譜中ニ在リ」

起請文

一今度政家被改先非、當邦可爲幕下之由、御懇望之条、
向後於如此者、不可有變化事、

一爲豊後其外分國衆中、至政家御進退、自然雖有謀略、
聊無邪儀表裏可被致同心事、

一此節豊州へ儀絶之事、即刻雖可任其趣、京都以御媒介
一致之故、遠慮口能之事、

右条々令違犯者、

〔御譜ノ朱力キ〕
〔天正十二年九月款〕

「上井算兼日記」

九月

一日、V看經等別而申候、(伊集院)忠棟へ使進入候、今日御談合

在所如何之由申候、(義弘)武庫御宿たるへ候由也、亭主御

酒振舞候也、(忠元)驍而忠棟宿へ參し候、(忠元)新納武州・川上(忠

州(忠)なと閑談共候、(義弘)忠平公より御使給候、夕より此方へ

越着申候欵、御無沙汰候、やかて祇候可申由也、拙者

こそ早々可參之処、御使忝之由申候也、△忠棟同心ニ忠

平公御宿へ參候、即御見參也、亭主伊東右衛門佐御會

尺被申、其座躰主居武庫公・忠棟・町田出羽守・松尾

方・亭主、客居圖書頭殿・拙者・奥之山左近將監方、

新武州・川參州・猿渡越中守也、種々御會尺也、御點

心參候、主居武庫公・川上上州・新武州・町羽州・松

尾与四郎・亭主、客居麟臺・忠棟・拙者・奥之山・本

田刑部少輔・川上參州也、種々持參之御酒共候て御酒

宴也、此座果候て御談合也、町羽州・税所新介御使被

申候、各へ被仰出趣、此度御出勢各辛勞之通也、付而

者秋月媒介を以龍造寺と和平之由候、然者秋月之神判、

又龍造寺神載を以秋月迄申段、兩三使到來候、就其飯

野へ平田濃州并御使衆町羽州被差越、於彼方新武州・

川參州なと御談合共候、各和平之儀ハ無納得候、一圓

ニ御弓箭之由候、尤頼母敷被思召候、併去春之御出馬

も各太守様御進發候へてハ何篇難成之由候、就夫御

發足被成御大利無是非候、此度ハ御虫氣然々候ハぬ故、

御發足有ましく候、さてハ誰人も御發足共候ハす共閑

目なされ候する仁候ハ、近比可目出候、殊漸百日計

之用意諸軍衆へハ被仰付候欵、左候て肥州表一行可有

之事ハ御納得なく候、就夫者諸勢歸國之儀等御任可申

条、程有ましく候欵、然者龍造寺從爰御披官ニ罷成、

質人をさし上候する由申候、所領等去渡候ハぬ迄にて

此等之儀を被仰離候するハ、御所好にてなく候、其故

者、(忠良)日新様・(實久)伯圀様御代より已來、十分ニ候へぬ所

を專一ニなされ候、諸侍者無曲御和平なと、存候共、

先く彼秋月之使ニ者和平之由御返事被成、さて御當家

ハ和平ニ罷成候其日までハ、互ニ防戰大法之様候、此

度も其分たるへき由返事被申候て、諸勢者隈本邊ニ被

着合、存分之行肝要之由被思召候、但御弓筋一篇ニ、

此度御出勢日限過候共我々閉目候するなと存之旁々候

ハ、可然之由也、乍重筆度々十分之事を被指捨御勝

利之例多々被仰出候、難尽筆紙候、各上意乍勿論尤奉

存候、さてハ秋月より使者四人參候、彼兩人ハ八城へ

被召留、今兩人へ此方より使僧被指添候て、和平之儀

被申候、然ニ肥筑なとまでも差上候するなと申候ハ

ぬ処、兵儀衆無納得候、其故者、(龍造寺)隆信弓筋盛之時さへ、

肥後之事ハ御所感被成、和睦之由共被申候、況當時者

弓断矢尽たる政家、和平懇望ニ領知等進上之由不被申

候事者又々謀計迄候条、善悪弓筋たるへく候、併今一

到來聞せられ候する由、被仰渡候て可然之段定候也、

左候而各假屋へに歸宿候、

一二日、早朝馬越を打立候、軍勢道支候間、漸久木野へ

着候、

一三日、早且打立、申刻計佐敷へ着候、▽拙者腫物散々

候俣、從彼方船ニ乗候、衆中又ハ悴者なとハ陸路也、

佐敷小宿ニ地頭御酒持せ被來候、種々之儀共也、夕塩

ニ出船申候、△

一四日、朝塩ニ徳之洩へ着岸候、平田濃州より着津之由

候て使預候、▽町之衆なと御酒共持參申候、賞翫共候、

菟角候て△申刻計八城麓へ着候、▽村山舍人助へ宿申

候、亭主即御酒被振舞候、忠棟よりも罷着たる由候て

使預候、拙者も人して申入候、△

一五日、▽忠棟御宿にて寄合中種々談合共申候、△此日忠

平公着岸被成、伊集院下野守、各宿等之儀可被仰調之

由申候て、隈本へ被遣候也、此日秋月より之使者へ、

兩人ハ此方被留、今兩人ハ此方之使僧同道候て被歸、

委龍造寺之意分共可被聞せ之由、被仰理候、使町田羽

州・税所新介也、御兵儀衆之御存分尤存候、當者此方

より御使ニ兩人同心を以可罷歸之由也、併諸勢堺目へ

指懸被成、火色等顯然候ハ、肥筑隈騒以之外たるへ

く候、左候てハ何たる憤之御談合も難申調候間、彼使

往返十日計之事ハ、御行を被指延候て可目出之通、秋

之使前より頻ニ侘也、

一六日、兵儀衆差揃、濃州宿にて談合也、菟角此十一日

より十方暮にて候、然者此内ハ御働となされぬ日廻に候、をのつから十日計ハ御行可相延候条、秋之使之存分ニ被任候て可然之由也、▽左候て、御書并寄合中書狀返答なと被渡候、△

一七日、忠平御宿にて御寄合也、座躰主居忠平公・伊集

院肥前守・本田紀伊守・川上左京亮、客居麟臺・拙者

・奥山左近將監・松尾与四郎也、▽種々御會尺共也、

此日秋月之使者、此間書狀共候、届候すれとも、日州

遠方之故無其儀候、乍聊尔遲怠無是非候と候て、書狀

被持來候、趣、一和今儀頼之由共也、下緒二筋預候、

使者内田九郎左衛門尉也、此日合志殿并山鹿刑部太輔

殿より使書預候、爰元御出勢目出之由共也、着合之諸

勢礼儀承候也、△

一八日、早朝肥後表へ可被立高札ニ判仕候、其趣、

禁制

一 神社仏閣并構四壁等の竹木切とる事、

一 諸耕作あらし濫妨之事、

一 所・たひの衆によらす、喧嘩口論いたす事、

右条々堅令停止早、若於違犯之輩者、速可被處罪科

者也、仍下知如件

天正拾二年九月八日

(寛徳) 伊勢守判

(忠棟) 右衛門大夫判

(忠長) 圖書頭判

如此、右筆本田刑部少輔也、

此朝徳之洩より出船申候、此夜三角蓑之浦ニ泊候、税

所新介殿類船申候、船中物さひしく明かね候折節、せ

めて候て、薰なと焼候て旅愁を慰候へ、なと同船之

衆承候間、其をたよりニ、

梶枕夜も長月のとまり船焼香にあすの花そ先立

▽如此共申候て戲候内に、月落烏啼候也、△

一九日、未明蓑之浦を漕出候、船中破籠なと受用候て御

酒最中ニ、今日ハ無余儀由共候まゝ、

なさけのミかはせハかゝる船之内に酌も山路の菊の

露哉

なと申候に、さても故郷之山舎之菊今日さこそ、な

と々各たはふれられ候間、もたしかたたくて又、

故郷之山路の菊に誰をかもあらましかはとけふ忍ふ

らん

▽種々戲言共互ニ申慰候間に、川尻と云処ニ着船候也、

伊豆之志摩拯と云者所へ宿申候、即加悦飛彈守より使者にて、爰元へ着岸之由目出候、尤自身早く可被來候へ共、今日木原無余儀祭礼候、參詣候て只今被歸候間、馳而可被來之由也、從此方可申通処ニ着津之由被聞せ使節、祝着之由返答申候、此晚如隈本可罷通覺悟候處、鹿兒嶋衆少く被來候、武庫公・忠棟ハ何たる由共候之哉、今日ハ小川・豊福邊ニ御留之由物語候、さてハ陸路御供申候ハぬさへ候、せめて此方ニ待申候ハてハと存、税新・拙者同心ニ留候、加悦飛彈守拙宿へ礼ニ被來候、即參會申候、御酒寄合候也、△

一十日、▽看經等如恒、△從伊集院野州使者到來候、隈部(親)殿御奉公申度由被申候、其外諸方角より申來事多く候、早く隈本へ可罷越之由也、▽從夫鑣而川尻を打立、隈本へ罷着候、武庫公・忠長・忠棟此晚着せられ候、拙者宿長野惟冬之在処也、城一要より使者也、罷着候、尤自身礼被成候すれ共、忠平公御着打つゝき會尺被成候間、無是非候、先く一人ニ而礼儀承由也、△

一十一日、早朝武庫公御宿へ參候、▽即御見參也、諸方角より到來共多く候間、指寄御談合候而可然おほされ候、忠棟へ此由申合候て肝要之由被仰候条、馳而△忠棟へ

參し候、即談合衆書立、觸なされ候、其衆忠長・忠棟・新納武州・伊野州・吉利総州・比志嶋(義基)吏部・町田羽州・伊集院作州(久忠)・税所新介・吉田作州(清忠)・上原長州(尚忠)・伊集院肥州、此衆也、御談合衆數拙者書付候、一諸方角計策用捨之事、一豊後陳へ御音信之事、一御陳替之事、右之条く忠棟宿所にて談合也、▽此朝城一要・同親繩同心ニ拙宿へ礼被成候、即見參申候、御酒參會候也、太刀・織筋一預候、各地下衆・旅衆礼共承候也、此晚亭主長野惟冬ニ御酒振舞候、上原長州・税所新介相伴ニ頼候、深更迄酒宴共也、△

一十二日、▽典厩(以久)・義虎などへ御礼申候、此朝△武庫様於御宿談合也、忠棟・新武・上長・伊野・町羽・拙者也、此日城一要宿所へ忠平公被申請候、其座様客居 武庫様・忠長・拙者・町羽・伊野、主居典厩公・忠棟・一要・新武也、▽終日御会尺也、點心之時奥之山左近將監・松尾与四郎參候、地下より長野惟冬被參候也、酒宴亂舞也、奥之山・松尾鞍仕候、一要より祝物など被遣候、寄合中より一要へ太刀・織筋一ツ、持せ候也、馳而於御座中ニ一要被見候、深更ニ各御歸宿也、△

一十三日、早朝打立吉松へ陳替申候、諸勢同前也、武庫

様ハ一要ニ此朝御寄合故御遅引也、此未之刻計吉松へ着候、忠長御宿にて談合也、▽從山鹿御奉公之由頻懇望申候、伊野州被聞續候、當時合志ニ被居候本之山鹿殿ニ心置之由申候、然者早々質人さへ指出候而、此方へ一致ニ申上候ハ、合志ニ被居候山鹿方ニ心遣向後入ましき由之證文、認被遣候、吾々在判也、△此夜徒然に候▽間、衆中などに御酒共寄合、閑談候、△独居之餘ニ、月夜よし松に音せよ秋のかせ、如此所の名によせて發句思案なと候て、軍旅の愁を述候、

一十四日、▽早朝武庫様御宿ニ參候、それより忠棟宿へ參し候、△限部殿意分一要よりきかれ候て、新武・伊野まで被仰候、當時限部殿格護三郡にて候、兩郡を指上、山鹿之郡計被下、被召出候する由尤目出候、併限府ニ城近候領知千町計相添被下候様ニ御侘之由也、是者各無納得候、先々山鹿より直ニ申理事等候俟、限部之分者追而御談合可有由被仰候て可然之通出合也、宇土殿(名和顯考)・城殿より着陳祝言、自身被來候すれ共、先々繁多たるべく候間被仰述之由、同名衆にて承候、義虎よりも御使にて承候、御舟宗連(甲斐親通)よりも使書到來候、從合志殿も使預候、▽太刀・袷表一預候也、△此晚山鹿より質人

宇藤伊賀と云者指出候、就其町羽・伊野彼方へ被指遣候也、

一十五日、▽看經等如恒、各御礼共承候、△武庫様於御宿御談合也、其衆忠平様・忠長・忠棟・新武・上長・税新・吉作・伊肥・拙者也、町羽・伊野より書狀到來候、昨晚者漸中途までにて候、今朝山鹿へ懸引候、彼方御陳所之由候へとも難澁申候、其故者、三里四方之事者あかり城仕、女童取乱罷居候間、城内ニ御人數ハ成ましく候、麓ニむなかと申村候、是ニ御番衆者可召置之由申候、必竟狼藉人ニ怖候故と聞得候、此等御成敗肝要之由也、さてハ先々むなかと哉覽ニ兩人被打入被仰調候て可然之段、返事被成候、▽武庫様各談合衆へ御振舞也、それ過候て忠棟宿にて麟臺・新武・吾々閑談共仕候也、△此夜從忠棟檢にて承候、伊野より只今注進候、山鹿之事、昨日ニ口替候て不事成候、さてハ御人數被差加候へと被申候間、先々菱刈・七浦・八城までの衆明日可被遣候、如何之由尋也、尤可然之由申候、▽此夜典厩於御宿御閑談共也、拙者御酒持參申候、△一十六日、▽如恒、於忠棟宿御談合也、武庫様・麟臺・新武・拙者也、△小代(親孝)・白間野(宗徳)なとより御奉公可申之儀共

申來候、山鹿之事猶も然々之儀無之候て、伊野州・町羽州中途ニ被居之由也、彼方より又宇藤彈正と云申質人ニ指出候、▽此日内空閑鎮房拙宿へ礼ニ被來候、不在合候て參會不申候、木綿五預之由也、此晚吉利総州宿へ各御酒振舞被成、主居麟臺・拙者・総州、客居忠棟・新武・伊集院作州也、△此日新武・本田刑部少輔にて城一要へ、限部之事一要御媒介にて計策被成候、菟角事六ヶ數被申候内ニ、山鹿より与風伊野迄申事候て、無首尾之様に候、乍去御弓箭御爲ニ罷成儀候間、被聞分候て可然之通被仰述候、納得之由也、然者限部へも家を御残候する条、指出候て肝要之段、一要又々可被仰理之由也、

一十七日、▽如常、典厩拙宿へ入御被成候、税所新介たと被居合候、御閑談共也、御酒數篇參候、△此日武庫様御宿にて各打合御談合共也、宇土殿・城殿へ忠平様御礼被成候、伊野・町羽より兩使にて被申候、▽山鹿之事、番衆申請候する由申候俛、各打立候処ニ、相異候て一圓ニ御奉公仕間敷通申切候、不及力之由也、從宗連孫にて候兵部太輔出張申候由、使書にて被居候也、△

一十八日、▽觀音へ別而讀經申候、△赤星殿被來候、度々

礼ニ御座候へ共、留守にて無面談候、諸篇頼之由共也、并筑後山下蒲池被申儀共承候、其上彼表様子繪圖にて被見せ候、從限庄甲斐上総介津久礼と云処まで着陳之由、使書にて承候也、城一要礼ニ御座候、▽御酒參會申候也、新武・本刑なと礼ニ御座候也、各御酒參會候、此晚麟臺へ武庫様入御也、御座躰客居忠平様・吉利総州・拙者・松尾与四郎、主居忠長・忠棟・奥之山左近將監也、種々御會尺也、御座中、求广深水方被申上候、△今日不慮ニ限部堺目ニ諸所若衆中指出候、然処ニ敵懸候間、各辛勞被申、敵十一人被討留候、其外手負數十人有と見え候由也、新納右衛門佐へ即被仰付、頸捨被仕候、此間合志へ勸忍候三池殿、一昨日三池へ被打入由註進候之間、祝言又へ彼續見せられ候する爲、高山衆・飯野御手之衆五六人被指通候也、山鹿口爲見償之劫者なと餘多被指遣候、彼口にも矢軍なと候つる由也、

▽十九日、武庫様御宿にて御談合也、此晚忠棟へ武庫様被申請候、御座躰中座武庫様、客居城一要・奥之山方、主居忠長・拙者・忠棟・高山進士也、初鷹各御賞翫也、伊地知美作守手火矢にて被射候、

一廿日、忠棟拙宿へ礼ニ御座候、御酒參會候也、此晚拙

宿にて奥之山方・幸若与十郎など茶湯会尺仕候、△

一廿一日、武庫様御宿にて御談合也、隈部より一要を頼候て無二御奉公之由申候て、質人木場名字之者指上候、

隈府之役人也、又龍造寺と就和陸之儀、先刻秋月之兩

使ニ相添被遣候使僧、又々秋月之使同心ニ歸着候、肥

後國少も不残去上候て、和平奉頼之由也、政家永々御

當家ニ無違變可爲御幕下之段、神載を以被申血判也、

次ニ者豊後衆梁川近責寄候、彼方へ從爰御戰隔可目出之由、支而被申候、終日右之御談合共也、▽此晚典厩拙

宿へ申請候、伊集院肥前守・本田刑部少輔・上原長門

守御会尺ニ頼申候、深更まで御閑談候て御酒宴也、△

一廿二日、▽武庫様御宿にて御談合也、△明日御陣替之儀

相定候、從合志方、世上雜説共申時分候間、親にて候宣

頼いつかたへも質人ニ指上候する由也、税所新介・白

濱次郎(重徳)左衛門尉兩人を以合志へ御礼被成、御神文など

頂戴させられ候、其外条々被仰遣候也、從秋月殿書狀

預候、龍と和平之事媒介候之処、御許有忝之由也、▽彦

山座主坊より書狀預候、池田総一懸預候也、此晚忠平

様拙宿へ申請候、忠長・忠棟御同前也、奥之山方・松

尾方など被參候、御茶湯會尺申候、御閑談共也、深更

ニ御歸也、△

一廿三日、隈部殿舎弟質人ニ被參候、早且各御見參被成、

從夫御打立也、忠棟・拙者ハ諸軍衆同道申高瀬へ打入

候、武庫様・典厩(鉄虎)・薩州・麟臺、右之御衆者山北へ御

着候也、此日も足輕衆山へ追責候て、敵七八人討

取候、此夜月待候也、

一廿四日、從早且諸所之衆堺目へ被指出候て、小代下栢

まで破却候、敵少々被討取候也、武庫様を始山北へ御

一宿之諸軍衆、今日高瀬へ打入被成、忠棟拙宿へ御座

候て物語最中、武庫様御着之由候間、同前ニ武庫様御

宿へ參候、▽良久爰元様子御談合共也、△

一廿五日、▽天神へ別而讀經等祈念候、△武庫様於御宿ニ

御談合也、条數、一小代刷之事、一龍造寺和平之儀御返

事之事、一豊州御返答之事、終日此等之御談合也、從

豊州と候へ、筑後表仕合能候て、豊後衆梁川ちかく責

寄、坂東寺へ着陳候、其衆之内戸次道雪・高橋入道よ

り兩使を以爰元へ被申候數ヶ条也、題目者、豊・薩亦

御一致、御異篇無之様にとの儀也、又ハ龍へ御和平之

由傳被聞候、是非共此度龍家御退治肝要之由也、御和

睦ならハ右之兩人媒介申度之旨也、菟角當邦・龍於御

和平ニ者、豊之陳衆可曳煩之所存と聞え候由、御使衆被申候、今日御談合、小代事ハ一圓ニ被召崩候て可然之由半分、又ハ甲參と申上、先々被召出候て可目出之由半分、然者未定也、龍御返事之事者不及衆口候、

太守様御存分と申、又ハ政家既血判進上之上者、早々御和平候て、御幕下ニ被召成、肥後國不殘此度御知行可目出之由也、償、後日依時宜梁川・田尻邊までハ御所望も可有欵之出合也、

一廿六日、▽早朝龍造寺之返事可有由候て、忠棟宿へ麟臺・拙者參し候、御使稅新・上長同心仕候也、彼方にて朝食御振舞也、酒宴也、△此日典厩堺目御一覽とて御打出也、然者所々輕き人衆多々被打出候、小代城之腰ニ日間野方陣取構被居候、其陳処破却候、宮崎衆拙者倅者一番之由也、牆越之合戰共候、宮崎衆和田刑部左衛門尉・志布志衆久富伴五左衛門尉兩人にて候、立合之衆者吾等倅者なと也、數百人被討取候、宮崎衆分捕衆、中村内藏助・永山兵部少輔・丸田左近將曹・唐仁原藤七兵衛尉・山下急介・海老原外記・指宿大炊權助・永山平内左衛門尉・村岡弥介・瀬戸山藤内左衛門尉・弓削治部左衛門尉、是者被手負、刀・鎧疵三ヶ処也、拙

者倅者分捕仕候衆、加治木治部左衛門尉・谷山仲左衛門尉・鳴海舍人助二人・永峯雅樂助三人・仁田脇伊賀拯・安樂三介・山内彦四郎・佐藤三人、此外相討之衆なと多々也、勝土氣新納右衛門佐也、所々分捕之人數書載ニ餘有者也、此日當町諸口城戸之番・外野伏なと盛被成候、此日麟臺・▽平田濃州御宿へ御札申候也、△

一廿七日、▽義虎御宿へ御札ニ參候、種々御會尺共也、△昨日高名被申候人數召烈、武庫様へ罷出候、即御見參也、從夫終日御談合也、此日合志殿着陳也、武庫様被

指出候、即御酒御寄合也、此日龍造寺へ御返事被成候、稅新・上長也、肥後之事指上候由被申候間、先々其分にて御和平被成由也、武庫様より、政家今之姿ニ向後無異儀候ハ、勿論自此方御愀變有間敷之段、神載を以御返事也、豊後儀絶之事ハ、京都之御媒介にて先年御和睦候間、菟角と難被仰候、併龍・秋月分別次第ニ候、龍之事者從爰御見捨有まじき御返答也、

一廿八日、▽荒神へ別而看經申候、△從武庫様御使候、限庄・三舟之人數打立之由聞え候、爰元和平ニ罷成候之間御人數ハ不入之由候て、被留肝要ニ被思食之由也、即寄合中書狀にて留候也、此日も忠平様於御宿御談合

也、限部質人弟ニ替合候也、

一廿九日、▽忠平様より五代^(友慶)右京亮にて承候、日置越後^(忠亮)

守、我々存知申候ことく先年野心之儀候て、豊州御事も^(朝心)

御知行なと過半被召上、御面目被失候、彼人之故候歟、

然者水俣御着陳之刻喜入殿御申之儀共候哉、就夫 太

守様、御兄弟衆へ彼越御見參も候する哉、如何之由共

御尋被成候、武庫様御返事に、彼人へ御見參候処ハ

乍勿論御意次第ニこそ候すれ、豊州御事ハ、其時分御

若輩にて何事をも弁させられぬ躰に候、彼越後無了簡

迄にて失面目なされ候上ニ、所領等まで相違候、彼人

へ深々敷被恨思と聞え候由御申上候、従夫菟角候つる

哉、 太守様無御覽候而、于今其分候、先日限本にて

伊集院肥前守・新武を頼被申候而、彼越御見參之由候

へ共、忠平御事者連々御懇にて候へ共、當時ハ豊州無

余儀御事候、然者豊州へ深々敷無奉公之仁に候を、御

見參とハ有かたく候、そと御尋被成、御返事可有之由

候、又々爰元にて同篇ニ被申候間、豊州へ御尋なされ

候へハ、彼越ニ御見參ハ何と様にも御校量次第候、若

々豊州へ御見參なと候ハぬ様ニ、其故者、神文にて

彼仁向後御不快之段鹿兒嶋へ御申上候、又者最前野心

被仰懸候条々如此候由共也、然共武庫様先々御見參被

成候、さて豊州御存分等委可承置之由也、さてハ日越

へ御見參共候する哉、就夫豊州へ御尋之通共細々被仰

聞せ候、委承置候之由御返事申候、従義虎御使也、只

今水鳥到來候、可參之由也、纏而參候、座鉢主居義虎

・新武・伊肥州・同名伊与守、客居拙者・伊美・猿渡

越中守也、種々御会尺共也、此日典既御宿へ御礼申候、

城一要・加屋九郎殿同心にて拙宿へ礼被成候、御酒參

會候也、△此晚武庫様御宿へ參候、從小代質人指出御奉

公之由申候、兩人共ニ小代一家衆也、從此方之使僧ニ

打付質人指出候、進退之儀何と様にも御助預へき由也、

▽此等之御物語最中、青鷲到來候条、暫我々可罷居之由

候て御振舞也、麟臺・喜入殿・我々也、御酒宴にて御

閑談共也、△

一卅日、▽拙宿にて各ニ御酒參會候、座鉢客居平田左近將^(威秀)

監殿・伊美・吉田美・伊地知伯州、主居新武・町羽、^(馬秀)

拙者・伊野州、酒宴にて閑談也、宇土殿拙宿へ礼儀也、

御酒參會候、加悦飛彈守座ニ召出候也、△此日も堺目へ

人數不出様ニと稠差留候也、

1454

「義久公御譜中」

「正文在國分衆濱田覺兵衛」

尔來不申通候、抑肥州表之儀、被及一戰、被屬本意之由、無其隱候、然者急度祝詞爲可申越、内々使者申付候刻、蔭涼軒下國之由候条、依の便如此候、何様追而可申越候

間、令省略候、委細者申合紹藏主候也、恐々謹言、

「朱カキ」
「天正十二年」九月廿八日

（信賴）
（花押）

（義久）
修理大夫殿

1455

「義久公御譜中」

（本文書ハ「旧記雜錄後編」二九号文書ト同文ニツキ省略）

「是も九月廿八日付ノ同日同人歌」

1456

「義弘公御譜中」

天正十二年九月廿九日、小代某請降伏、忽容之、由此來

兩輩之質、共小代氏一族也云云、

天正十二年十月朔日、隈部但馬守・邊春氏自身出頭、各

甲冑持參、忠平遂對面矣、小代氏亦俾兩輩成和平之伸禮

詞也、

天正十二年十月二日、晚景、招宇土左衛門尉顯孝、進饗

應爲亂舞、所以致獻盃催佳興也、

天正十二年十月四日、扣合志藏人親重之陣門、述軍勞之禮詞、昇太刀・織物等、入座席則勸三獻、少焉、和調盛膳備之、以薦美酒、且得太刀・甲冑・織物等於吾、而獻酬之興遊欲止不能、而迄夜暗赴歸路也、

1457

「圖書頭忠長譜中」

同年十月朔日、在高瀬、而有軍務之餘力、故與上井伊勢守俱傳金瘡醫術於忠平主、始於今日徒非學此術、率多勢赴戰場者不知此術、則莫據救危急、所以傳習也、

同六日、招宇都左衛門尉、進盛膳以易牙之和調、開燕數

巡之獻酬以饑狄之旨酒、而不知更之將至于深也、

龍造寺肥前守政家已下諸土請和平屬旗下、故同廿日、自

高瀬向八代、所以歸帆也、

1458

尚々小代よりハ、質人ハはや／＼被指出候、其上今

日ハ舍弟ヲ可被指拵之由候、自身可被參事ハ、五日

之内たるへく候、

去朔日ニ隈部方被致參陳、武庫様始各被成御見參候、

其外、和仁・邊春も自身被遂抵候、無残所屬平均候、

尤肝要存候、

一從肥前モ五日中ニ兩質ヲ可指出之由、相聞得候而、其節迄者、此表江諸軍來も被相支、可被聞召合之由候、

一三船・隈庄衆、從吉松陣易之刻、不參候て、殊更至堺目惡振舞等多候之間、先々此節ハ、兩所之人衆ハ然

と可被罷居之段申通候、爲御存知候、

一小代之儀、一兩日中ニ可罷出之由候、猶巨細者追而可

申入候、恐々謹言、

〔天正十二年之〕
十月三日

覺兼(花押)

忠棟(花押)

忠長(花押)

〔上封〕

本田下野守殿

御宿所

圖書頭

伊集院右衛門太夫

上井伊勢守

1459 「義弘公御譜中」

天正十二年十月七日、田尻中務大輔鑑種忍敵路差一使曰、當時入部高尾城、然而妻子等爲龍造寺氏、稱所質所以徵捕也、雖曰不有別心、無可抽忠節之様、江之浦城當日離

龍造寺氏隨豊後下知、鑑種家來者七八十人在彼城、宜通

内略於渠等、使三池上總守向其地、則攻返之不難也、

天正十二年十月八日、爲窺封疆難易、遣新納武藏守・伊

集院下野守・山田新介・猿渡越中守於三池也、

1460 「御文庫二番箱中義弘公二卷中」 「義弘公御譜中ニ在リ」

以上

雖未得御意候、令啓入候、仍秋月種実以媒介、政家事貴

家被得尊意候、珍重候、殊御神載之趣、尤目出候、因

茲拙者以下茂爲可得貴意、以神名申入候、乍恐御同意所

仰候、仍御太刀一腰并馬一疋令進入候、誠表御祝儀計候、

猶連々可得御意候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕龍造寺
〔天正十二年カ〕十月十二日 家晴(花押)

嶋津兵庫頭殿

御陳所

1461 「義弘公御譜中」

天正十二年十月十三日、從筑後州黒木使節到來曰、豊後州軍衆襲來欲入手裏、及數个度雖曰不忘防戰、肥前援兵未到之際、不得支屬豊後之旗下、今也豊後軍衆陣坂東寺、

催秋月氏・龍造寺氏・筑紫氏、且進精兵三千於黒木、則令豊後騎步一人之不得逃去、勿敢彷徨云云、然而未知地利不利、與人和不和、故返答不一體也、

天正十二年十月十四日、依城入道一要之有佳招、往以爲閑談者也、

天正十二年十月十五日、龍造寺肥前守政家・秋月三郎種實・筑紫上野介廣門許容和平之有訴訟、欲據其祝詞、各差使節進太刀・馬、且復政家及家晴・鍋嶋飛彈守獻誓紙也、就曰豊後軍衆當日陣筑後、於此時被退治之者可乎、

有其故豊後諸將謂政家曰、先是丁發向于日州之時、會數万騎不得退去之害、其憤無所欲止、政家亦去春隆信戰死、則遺恨同懷乎、各同心、而逼薩摩軍衆速可退治、然則八代・球麻可爲其地云云、政家之家臣等聞件旨趣、雖間變心區區、大友氏匪啻亡佛神發僞誓、且復實變易多矣、是以無屬於渠之念、大友氏敵薩摩之心深厚實以明矣、今也軍衆發住國、陣筑後州、屠殺渠等者有此時也、雖曰容此言、不可令薩摩軍衆到夫地、與隈部氏同心攻責、則一人之逃去或難乎、由是各爲評議曰、發軍衆於彼地、則可迄越年、今度發軍數月之不用意、且與大友氏當時有和談無敵對、只差使者於豊後陣中、早速被退治者可也、若不容

我言、則對薩摩方爲冰炭之基也、

天正十二年十月十六日、宇佐八幡宮社人等寄一封書、開誠誦之、則曰、大友氏疎日域之風俗、親南蠻賜舌之人旨、嗜異國之邪法、無道日長、暴虐月盛、而迄神社佛閣破滅者不少、寔將及當社之破滅、今也率薩隅日之軍衆陣于高瀬、伏冀、上爲佛神、下爲人民、今度舉義兵退治惡逆之大友氏、運佛法神道興隆之謀計、然則當宮爲戰場之守護神、有勝利不足疑、書其威德者太多矣、且副以懇祈之卷數也、

天正十二年十月十八日、使善哉坊・全乘坊赴筑後之豊後陣、其旨趣云、龍造寺氏兩年以往爲秋月種實媒介、請和平迄數度、且復肥後・筑後之領地悉以去與島津氏、以屬旗下可抽無貳忠功、以故應其求矣、仍龍造寺氏・秋月氏・筑紫氏同心請陷豊後陣矣、然而無豊後與薩摩可爲冰炭之故、此地悉以爲和諧既爲平均、則可如士卒於八代曳入、豊後之帥師亦不日可開陣、若不容我言、則爲與薩摩變和睦之基、勿敢彷徨也、

同日彦山座主贈使書曰、龍造寺政家有求和諧之訴、今度所許容之、於當山何之幸如之乎哉、
同月十九日、待月之出東山、潮之滿海岸、而去當陣乘船

解纜將到八代、島津右馬頭征久亦同解纜矣、
 天正十二年十月廿四日、前龍造寺家晴・鍋島飛彈守等進
 誓紙、今度在高瀬之際、諸般繁多、而未能返書、今日裁
 誓紙、所以贈與渠等也、
 同月廿五日、揚歸鞍之鞭、軍衆亦徒不可爲長陣、故各所
 以歸陣也、

「上井覺兼日記」

拾月

一朔日、▽看經等別而仕候、各御礼なと承候也、(義弘)武庫様へ
 御礼ニ參候、衆中同心申候、皆々被懸御目候也、(忠長)麟臺
 御下ニ參、武庫様へ金瘡之醫術得御意始候也、△此日御
 談合候、小代落着之儀共也、先々押領之分者被召上、
 本領被下候而、今分ニ小代家被殘候て可然之由出合候、
(親老)隈部殿・邊春殿自身被指出候、武庫様へ被參候、即御
 見參也、甲冑進上と見得候、御酒御寄合也、▽我々にも
 礼也、太刀・百疋預候、留守にて候、對面不申候、從
 小代御礼ニ兩使指出候、(屬和)税所新介・白濱次郎左衛門尉
(重治)
 意趣被聞候、邊春殿礼ニ被來候也、白麻廿帖預候也、△
 一二日、▽如常、武庫様於御宿御談合也、△此晚(名和朝孝)宇土殿へ

御寄合也、▽座躰主居忠平様・忠棟・奥之山左近將監、
(名和)客居顯孝・拙者・上原長門守也、種々御会尺共也、乱
(高近)
 舞也、奥之山大鞍、松尾与四郎小鞍、笛養田甚丞也、
 御めし已後御着之時、加悦飛彈守御座ニ參候て御酒被
 下候也、△

一三日、▽毘沙門ニ別而讀經等仕候、△忠棟宿にて、豊後
(義德)
 陳より戸次道雪・高橋紹運使被指上候御返答也、町田
(久徳)
 羽州・吉田作州使也、条々御あいしらいの御返事也、龍
(政家)
 造寺と和平之儀、秋月媒介を以大方被仰談候、併無一
 着候条、踰落着之刻、從此方豊陳まで可被仰通之由共
 也、忠棟各々へ寄合被成、座躰客居義虎・赤星殿・新
(納志元)
 武藏守・上原長門守、主居典厩・麟臺・拙者・忠棟・
(以久)
 奥之山方也、▽種々御会尺也、終日乱舞共也、奥之山・
 松尾鞍也、笛養田甚丞也、石原治部右衛門尉狂言舞共
 申候、幸若与十郎一曲なと申候、從合志備中屋弟子と
 て笛吹者來候、一番吹候也、即忠棟さしなされたる刀
 彼者へ被遣候也、△
 一四日、如常、和仁殿礼ニ被來候、白麻廿帖預候也、▽此
(一)
 朝一要へ御酒振舞候、座躰客居一要・上原長門守・城
 外記、主居拙者・長野惟冬・奥之山左近將監・高山進

士允、種々会尺共申候、奥之山色と雑談などにて酒宴也、△此晚合志殿陳所へ武庫様御礼被成候、▽麟臺・我々も礼之志候処、能仕合と存御供申候、合志殿陳処川上にて候間、各舟より御出也、船元まで親重出合也、

先御三献也、御座客居武庫様・拙者、主居麟臺・合志殿也、三献過候て、武庫様合志殿へ被進候太刀・織物、

親重被請取候、忠長・拙者、持せ候太刀・織物打續被見候、従夫御湯漬參候、御座鉢客居忠平様・拙者・上

原長門守・松尾与四郎・川上武庫本力持大炊助、主居忠長・親重・吉田美作守・奥之山方也、種々御會尺也、御點心之

時、山鹿刑部太輔又合志殿親類衆一兩人御座ニ被參候、親重御酌之時、馬・太刀・鎧甲・織物、此等を三度ニ

武庫様へ進覧也、奥之山・石原なと狂言舞共候、奥之山・松尾・石原ニ親重より織物一ツ、被進候、合志之

大夫とて唄共申候、是ニ武庫様より織物二被下候、互ニ御酌などにて御酒宴也、夜入候て御歸宅也、△

一五日、▽如常、藏岡地頭吉利縫殿助殿、依祭礼遅參之由候て被來候也、此朝宇土殿拙宿にて寄合申候、座鉢客

居顯孝・新武・松尾与四郎・敷柳越中守、主居拙者・加悦飛彈守・八木越後守也、種々酒宴共にて閑談也、

此日松尾方・新武なと暮共うたせられ雑談共也、吉田作州にて合志殿承候、拙者所持候春山野之星粟毛被聞及候、乍無心所望之由候、輒之由申候て即進之候也、△

從肝付彈正忠殿書狀態到來候、趣者、去廿九日加治木へ下着候、早々爰元へ可被馳續之処、遠路之疲労故無

其儀候、併拙者内儀次第躰而立有へく候、先々武庫様・忠棟なとへ此段可申入事頼被成之由也、即敷祢越

中守を以武庫様・忠棟へ申候、さてへ下着候哉、目出おほされ候、爰元和平ニ成行候間、當時人數ハ御用無

之候条、しかと被居候て肝要之御返事也、此段返書仕候、▽此夜大津山殿礼ニ被來候、太刀・織筋一預候、町田出羽守殿より案内者被着候、

一六日、如恒、忠長、宇土殿御寄合被成候、參候て会尺御頼之由候間參候、座鉢客居宇土殿・新武・本郷甲斐

守、主居忠長・拙者・山田新介、種々御会尺酒宴なと候て閑談共也、從合志殿、昨日楚忽ニ拙者馬所望之由

候処、即進之候、祝着至極ニおほされ候、爲祝礼鎧甲、使節持せ預候也、馬進之候処、遮而御礼环重候、殊更

祝物送預候、乍酌召置由申候也、此日同名右衛門尉を以、合志殿へ明朝御酒可參會候、拙宿へ來儀之通申

候、明日早々可被來之返事也、從城一要使者預候、明日忠棟へ御酒寄合可有候、拙者も可參之由也、尤可參候へ共、合志殿明朝拙宿へ來儀之由兼約申候、不及是非之段返答申候也、此晚小代殿札ニ被來候、太刀・馬預候、并白間野殿同心也、鳥目百疋預候也、兩人共ニ御酒寄合候也、△

一七日、▽如常、合志殿より兩度使節預候、今朝拙宿へ寄合之由約束候つれとも、夜中よりくさ氣出合候、了簡なき由也、諸神も照覽偽ならざる通被仰述候、さてハ其分に候哉、不及是非候、御懇懃ニ被仰分之段、祝着之通返事申候也、此日麟臺御同前ニ武庫様御宿へ參候、△田尻鑑種より密々ニ使進入候、趣者、當時高尾之城ニ入部候へ共、妻子等龍造寺質人ニ召取候条、別心なく候ても、一途御奉公難成候、於心底者此前ニ相異候へぬ由共也、當時江之浦之事、豊後衆下知にて龍造寺にもはなれ居候、然者鑑種本々之内衆七八十人も、于今江之浦ニ留居候、彼等ニ内略共候間、三池上総守へ被仰談候ハ、彼方へ談合申候て、江之浦之事輒可仕返之由也、▽吾々面談ニ、巨細等鑑種使ニ尋候也、忠長御同前ニ忠平様へ金瘡醫術得御意、同醫書など申請候也、

此晚武庫様我々ニ御酒御寄合被成、御雜話共也、

一八日、藥師ニ別而祈念等仕候、宇土殿宿へ各被申請候、座艸客居典厩(忠遠)・拙者(宇土衆)・本郷甲斐守、主居麟臺・顯孝・税所新介殿也、種々御會尺、乱舞など也、御茶など參候て、各御立也、此日方角見償之爲、三池へ新武(伊集院久佐)・伊野・山田新介・猿渡越中守被指越候也、忠棟へ玆敷釜到來候、見可申之由候間參し候、編笠之様ニ候て數之釜にて候、言語道斷無類之由共各御褒美にて候、勿論御茶湯會尺也、川上(久隆)上野守殿・麟臺・拙者也、種々玩物共也、御茶無上也、忠棟手前被成候、各及薄暮歸宿仕候也、△

一九日、如常、一昨日善哉坊越着候、豊後陳へ彼方御使僧可然之由出合候間、此段申付候、▽忠棟同心申、武庫様御宿へ參候、種々御談合共也、當町五ヶ寺之住持、各々へ御目ニ懸度由、町田羽州まで被申候、町衆さへ其俣ニ被召置候する間、殊更出家衆之儀者御見參くるしかるまじき由定候也、此晚武庫様、典厩御寄合也、座艸主居忠平様・忠棟・町田羽州・白濱次郎左衛門尉、客居征久公(以久)・拙者・新納右衛門佐(久徳)・税所新介也、種々御會尺也、夜入候て各罷歸候也、此夜善哉坊其外衆中

なと被來閑談也、御酒なと參會、雜談にて慰候、

一十日、於拙宿舍志殿寄合候、座躰客居親重・税新・合

志對馬守・矢野出雲守、主居伊集院美作守・拙者・松

尾与四郎、種々戲言なと酒宴也、座過候て暮なとにて

慰也、伊作州太平記求候とて被取寄候、見申候て菟角

候処ニ、麟臺・忠棟爲談合御出也、從夫太平記一卷拙

者讀候而、各へ聞せ申候、然処、三池へ被指越候新武

・伊野なと歸之由候て被來候、彼方角物語共也、各打

合、爰元様子談合也、其衆忠長・忠棟・新武・伊野・

伊作州・上原長州・町田羽州・税新・本田刑部少輔・

山田新介・猿渡越中守、此衆也、右之衆へ夕食振舞候、

酒宴共也、夜入候て各歸被成候、

一十一日、如恒、從忠親可參之由候間參候、御座躰主居

義虎・忠親・本田刑部少輔・伊集院伊与介、客居拙者

・伊地知(重考)伯耆守・八木越後守、種々御会尺御酒宴也、

忠棟宿にて御談合之由候間、各指揃談合共也、風呂燒

せられ候条、吾々入候て慰候也、高來三會より出家衆

なと御酒持せ被來候、同安德殿より音信之使也、肴預

候、當町衆別當其外一兩人指出候、織筋一・鵜目二百

疋爲祝物持來候、

一十二日、藥師善逝へ別而祈念仕候、諸所物數付させ候、

當寺之住僧一兩人被來候而、爰元諸寺家之様子なと物

語候、御酒寄合候也、此日雨中徒然ニ候条、宮崎衆中

呼集候て、終日雜話共候、各へ御酒振舞候、茶湯なと

也、從宇土殿、雨中徒然ニ居候覽とて酒肴持せられ候、

即使者之前にて賞翫仕候、合志殿より其後無沙汰候と

て看一種持せられ候、即使者へ御酒寄合候也、從典厩

御使候、明朝武庫様へ御酒御寄合候する、參候て御会

尺頼被成之由也、△

一十三日、▽忠平様典厩御宿へ御出被成、御座躰客居武庫

様・忠棟・拙者、主居征久・本田紀伊守・奥之山左也、

種々御会尺共被成、△筑後之黒木より使者到來候、趣、

此度豊後衆取懸候処、數度防戦仕相支候へ共、肥前衆

見次無尔々候間、不及力、豊州進退ニ罷成候、然者豊

衆坂東寺ニ在陣候、龍造寺・秋月・筑紫なと御一致候

ハ、豊州衆一人も退候する儀ハ成かたく存候、哀々

御人數三千程黒木へ被指通、豊衆可討果御才覚此節た

るへき由也、就夫武庫様於御宿各御談合也、先黒木へ

見切ニ輕衆二三人も被指越候て、其見償次第軍衆可被

指通御談合出合候て、黒木之使者高山方ニ相尋被成候、

尤通路ハ輒可罷通候へとも、爰元之人數同心申候由豊州承候てハ、後日爲ニ成間敷候、それも善悪此度一途御行候ハ、不苦候へ共、未定之儀候条、誰一兩人同心ハ罷成ましき由也、さてハ先くあいしらい候て御返事可然之由候て、大方之御返答被成候也、▽志岐^(親忠)兵部太輔殿礼ニ被來候、鹿皮十枚被持せ候、城殿内衆平川殿礼ニ被來候、酒肴持せられ候也、△

一十四日、縣之士持彈正忠殿^(久御)より、爰元在陣辛勞之由候て使書到來候、即相應之返答仕候也、▽天滿宮大鳥居信寛法印より使僧預候、并書狀到來候、趣、爰元出張故音信候、天滿宮杜家一篇之儀候間、御祈禱卷數預候、自今以後崇敬可申之由也、梅花香一箱送預候、相應之致返答候也、使僧參會候て御酒寄合候也、△此日武庫様城一要陣処へ被申請候、其歸さニ忠棟ハ御立寄被成候、▽我々も可參之由候間其分に候、御茶湯会尺也、種々御閑談共也、△

一十五日、▽看經別而仕候、諸所御地頭衆・一所衆、其外衆中達各礼承候也、△龍造寺・秋月・築紫^(地)より和平御祝言之使者夜前着津也、意趣稅新・上原長門守兩人へ被聞せ候、於武庫様御宿ニ各打揃談合也、龍意趣、今

度御幕下ニ罷成、和平之儀懇望申上候処、改先非無二御奉公之段申上候故、御有免之由被^(龍造寺)仰出候、忝之由也、就夫向後別儀有ましき之神文、正家を始家晴・嶋飛^(直忠)彈守、武庫様へ差上候、▽并馬・太刀各々進上申候也、△將亦豊後衆筑後表へ在陣候、是非共ニ此度彼衆被討果候て可然候、其故ハ豊衆より龍造寺へ申候処、大友家之事ハ於日州數万騎討せ、對御當家^(備)鬱憤深重候、

龍之事も去春隆信戰死之上者、遺恨定而同懐たるへく候、肥後國何としても薩^(薩)廣衆進退候ハぬ様ニ兩家談合を以有度候、左候ハ、八城・求麻弓筋巷たるへき之由重々被申理候、依夫龍家中之者共も區々ニ雖申候、政家意分ニ、大友家之事者神慮天道をも不用、我々利さへ候へハ悞變之儀毎々候、御當家之事ハ承及候、被仰談候てよりハ向後御相異無之之由候間、遺恨をも止候て、此方頼存度通候て如此候、然者豊後之事必竟御敵一定候条、適足遠指出候時被討果候て可然之由也、

又ハ豊後之衆事討果れ候へと申候ても、薩^(薩)廣衆築後まで御打出之儀者如何候する哉、其故者、肥後之事此間噉候て存候、質人なと々候ても一向用ニ不立候、何篇彼等之衆御頼被成候ても本有ましく候、然者大向之御

人數を筑州まで申請候するとハ難申候、隈部方入魂さへ候ハ、豊後衆歸陣之事ハ一圓成ましき由共也、此日武庫様御宿にて終日御談合也、出合候処者、此度御出勢も日限有盛候、其上不知案内之人數と相交、豊後陣へ取懸候する事も如何候、又從爰越年共候する程之長陣、是又無用意にて成ましく候、殊ニ豊後とハ京都御暖にて和平之姿に候、然処ニ太守様之御意をも請られず、歴々爰元へ御座候とハ申ながら、御手色を豊州へあらはされ候する事も如何候、彼是各無納得候、然者使僧を以豊後衆へ早々陣曳せられ候て可然候、其故者、肥前よりハ豊州衆輕々と物ふかく打出候、殊ニ歴々在陳候、彼衆被討果可然之由支而申候、併大友殿(義統)へ當時被仰談之条、御同意無之候、筑州表辭退候て不引退候ハ、當邦へ隔心之基までに候之段、稠被仰渡、諸勢者早々御歸陳肝要之由出合候也、▽此晚忠長、忠棟・拙者へ御茶湯会尺被成候、此外御談合衆へハ別座にて御酒御振舞也、△

一十六日、▽此日も終日武庫様御宿にて御談合也、△秋月傳ニ宇佐八幡宮社衆より忠平様へ書狀を以被申上候、趣、大友家當時無道耳候、今分ニ候ハ、神慮破滅程有

間敷候、然ニ御當家御出張目出候、豊州御退治之御才覚肝要之由也、彼御神弓箭守護被成威徳共細碎書載也、御折橋卷數相添候也、

一十七日、▽義虎拙宿へ申請候、座鉢客居薩州・吉利総州(忠徳)・山田新介・鎌田源三郎(政英)・白濱次郎左衛門尉、主居忠長・忠親・本田弥六(親正)・拙者也、種々御會尺共申候、義虎酒肴御持せ被成候、各賞翫申候、閑談共也、此朝城一要より無音候とて酒肴被持せ候、此日秋月殿より之使節礼ニ被來候、即參會仕候、座鉢客居小御門大和守(使者也)・新武州・内田九郎左衛門尉、主居拙者・猿渡越中守也、從秋月殿太刀・馬料と候て銀子六兩預候、書狀・太刀、小御門方被渡候、柏原左近將監被請取候、小御門方より太刀・百足持せ也、自身被渡候、是も柏將被請取候也、御酒なとにて良久閑談共也、此晚忠棟於宿元御談合也、麟臺御同心ニ參し候、小代殿寄合被成候、其間ニ風呂ニ入候、從夫終夜談合共也、△豊後陣へ善哉坊・金乗坊使僧ニ明日被越候、意趣御談合候て、被仰聞条々多々候、難尺短筆、併題目者、龍造寺一兩年已來秋月種実中取にて和平懇望候、殊此度者永々御當家幕下たるへき之由懇篤候、肥筑之事此方公領として

格護之段被申候、然者被任其旨候、就其豊陣衆之事深
く敷被打入候間、秋月・筑紫・龍、其外通路之衆一致
ニ談合候て、一人も不殘可討留之由被申候、雖然豊後
と當時被仰談間ニ候処、何条篇目も候へぬに戦隔一圓
ニ有ましき由申離候、さてハ左右方平均之儀候条、爰
元在陣之諸勢先く八城邊まで曳歸候、豊陣衆之事も早
く如豊府被引退候て肝要候、若く御辭退候へ、當郡
へ御隔心之始たるへき由也、

▽
一十八日、觀音へ別而讀經等申候、此日吉利殿・山田新
介兩人、隈部殿へ爲祝礼使ニ被指越候也、并条く談合
之儀共被仰渡候、彦山座主より使書預候、趣、政家之
事度く忤被成候処、御宥免忤之由也、織筋一到來候、
此晚鹿兒嶋若衆中寄合候、座躰客居伊集院掃部助殿・
伊地知治部少輔・和田玄番助・岩永玄番助・市成掃部
兵衛尉、主居佐多宮内少輔殿・拙者・伊集院左近將監
・長谷場織部佑也、種く閑談にて御酒也、御小者四人
爰元へ逗留申候間、召寄候て、乍勿論別座にて振舞候、
御酒召出候て振舞候也、△
一十九日、▽小代殿・大津山殿・白間野殿寄合申候、座躰
客居大津山殿・本田刑部少輔・幸若与十郎、主居拙者

・小代殿・伊地知備前守也、種く閑談にて御酒也、白
間野殿ハ此方まで被來候へ共、俄ニ虫出合之由候て被
歸候也、此日秋月殿使者宿へ柏原左近將監殿使ニ遣候、
同返事申候、太刀・織筋一進之候、使者へ太刀・百疋
遣候、彦山座主へ返書并沈香卅兩進之候、是も柏將遣
候、此晚忠長御宿にて御談合也、△武庫様・典厩之御事
ハ今夜之塩ニ御出船之由定候也、此日龍造寺之使者副
嶋長門守、拙宿へ礼義也、▽不在合候て參會不仕候、政
家書狀并太刀・馬預候、書躰、今度御幕下たるへき由
懇望申候処、種実媒介を以御免許珍重之段也、永く御
愜變無之様取合頼之由也、横嶋へ御番ニ可被召置諸所
被仰付候、北郷殿・喜入殿・椋山殿・肝付殿・佐土原
衆・都於郡衆・穂北衆・高城衆・根占衆など也、此度
御出勢ニ何も遲參之所く也、△

一廿日、武庫様・典厩夜前之塩ニ御出船之由也、▽龍造寺
殿返事申候、敷祢越中守、副嶋長門守宿へ遣候、政家
へ太刀一腰・織筋一進之候、返書之趣、當家幕下之儀
懇望候故、被任其旨候、此等之祝儀承候、尤珍重之由
也、忠長御宿にて御談合也、昨日從鹿兒嶋伊地知越中
守爲御使者越着也、吾く長く辛勞故、此表之事無異儀

及靜謐候、御満足之由御礼蒙仰候也、此晚城一要より同名主計助を以承候、此間被仰談候、日來之本望之由候て刀預候、拙者不在合候て使者ニ對面不仕候、雖而一要へ返礼申候へハ、餘々何と哉覽候条、一要息親綱

へ此間無沙汰申之由申候て、市來野之粟毛進之候、敷祢越中守使ニ憑候也、長野惟冬子息へ其後無音申候と申候て、鉄放一張進之候、彼方より太刀一腰預候也、此夜乗船申候処、拙者乗候餘大船にて、塩時悪候て出船不仕候、本田弥六殿同船申候、△

一廿一日、▽塩相待候処、弥六殿手火矢にて水鳥射被成候、左様之賞翫申、酒宴などにて慰候、然処ニ馳而△塩滿來候間、出船仕候、今晚糞之浦ニ泊候、▽先日此泊ニ來候折節之事共思ひ出候へハ、青山不改様子、古人之楓橋之再宿なと存出候て、旅思を慰候也、

一廿二日、早旦糞之浦を出船候処、鱗臺より早船を以テ承候、一昨夜難風にて船餘多誤候、拙者遲着岸申候間無御心元之由也、忝之由申候、從夫申之刻計徳之測へ着船申候、税新・本刑・鎌源三郎殿、其外諸所之衆、拙者遲着船候間、無心元共おほされ候由共承候て來儀也、有馬殿（稱也）爰元へ着津之由候て、使者預候也、從此方

も進之候、義虎御酒御持せ入御候、御閑談共候て酒宴也、此夜本田弥六殿同心申候て鱗臺御宿へ參候、種々戲言共候て御酒也、深更ニ罷歸候、平濃州（平田光宗）よりも着船之由候て、預使節候、

一廿三日、如恒、地下衆御酒なと持來候、武庫様御宿へ參候、御酒にて御物語共也、然処有馬殿被參候、御酒御寄合也、それ過候て、義虎御宿へ御光儀之由御申候間、忠平様入御被成、我々も參候て御会尺可申之由虎公承候間御供仕候、御座鉢主居武庫様・義虎・奥之山左近將監、客居鱗臺・拙者・松尾与四郎也、種々御会尺御茶湯なと也、武庫様へ長嶋野之粟毛薩州より御參せ被成、御閑談にて、深行候て御歸鞍也、有馬殿拙宿へ礼ニ被來候、酒肴持せ也、不在合候て參會不申候、此日肥前之使者副嶋方、税新まで送之船歸帆させ候、中途にて自然不審之人も哉候すらん、曳付之一通頼由候間、一書認遣候也、此日從宇都忠棟書狀預候、明日此表へ越着之由也、△

一廿四日、地蔵薩埵へ看經別而仕候、有馬殿宿へ礼申候、御酒寄合也、從夫忠長御宿ニ參候て種々雜話共也、△武庫様より御使也、趣者、從肥前龍家晴・鍋嶋飛彈守神

文指上候、高瀬にてハ御繁多故無御返書候、爰元より御返答可有之由也、然者御案文等見償申せとの儀也、存分共申候、將亦爰元御滞在無御納得候、とても何たる御談合出合候ても、直ニ又御在陣等諸勢以可難成候間、先々明日渡御歸宅可有候、拙者へ御内儀蒙仰之由也、▽此日平田濃州御礼として入御候、御酒預候也、即參會申候、此晚有馬殿拙宿にて寄合候、座躰客居(時信)・平田新四郎殿・鎮貴舍弟(新八郎)・鎌田源三郎殿・敷祢越中守殿、主居本田弥六殿・拙者・平田豊前守殿也、種々酒宴にて閑談也、鎮貴より南蛮犬預候、寔々珍物之条、見物衆異于他候、義虎・麟臺御同心にて犬御覽のため入御候、薩州御酒被下候、種々御閑談共にて深更及酒宴共也、△此夜武庫様より竹下方にて蒙仰候、今日龍造寺殿へ可被遣御神文様子御尋被成候、家晴・鍋嶋へ之御神文も同前たるへく候哉、委筆者へ意見を加申せのよし候也、斟酌千万ニ候へ共、御尋之上辞退難成候て、竹下方御右筆にて候間、談合申候也、忠棟從小川書狀預候、今日彼処被着候、諸勢罷歸候条、武庫様早々御歸鞍之由申被成候、爲存知候由也、當者麟臺・拙者事者、善哉坊豊陣へ被指越候、彼一到來相待候て可然之

由也、

▽二十五日、天神へ別而祈念令申候、平田殿へ御礼ニ參候、種々御会尺共也、忠棟越着之由承候間、彼宿へと存候処、宮之原縫殿助所へ風呂之由承候間、人を進之候、至而用段之儀無之候ハ、先々旅宿へ可罷歸之由承候条、其分候、併様子等可承のため、愚弟源左衛門尉參(鎌田兼政)せ候、趣、拙者ハ就神慮之儀在所へ無余儀隙入事候、此段度々申理候、雖然無御納得之条、今迄相待申候、若者不入事にもや、左も候ハ、明朝歸宅可仕之由申候也、返答、善哉坊一到來相待候て可然おほされ候、乍去神慮之儀候間、一人誰召置、拙者ハ先々歸宅申候て肝要之通承候也、上原長州同心申候、兩人共ニ忠棟へ面談不仕、空徳之洩迄歸候、文王弟武王子成王叔父と哉覽承傳候事、感涙至極く、柳ハ緑花ハ紅のいろく、此晚忠長より可參之由候て參候、有馬殿御寄合之由候つれ共、忠棟へ礼被成候へハ、隙入事候間、今晚ハ參ましき由候、從夫拙者と御茶湯共被成御慰也、閑談共申候、△

一廿六日、▽晚塩ニ△徳之洩出船▽候、酉刻計△水俣へ着候、▽地頭古墻大炊大夫殿より使預候、其身ハ泉へ被參

「上井覺兼日記」

拾一月

候留守之由也、秣・薪なと被持せ候、海邊ニ宿仕候、亭主御酒なとくれ候、此夜古大炊大夫殿女中より御酒預候也、△

一廿七日、早旦従水俣打立候、▽山野にて破籠受用候、
 飢肥衆玉泉坊・井尻方なとへ御酒振舞慰候て、△馬越田中之大宮司処へ着候、▽御諏方へ參詣申候、大宮司御酒なとくれ候、△

一廿八日、早朝馬越打立候て三ヶ之山へ着候、

一廿九日、早朝三ヶ之山打立候、▽本庄萬福寺可立寄之由候間、其分ニ候、種々會尺也、薄暮ニ彼方打立候、戌之刻計△宮崎へ歸着候、▽中途まで衆中なと被出合候也、△

右書、當時〳〵任筆記置候間、後見嘲哂無是非候、殊更再覽不仕候条、落字等可有之候、御推察肝要候、

▽朔日、歸宅申候とて衆中各被來候、酒肴なと持來候、

諸寺家衆なと同前、

一二日、如常、奈古八幡九月之御祭礼就御出勢之儀指延

候条、此日御祭礼成就申候、拙者參詣申候、規式如恒例、

一三日、毘沙門へ別而看經仕候、瓜生野八幡御祭礼も九月者差延候条、今日成就仕候、拙者代ニ西方院參詣之由申候、海江田御伊勢之御祭礼今日にて候間、爲參詣彼方へ越候也、酉刻計御伊勢へ參宮仕候、御弊頂戴申候、神事如舊例、滴流馬見物申候、従夫大宮司処にて種々會尺申候、深更ニ彼所罷歸候、餘々更候間、（上井兼憲）恭安へ參ハ不成候て、内山へ留候、

一四日、從早朝各來候、酒肴なと持來候、參會候て賞翫共仕候、恭安よりも早々城へ可罷登之由御使也、諸人來候、見參共申候故、遲參非本懷候、驥而祗候可申之由御返更申候也、未之刻計城へ登候、種々御會釈、持參之御酒なと參候、此度肥後表之様子等御尋共候間、閑談申候、此晚中之城へ參候、御酒にて良久御物語也、此夜拙者肥後表へ乘候つる船着岸候、此夜ハ折宇迫へ留候、

一五日、早朝ねらひニ出候て、鴨一鉄放にて仕候、左共候て、船湊へ入候なと見申慰候也、此晚内山のこくとく歸候、

一六日、圓福寺・木花寺・蘇山寺銘之御酒持せ御座候、

參會閑談候て賞翫仕候、此日昨日射候水鳥老者衆へ寄

合候、終日酒宴也、各忝之由共申候て、皆之沈酔仕候、

此晚鎌源越にて候、茶湯會尺仕候、深更まで物語共也、

一七日、鎌源早朝寄合候て、從夫同心にて狩ニ立候、仕

合あしく候て、鹿一取候、

一八日、中城我々へ御寄合之由承候間、早朝參候、種々

御會尺共也、從夫拙者ハ狩之爲船より野嶋へ行候、從

豊後風呂三所持候、船元ニ候つるを鎌源一望之由候て、

撰候て被取候、不謂儀之由申候て笑候、酉之刻計野嶋

へ着船候、長命と申者會尺申候、種々之儀也、瓊酒な

と候て沈酔申候、從夫白鬚之大宮司所ニ留候、此夜狸

一取候、

一九日、野嶋佐司會尺仕候、種々馳走申候、此日狩させ

候へ共、無然々儀候、從夫伊比井へ行候、大宮司會尺

仕候、色々奔走仕候、此夜ハ假屋へ留候、恭安様より

拙者會尺之爲神九郎・蓮香加賀守など御遣候間、種々

之儀也、

一十日、正祝會尺申候、色々馳走申候、此日も狩ニ立候、

鹿三取候、拙者一射候、此夜ハ富士ニ留候、從中城役

人來候て、殊之外會尺共申候、

一十一日、此日も狩させ候、鹿一取候、飢肥と拙者領内

堺なといたまた見す候間、次ニと存候て、此夜ハ山中ニ

留候、山宿にも酒肴なと人々持來候て慰候、

一十二日、早朝打立、山境なと委見候て直ニ内山へ通候、

此暮長野より、明日恭安様申請候する、我々も勿論之

儀候、其御酒とて持來候、賞翫仕候、

一十三日、從夜前くさニ振付候て伏居候、恭安様入御候

て、くさいか候哉之由被仰候、罷出懸御目候、今日

ハ長野より申請候、我々へも恭安様御會尺別而頼由共

申候処、養性氣笑止ニ存候、先々早々御出可目出候、

養性申候て、若々能候ハ、御酒之刻可罷出之通申候

也、終日長野にて恭安様へ御會尺申上候、御歸鞍之砌、

又々御出候て、看病被成候て、臆而御歸也、各々さい

か之由申候て來候、△

一十四日、▽恭安様よりくさいか之由被仰、神九郎御遣

候、并奥より酒肴なと被下候、中城よりも御使預候、

圓福寺・蘇山寺など、此外諸人くさ尋候て來候、兒玉

新三郎夜前狸取候由申候て持來候、九比良弥右衛門尉

猪丸一持來候、△此晚從宮崎加治木雅樂助、くさ氣之由

如何之由候て被遣候、其便ニ善哉坊宮崎へ被越、傳言者不似合候へ共先々被仰候、豊後陳へ先刻使僧候、歸宅候へハ、宮崎へ越候する覚悟にて候つれとも、拙者留守にて無其儀候、此節者定而歸候らんとおほされ、被來候へとも、未歸宅候、重而面之時委可承候、併豊陣來者、無手ニ被曳候へと候事無得心候、雖然左候へハ御當家ニ隔心ニ相當候条、是非共ニ可引歸候、當時梁川へ矢を射替れ候儀候間、能く彼方を被仰調候へと支而被申候間、善哉坊梁川へ越候て彼方之儀申調、又く豊陳へ理られ候由也、從夫去月廿八日豊衆可引退由約諾候、兩使僧者被歸、高瀬より廿八日見られ候へハ、豊陳ニあたり火色見え候、それより跡之事者不知由、雅樂助へ物語候由申候也、

▽
 一十五日、看經等別而申候、安樂阿波介処にて老者中寄合候て拙者へ御酒振舞候由申候間、彼方へ行候、種々會尺共也、從夫直ニ如宮崎罷歸候也、△
 一十六日、▽早朝より拙者罷歸候として人々被來候、酒看など持來候、伊集院衆鷹師有川方、當所へ領地ニ越候として礼ニ被來候、良久鷹之儀など物語也、御酒持被來候、即賞翫仕候、西俣七郎左衛門尉御酒持來候、是も

同前、△泉長坊去三日打立せ申、鹿兎嶋へ肥後表靜謐之御祝言ニ進上申候、二三日前歸宅候間、尤海江田へ越候て御返事可申候へ共、急度拙者歸宅申候する、相待被成へき由加治木但馬掬申候間、其分ニ候、然者御返事、永々肥州表へ在陳仕辛勞申候、其故九州之事屬御幕下候、千秋万歳目出被 思召候、尤御使などにて御礼可被仰処ニ、遮而使僧進上申候、御大慶之由也、

如何様近日中參上申候覽、其刻御礼可蒙仰之通也、▽將亦寄合中より、先年京都反錢當國兩院未進之所く共候、此等之儀近く可申調之由也、谷山志广掬、是又兵庫頭殿へ、此度御供申忝之儀共御祝言、彼是直ニ參上申候て可申入之処、就御祭礼之儀急候て罷歸、背本意候由申候て、去五日進上申候、是も御返事、今度於肥後表被仰談候、御祝着候、殊ニ彼堺事能共罷成候、御満足御同前之由候、并準御旅中御望之由御物語共候つる、就夫進覽申候、是又珍重ニおほしめされ候、殊ニ御所好之模様ニ見得候、御自愛別儀有ましき由也、使(秀者)ニ御見參被成影之座に而、宮原伊賀守相伴ニ而御會尺被成由、物語申候也、鷹師大島方も御見參被成候由申候也、此晚鎌源処へ行候、御酒にて閑談共也、敷越な

と被有合候て雜談也、此日吉利殿・綾之地頭へ反錢之儀、丸田左近將曹ニ而申渡候、野久美之口之普請させ也、

一十七日、今度於海江田狩之猪・鹿、衆中達へ振舞候、

種々御酒・茶などにて閑談共仕候也、既作せ候番匠なとへも御酒ニ而慰候、此日立花之具取ニ出候、歸るさ

ニ、同名右衛門尉(兼成)可來之由、被申候間行候、衆中十人計同心申候、種々會尺也、深行まで閑談共申候、吉利殿・綾へ遣候丸田方歸候、吉利殿へ御留守にて候つる間、谷山名字之人へ申置候由也、新納縫殿助殿へ、しかとにて候間委申候、反錢一度未進候、聽而可調之由也、

一十八日、觀音へ看經別而申候、反錢未進之儀、高城・財部・富田へ泉鏡坊にて申候、都於郡・穗北へ中村内藏助ニ而申候、清武・田野へ有馬肥前守にて申候、穆佐・藏岡へ野村彦七にて申候、飯田へ書狀ニ而申候、此日大乘坊入峯候て下向候よろこひニ行候、種々會尺也、此夜へ瀬戸山大藏丞処へ留候、色々馳走共也、

一十九日、曉越ニ立候、歸るさに大乘坊粥振舞也、從夫種々會尺也、此晚柏原殿庭(有門)にて鞠也、我々ニ水鳥被振

舞候、深更まで御酒にて閑談也、此晚かこ嶋談儀所、曾井へ灌頂ニ御越被成候次ニ拙者へ御礼と候て、滿願寺まで御着也、目出之由、同名右衛門尉にて申候、拙者罷下候而可申入候へ共、此間打續御行事之由承及候間、定而御窮咽たるへく候間、態不罷出之由申候也、明朝御光儀候へ、乍聊尔御時可參會之段申候、

一廿日、談儀所御登也、先御礼茶如常、左候て祝儀ニ二百疋進入申候、食籠着にて樽一荷御持せ也、寶持院始而我等ニ見參候とて百疋持せ也、聽而御時參候て御酒也、御時過候て茶湯之座ニ申候て御茶申候、從夫又御酒也、其後點心參候而、細定院持せ之御酒なと也、觀千代懸御目候時、談儀所御持之御酒參候、御酌被成候也、觀千代ニ中紙一束・金之五明被下候、色々酒宴なとにて御歸輿被成、△

一廿一日、▽弓削甲斐介殿子息元服之由承候、類拙者名共付申候する事者對酌千万候、忠棟(伊集院)なとへ次次第被申候て可然之通再三申候、雖然頼憑之由候、彼在所へ可罷下之段被申候間、其分候而名付申候、如常三献也、拙者へ二百疋預候、種々終日會尺也、聽而彼庭にて鞠也、深行まで酒宴にて罷歸候、衆中歴々同心申候、山田新(有)

介殿忠より使僧にて候、△當年豊後來滅亡候て七廻ニ罷成候、然間六地藏戰場ニ可被立覚悟に而石塚へ用意させられ候、▽是を舟元まで下させ候て可進之由承候間、即寄々人夫申付候也、△木脇刑部祐忠左衛門尉被來候、頃鹿兒嶋へ被參候、寄合中より奈須左近將監へ書狀被遣候、拙者も連判被仕之由候て、書狀被認候而持せ也、文言者、今度御出勢候て三四ヶ國靜謐候、甲斐宗運親直何条校量共候哉、不罷出候、然者此遺恨者次法第可被相届候、併阿蘇家惟光にへ曾以御綺是有間敷由也、彼刑部、小崎へ使として被指越候也、

▽廿二日、弓削甲斐介、昨日罷下候礼と候て御酒持せ被來候、并弓削掃部左衛門尉、一兩年前子にて候者山賊仕候故、領地等召離候て寺領ニ罷居候、種々侘申候間、路次を宥免申候、頻見參申候へかしと侘候間、見參申候、此日滿願寺穆佐にて灌頂被成候、左様之御酒寄合可有候、可參由承候間罷下候、種々御奔走也、談儀処より御使僧被下候、前刻於此方馳走申候御礼也、并順智房へ鶏足釈門院進之候御礼承候、即御酒參會候也、從夫滿願寺庭にて鞠なと蹴候て慰候、又々酒宴にて罷歸候、此夜拙宿にて敷越・柏將・野大・同名右衛門尉

なと寄合候て、茶湯にて深行まで雑談共仕候、

一廿三日、從田野使者也、拙者かこ嶋へ明日參上申候哉、然者明後日狩之儀申候、輒儀候、早々明晚罷越候て可目出之由也、祝着之由返事申候、大乘坊先日下候礼ニ被來候、風呂燒せ候て若衆中餘多寄合、茶湯・碁・將碁なにて慰候也、

一廿四日、從弘曉地藏菩薩看經等申候、野村丹後守御酒被持來候、賞翫申候、鹿兒嶋へ參上打立候、大寺大炊助殿明日狩させ候て可然之由承候間、此晚田野へ着候、行司山本越後孫処へ留候、即大寺殿被來候、御酒なと參會、深行まで山物語なと申候、亭主越種々会尺共也、宮崎衆中長野談路守其外五六人、同心申候也、△

一廿五日、天氣惡候て狩不成候而、田野へ逗留申候、早朝天神へ讀經共仕候、大寺殿より使預候、天氣散々式にて狩不罷成候、笑止ニ候、さて今時分之雨にて候間、明日天氣可宜候哉、左候へ、明日狩可然之由承候也、御懇之儀承候、菟角毎々爰元罷通候ニ無沙汰ニ罷過候条、御宿所へ參御礼可申候、其刻面を以明日之儀等談合可申之由、返答申候也、當所衆中なと此方へ逗留申由候て被來候也、酒肴なと持來候、從大寺殿可參之段

承候間、礼申候、御樽とて百疋進之候、種々會積共被成候、薄暮ニ罷歸候也、夜入候て、大炊助殿子息御酒持せ被來候、前にハ參し候、尤礼として大炊助殿可被來候ヘ共、会尺之御酒ニ酌酩候間、源六殿預之由也、大寺刑部少輔殿同心也、預候御酒又者拙者酒なと參會、深更まで酒宴也、

一廿六日、此日も天氣悪候て狩不仕候、然者田野を早朝打立候て嶋戸へ着候、亭主御酒なと振舞候也、

一廿七日、早旦打立候て敷祢へ越着候、休世齋(敷祢預齋)へ參候而一宿仕候、種々御會尺共也、

一廿八日、荒神へ別而祈念等申候、休世齋又々御會尺也、拙者持せ候水鳥なと座中にて調味させられ、種々之儀共也、鑾而出船仕候て向嶋白濱へ着船候、大乘坊同船仕候、四方山之物語なとにて慰候、此日鹿兒嶋へ渡海之志候処、明朝払曉ニ御鷹狩之爲、太守様當嶋へ御渡海之由風聞候間、とても明朝出仕罷成まじきと存候て、此夜ハ白濱へ留候、大乘坊と周易之物語なと仕候て慰候、召烈候者之内、伊勢物語持合候とて見せ候、然者一二段なり共承度之由申候間、大方讀候て聞せなと候て、長夜之旅泊を慰候也、

一廿九日、當嶋權現ニ別而讀經等仕候、亭主種々會尺仕候、鑾而出船申鹿兒嶋へ參候、即鎌田刑部左衛門尉殿(殿)まで參着申候由申候、此日忠棟へ御光儀也、然者拙者

祇候之由被聞召付候、早々忠棟宿所へ可罷出之通、鎌

刑拙宿へ被來承候、鑾而鎌刑へ打付罷出候也、御座躰上座、太守様、客居兵庫頭殿・意外、新納武藏守・奥(忠元)

之山左近將監、主居圖書頭殿・賀雲、拙者・忠棟也、御汁事にて候間、於御前鶴之調味也、瀬戸口阿波介被

仕候、御使衆なと皆々平敷居より下ニ并居候て、御汁受用被申候、終日御會尺、御酒宴共也、奥左・松尾与

四郎鞍共仕候、唄者一王雅樂助也、幸若弥左衛門尉父子祇候申候て、時々舞なと也、四方山之御雜談なとにて御酒宴過候へハ、深行ニ御歸殿被成、

一晦日、早朝出仕申候、如恒例、宮崎越之水鳥廿進上申候、阿多掃部助殿にて申上候、并南蛮犬、今度従有馬(忠辰)

殿預候、餘々玠犬にて候間進上申候由申上候、即上覽被成、御祝着之由也、此日武庫様御宿へ參候、即御見

參被成、御酒御寄合被成、圖書頭殿・忠棟・本田下野(翁也)

守殿なとへ水鳥進之候也、拙者も同礼儀ニ各ハ參候、いつれにても御酒也、此晚阿多掃部助殿にて、南蛮大

殿中へめしをかれ候て可然候するやの御占させられ候へハ、不宜候条、先々御望にて候へとも、拙者飼置申候て可然之由、蒙仰候也、△

1464

追而 忠平様肥州御出勢之御□□爲御番候欵、御直へ御左右可申上候、檢御頼之由、以御使節被仰聞候事、御遣候て能候へん欵、御用ニ者立間敷候へ共、最前被仰付以仕申事候、是も惣勢御のほせ時者、御畏儀眩爰元之御番城ましと、頃自分之方へ□馬一疋所持□候ハ、□一笑ニ候、馬□取之口承及ニ御をくれ申候、無念之至候、

就肥後之儀、以先札蒙仰候之御報、雖令申候、其御納得爲承知、態令啓上候、先如令申候、續迄之儀ハ任御意、刑部太輔差登事、輒子細候、右依時儀、其後又々拙子可罷登事一圓□同敷、我等爲名代□□御供申候ハ、御私□當之時儀者、早可勝不申候而、外聞不可然候、さやう候て又罷登候ハ、無余儀必可閉目候、二重之公儀迷惑令存候、幾重ニも御侘無□題目、去年致越年盡果候、爲御存知候、就中顯孝・親賢・寛栖齋・拙子事、深甚堅約申候て歸國申候間、其首尾候之条、順逆出國可申内意

爲御分別之候、可期御意候、恐惶謹言、

〔天正十二比欵〕

霜月十五日

〔新納〕 忠元〔花押〕

伊集院右衛門守殿

〔親也〕 本田下野守殿

〔光宗〕 平田美濃守殿

1465

〔義久公御譜中〕

天正十二年十二月四日、秋月三郎種實・龍造寺肥前守政家等遣使節於鹿兒島、今朝見焉、告政家之言曰、今度以種實之媒介、和平既成、屬旗下者何幸如之乎哉、其使者久地井氏也、贈以太刀・馬・甲冑、彦山座主亦述龍造寺和睦之悦、差使者以贈太刀・織筋三端、此使者亦見焉、又秋月氏・龍造寺氏同心有言曰、薩摩諸將高瀨在陣之際、遣兩使僧達筑後之豊後陣曰、有速開陳以可歸豊後之令、然而今也屯高良山犯上筑後邊地、不正之至也、未知所報兩僧應令乎否、

天正十二年十二月六日、上使蔭涼軒此比下着、而宿千壽院、今日欲招請乎私宅、由是我先扣旅館、上使出于門外待于宿坊、吾入座席述遠來之勞、吃苦者一碗而起座矣、教川上左近將監迎、上使於私宅也、開大門灑掃以俟客之

至、義久將出緣端請入 上使、上使辭讓者匪翹再三、殆乎移刻、以故不得已而義久先入座、而後客入座以正席、與 御內書於義久、義久玆戴敷般之後、置之於座上之牀上、于時 上使退座、改以前之裝束、再進居座中、義久下緣而待前座、次衣鉢侍者稱瑞春軒伊勢因幡守弟也、次橘隱軒也、義久雖辭對座主居、而 上使強以進我、是以居對座矣、次左衛門督歲久、次伊集院右衛門大夫忠棟也、即獻盛膳、湯瀆

至三 盃酒敷巡之後、奥山左近・松尾與十郎以下鼓之舞之、不覺時移春于夕陽西山、於茲客亦歸于旅宿矣、

天正十二年十二月八日、小代下總守來于鹿兒島、今日遂參會進三獻、進太刀一腰・黃金卅兩・甲冑於我、又隈部但馬守親泰使者亦至、同見之、贈以太刀・甲冑、大津山氏・白間野氏之使者至矣、共見焉、各贈以太刀・馬也、

1466 「御文庫拾六番箱四卷中」 「義久公御譜中天正十三年ニ在リ」

熊用短書令啓、承聞、兩三年間征伐肥之六國、服于幕下、殘黨亦不全者也、依之爲伸喜悅之深旨、被差遣天王祖庭和尚、自今已後亦不違舊規、可被修隣好事所庶幾、曲折猶付于和尚之舌頭、不腆之方物、廿五 蚕碧糸五拾 太平方布五拾 進獻之、恐惶謹言、

〔天正十二年也〕
萬曆十二年甲子季冬廿又三日

大里
國上
那吳

〔朱イノ〕

謹上 鹿兒嶋奉行御中

那吳
國上
大里

謹上 鹿兒嶋奉行御中 三司官

1467 「義久公御譜中」

琉球圓覺寺獻披露狀、其文曰、
「上井伊勢守覺兼日帳有之」

頓首再拜、茲伸龜手呵冰硯、不顧其憚、擎朶雲一封、承聞、肥之六國如泰山之壓卵、湯武討桀紂吾曾聞之、大鵬之吞大龍、昔聞之而今又聞之、九萬里之外、誰爭其雄乎、塞垣草木聞威風皆偃、今也天下無敵矣、愚在遠嶋傳之聞之、欣欣然述愚懷、至祝至禱、雖輕少之至、明燭百丁獻之於殿下、宜預御披露、誠恐誠惶頓首再拜、

大明萬曆十有二年蜡月念五日
(圓覺寺) 宗長在判

伊集院右衛門大夫殿

「上井算兼日記」

十二月

一朔日、弘曉ニ行水仕候て、看經別而仕候、出仕如常、

宮崎住吉大宮司大乘坊始而被懸御目候、鎌田刑部左衛門尉殿奏者也、此朝出仕歸ニ麟臺(忠長)、鎌刑へ御出被成候、

拙者も御同前之由承候間、其分候、座躰客居忠長・新

納忠(完)・岩切三河守・幸若与十郎、主居拙者・猿渡越中(信光)・

守・亭主也、種々御会尺被成、拙者持せ候水鳥別而御

賞翫共也、新武と拙者碁一二番仕候、酒宴などにて閑

談被成、従夫各罷歸候也、新武直ニ拙宿へ御座候、折

節奥之山左近將監・松尾与四郎・道正宗与なと來候、

宗与扇子五本持せ候、従夫打續税所新介(彌和)・本田信濃守

・宗運(彌和)・幸若弥左衛門尉・大明友賢・森木右衛門尉・

瀬戸口安房介(重徳)・可丹齋(若水)など被來候、各雜話共也、碁・

將碁などにて慰候、并瀬戸口安房介へ水鳥料理共させ

申候て、各參會賞翫仕、酒宴など也、

一二日、太守様・武庫(敏心)・金吾御同心にて向嶋へ御鷹狩ニ

御出船候、然処順風なく候て、従夫吉野へ直ニ御登被

成、川上左近將監殿館にて清水衆御坂迎被仕候、吾々

も可參之由候つれとも、御狩にハ罷出す候て御酒之処

へ祇候ハ申かたく候て、不參申候、此日珠長(高城)ハ礼ニ參

し候、御酒持せ候、即參會也、去八月二日、鶴戸山法

樂ニ大脇民部左衛門尉と兩吟ニ百韻仕候懷紙見せ申、

合點之由申候、斟酌候つれとも強申候間合點也、點廿

五句之内長一、いかなる仕合にて候哉、拙者十五句之

内長一仕候、寔々覺外之儀候、新武宿へ礼申候砌、奥

之山左近將監被來候て種々閑談共也、新武・奥左・可

丹同心仕候て、不断光院へ御礼ニ參候、御酒持せ申候、

即御賞翫也、従夫碁にて慰暮し候也、△

一三日、▽一番鳥ニ起候て毘沙門へ看經申候、△出仕如

常、中書公御次男東郷殿ニ御定被成候、其御祝言御申

也、使東郷左近將監、御太刀・御馬・千疋進上也、拙

者御前へ罷出取成申候、奏者吉田作州也、二階堂安房

介湯之浦地頭役被仰付候、其御祝言被申上、▽奏者伊地

知伯州(重秀)、折着にて樽二荷・三百疋進上也、持參之御酒

即御賞翫也、△御盃安房介頂戴被仕候、子息三郎次郎官

途之事望申上られ候、帶刀長ニ被任候也、▽是も召出之

御酒被下退出候也、東郷左近將監殿拙宿へ被來候、今

朝之祝言と候て百疋持せ也、二階堂安房介被來候、是

も同前、伊集院掃部助殿繁昌被成候由候間參し候、御

息へ祝礼迄二百疋進入候、金吾公御宿へ參候、即御見

參被成御酒也、從夫阿多掃部助殿・幸若与十郎など同

心候て、有川長門守殿へ礼申候、種々會尺共也、此日

珠長・宗運同心にて拙宿へ被來候、御酒參會候、折節

松田左近兵衛尉來候て、狂言舞など仕、酒宴共也、△

一四日、▽兵庫頭殿へ御寄合之時各出仕候へとて、早朝之

出仕へ無之候、於御對面処武庫公御寄合被成、御座鉢

主居 太守様・金吾公・橋隠軒・忠棟、客居武庫公・

豊州・拙者也、種々御肴にて御酒也、白鳥など參候て御

賞翫共也、奥之山・松尾与四郎鞍仕候、御點心之時本

田紀伊守御座へ被參候、深更まで御酒宴也、豊州者始

而當年御參上とて、御太刀・百疋、折肴にて樽二荷御

進上也、其御酒之時、豊州御酌被成候、祇候衆何れも

通之御酒被給、△此朝秋月殿・龍造寺殿より使者被懸御

目、政家より意趣、此度種実媒介以屬御幕下候、千秋

万歳目出候、其御祝言也、▽書狀忠棟へ付狀也、勿論披

露書也、御太刀・馬・鎧甲進也、使者久地井名字之者

也、奏者税所新介也、御見參候までにて候、御酒など

へ不被下候、彦山座主よりも右之御祝言申被成、御太

刀・織筋三端進上也、此使も御見參也、△秋月殿・龍造

寺殿より被申候趣、各高瀬へ在陳之刻、豊後衆至筑後

表着陣候、早く可被引退之由、兩使僧にて被仰理候、

于今高良山へ相支、上筑邊へ相絡候、右兩使へ之御返

事など何様ニ被申候哉、于今相支候事慮外之由共也、

▽此日川上上州、紹巴之千句之註本持せられ候間可書

写之由申候て、借用仕候、上包ニしのゝは草と計畫付被

成候て預候、洩すなよ、との儀にやと推量申たる迄候、

一五日、出仕如常、種々之儀共出合候、不及書載候、出

仕歸ニ麟臺御宿へ御同心之由候間參候、先刻進入申候

水鳥御振舞也、座鉢主居忠長・新武・鎌刑・長谷場

筑後守、客居拙者・伊地知備前守・猿渡越中守也、種

々御会尺無申計候、道正宗与今朝於殿中拙者へ内儀申

候者、當時上使御下着にて、千手院へ御宿被成御逗留

候、拙宿へ御礼可有候、殊ニ伊勢因幡入道殿より書狀

被相添候、左様之儀も直ニ御渡有へく候条、彼是入御

可被成候、いかゞ候する哉之由也、何と様にも御校量

次第之由申候、然処宗与拙宿へ來候て、今日上使御礼

可有之通今朝申候つれ共、餘天氣不艶候間無其儀候、

追而入御候する、先々伊勢因幡入道殿書狀届被成候由也、即披見申候、(繪殿書)蔭涼軒 公儀爲御使下向被成候、舍弟瑞春軒爲衣鉢侍者御供被成候、諸篇頼被成由之文言也、宗与へ御酒寄合閑談共申候、此晚新武・長谷場筑・和田玄番助同心ニ被來候、暮にて慰候、從夫夕食參會候、深更まで雑話共也、

一六日、早朝談儀処被懸御意候、先日宮崎へ御越候処馳走申候、御祝着候、其御礼承候、食籠着にて御酒御持せ被成、參會候て賞翫申候也、從夫出仕申候、種子嶋(時式)武藏守被參候、取成申候、此日上使御寄合之由候て、各支度之爲急罷歸候、先太守様上使御宿へ御礼被成、忠棟・拙者御供申候、御釘鎌田源(金巻)三郎也、馳而上使門迄出合被成、内へ被請成候、御茶にて御立被成候、さて上使打迎ニ川上左近將監被參候、御内御縁之際まで案内者也、乍勿論從惣門より御入候、太守様御椽迄御出合被成、對面処へ御奏者候、御椽にて良久御礼候て、太守様前ニ座敷へ御入候、馳而御内書御渡被成、太守様御請取なされ、御頂戴候て、文箱之蓋ニ被請候を其俣上座之押板之上へ御置被成、從夫 上使立せられ、最前之裝束を被替、常之御支度被成、御座へ御出

候、又太守様椽まで御出御奏者被成、御座躰客居蔭涼軒・衣鉢侍者、是者伊勢因州御舍弟にて候、次橋隱軒、主居 大守様、色々御酌酌と見え候へ共、上使被謙、對座ニ御座候、大守様御次左衛門督殿(繪)・忠棟、馳而御膳參候、御湯漬也、三日まで參候、御酒一篇參候て御膳者くたされ、御菓子參候、御盃五度御礼被成、上使御始被成候、さて御點心參候、如常御麵參候て、添着參候て御酒也、三度御礼被成、太守様御盃始被成、次饅頭、同副着參候て、御酒數度御礼候て、餘々興覚様ニ候つる間 上使御始也、從夫金吾、金吾之盃瑞春軒、彼盃 太守様へ參候、次羹、同添着參候、御礼數度不果候而左衛門督殿始被成、從夫 御使僧へ參候、從夫御膳へくたり候て、押物參候、奥之山左近將監・松尾与四郎など被仕候、地下乱舞衆何れも被罷出候、今度御酌へ誰たるへく候哉、若衆などへ候へて笑止之由、太守様奥之山へ御戲言共候、然処稅所新介御銚子持出られ候、奥山爰ニ御酌こそ見立申候へ、只新介可宜候由被申候条、さてへと候て其分ニ候、御盃御礼不事果不興之様に候、かゝる処に 太守様、已後御着被進候すれ共、御下戸之由候間、迎も御數參ましく候、

先御着と候て、聽而自身御はさみなされ候、無了簡上

使御着請取なされ候間、勿論御盃も御始候、寔ニ御礼

不事果、興醒様に候処、太守様御才覚乍不存、珍重

至極さうに祇候之衆申居候、左共候て御酒終候へハ御

立被成、吾々も時に召出之御酒被下候、御座様子見合、

事延候へぬ様にと被仰付、次之間ニ堪忍申候也、△

一七日、▽出仕如常、向嶋へ御鷹狩ニ御渡海被成、武庫公

・金吾御同心也、△此日麟臺御宿にて御談合也、忠棟・

親貞(本田)・勿論御亭主・拙者・使伊地知伯州・税所新介

也、条書、新田宮御造營之事、三船・隈庄御弓箭之事、

豊後陳筑後表へ相支候事、此等也、御造營之儀へ、先

々來春杣入肝要候、菟角御弓箭ニ被取合、御造營可難

成候、又三船・隈庄へ御弓箭之儀も、阿蘇(惟光)にハ對せら

れぬ事とハ有なから、從彼方同心なくハ阿蘇家にも御

弓箭之外有ましく候欵、然者彼御神領も定而荒終候す

る処多々候する、彼是御鬮可然もやと出合候也、豊後

陳相支候事ハ、先日於高瀬出合候所者、彼陳所を引退

間敷由被申候ハ、彼方より儀絶之心底候間、日向口

より豊州へ御打入可然之由大略定候、併此方御使僧へ

御届被成候て肝要之由、出合候也、

一八日、出仕如常、小代殿(親孝)出仕候、即御見參被成、加三

猷にて退出候也、御太刀・黄金卅兩・甲鎧進上也、奏

者町田出羽守、隈部殿(親孝)より使者被上候、御太刀・甲鎧

進上也、使者上覽被成、大津山殿(家總)・白間野殿(宗徳)も使被上

候、御太刀・馬進上也、▽何も使者御覽被成、從武庫寄

合中へ承候、村田殿長(経平)被失面目被罷居候、然者福昌

寺眞幸へ御使僧にて、今度御參上之刻、彼御佐頼被成

由候キ、又々爰元にて頻ニ頼之由候、最前彼方被召失

候御談合等被聞せ御申有かたき儀ニ候へ共、餘々福

昌寺より御憑候通被仰候、難黙止候条御申被成候、殊更

老者役之人たと如此御嘸被成事不淺おほされ候へ共、

御申被成由也、伊地知伯州にて也、如此御申之儀ハ乍

勿論可達、上聞候、武庫公御存分者、御眞実被召直候

て可然思召候哉、又福昌寺支而御頼之由候間、難黙止

思召候て御申候哉如何之由、定而御尋被成事も可有之

候、爰を承度通、武庫公御使五代右京亮(友徳)相尋也、武

庫公ハ其執御定者曾無之候、只福昌寺頻ニ御申故如此

候間、其分、上聞被成候て肝要之由也、昨日金吾公拙

宿へ御礼として入御候処、不罷居合候て所存之外之由

申述候、豊州も先日拙宿へ御入候、御礼申候也、伊地
知右京亮殿へ礼申候、種々會尺也、田代備後守・養輪
丹波守など有合候て會尺共也、此晚宗与來候て物語共
申候処、町田五郎太郎殿・本田大炊大夫殿・同弥六殿
被來候、種々雑談共にて酒宴也、△

一九日、▽早朝宗与來候て、上使拙宿へ御礼ニ御光儀之由
申され候、何と様にも御意次第之由申候也、聽而入御
被成、杉原十帖・梶井宮殿歌被遊候扇子二本預候、衣
鉢侍者より、聖護院殿歌被書候扇子五本、又五本預候
也、御酒不執合ニ參會申候、宗与案内者仕候也、從夫
出仕申候、△一昨日御談合之儀、伊伯・税新被申上候、
彼表已上御不知案内候間、能く御行等定候へて御圖共
被仰かたく候、武庫公などへ猶く御談合肝要之由也、
豊後陣相支候事、是又高瀬より彼方へ被仰理候時之御
談合無御存知候条、其人數校量次第、使僧又く被指遣
候ても可然候するや、菟角御談合法第之由也、新田造
營之事、此前隅州正宮御造營之時三原遠江守加判役にて
然と指當、彼校量までにて御造畢候、猶も如此▽御精
入候へてハ迎も事成間敷之様ニ被思召候、能く御談合
專一之由也、此日武庫公御宿へ御礼被成、如恒例御三

献にて、其外種々御會尺之由也、此日上使御宿へ參候、
宗与案内者ニ頼候て參候、衣鉢侍者門迄出合被成候、
上使庭まで下合被成、奏者めされ候、從夫座中へ參候、
今朝拙宿へ御光責忝之由共申候也、食籠着にて御酒進
獻申候、即御賞翫被成、肴共御自身被下候、又こなた
よりも進覽申候、愚弟源左衛門尉召烈候、宗与内儀共

申候哉、知せられ候て、召出御酒被下候也、衣鉢侍者
へ御樽とて百疋進之候、祝着被成由也、御暇申候時、
又庭まで下合御礼候也、総藏主者門まで送被成、此日
山川津より琉球へ渡船候其船頭、津留讚岐拯同心候て
來候、如恒例御印判申請候祝言とて百疋持來候、并取
次前にとて三十疋相副候、船頭見參候て御酒吞せ候也、
小代殿拙宿へ礼ニ被來候、即參會仕御酒寄合候、太刀
一腰、刀相添預候、矢野出雲守案内者申候也、内衆一
兩人召出御酒申候也、此夜本田信州被來閑談候、宗泊
と云者ニ一二番舞いわせ慰候也、白間野殿より使預候、
并片色一預候也、△
一十日、出仕如常、伊地知伯にて被仰出候、村田右衛門
佐之事、福昌寺忠平御侘被成候、各存たることく阿多
源太・平野新左衛門事生害させられ候、然ハ村田科之

儀ハ、晴候する事者永劫難有候、併此候ニ召置候する事も如何ニ被思召候、深々數血判なとさせられ、七十五日欵又ハ百日とも日敷を定させられ、其内ニ何たる失も見え候ハすハ被召直、何方へも田數おとり之在所などへ繰移され候て可然候、餘々無余儀筋目之仁にて候間、如此ハ如何候する哉、老者中へ御尋被成候由也、菟角不輕義候間、各御返事難申上候、併科ハ永々晴ましく候、然共、と被仰事候間、能々御思惟被成、向後御爲ニ罷成候する様ニ可目出之由、忠長・忠棟・親貞・拙者同前ニ申上候也、從夫武庫公・喜入攝州(季心)・新納武州へ此等之儀御尋被成、各御意次第之由被爲申候也、三船界御弓箭之事も必竟御着陣たるへく候間、來春被見合御談合候する由相定、▽此日度々御鷹野御振舞之御返報、麟臺御宿にて各申候、御座舩上座 大守様、客居忠平公・賀雲・川上左近將監殿・拙者・鎌田刑部左衛門尉、主居喜入攝州・麟臺・本田紀伊守・阿多掃部助、深更まで御酒宴、御閑談也、各持參之御酒御酌被申候、吾々も其分に候、奥之山方・松尾方など較仕候、種々御慰共也、△

一十一日、▽出仕如常、武庫公御暇御申被成、△村田殿事

者、昨日之如上意福昌寺へ被仰出候、御弓箭之事ハ、彼境など被見合候て、御陣なと候ハ、をのつから來秋ニ可罷成候欵、又其内宗連(甲斐親直)など申出義も候ハ、隨其左右自然ニ御行可出來候、先々來春ハ新田宮御造營肝要之由也、▽毎年御舊例之御千句正月十六日にて候キ、近年二月廿五日被成候、此五六ヶ年者御弓箭ニ付無其儀候、來正月廿五日ニ御興行之由相定候也、此朝稅所新介にて歲暮之御祝言等乍次申上、御暇申候、明春早々可參上申之由也、市來湊唐船祝物とて、皿・茶椀・唐紙、松本佐渡守・瀬戸口与介被持來候、彼兩人此船喫衆也、小代殿へ、御旅宿へ參候て御礼雖可申候、日州へ御急用共候て卒ニ出船申候とて、使者にて申述候、太刀一腰・織物祝礼計ニ進之候、乗船候処ニ、義虎より御使書預候、先日宮崎使書并馬被遣候、拙者此方へ參候由被聞せ候、留守中兼約之鷹進入申候、御祝着之義也、船中へ稅新酒着預候、聽而彼衆へ參會候也、平田新四郎殿(増宗)も船にて御送候間、同御酒參會候、然処ニ拙者假屋まで大津山殿使者被來候、銀子百目預由也、只今出船之案、追而御礼可申述之由、敷祢玄番助にて使者宿へ申遣候、此晚加治木へ着船候、假屋ニ

宿申候、別當城へ罷登由申候間、肝付藏人殿まで罷着候通申候、(肝付兼寛)聽而霜臺より使者預候、今夜城へ可罷登之由可承候へ共、かこ嶋より沈酔にて參候由被聞せ候条、明朝早く迎可預之由也、假屋御酒振舞候也、

一十二日、曉起候て藥師如來へ讀經等申候、肝付藏人殿霜臺より使ニ下也、早々可罷登之由也、別當御酒持來候、藏人殿と參會、賞翫仕候、聽而城へ登候、(兼寛)彈正忠殿出合被成、祝着之由也、座躰客居拙者・肝付小五郎殿・谷山志广介・肝付藏人殿、主居霜臺・同名半五郎殿・同名備前守殿也、種々慰勸之會尺也、拙者樽持せ候、賞翫共也、京邊雜談共也、池田房一懸・加賀染着物一、數寄之座ニ出候、筒梳一通京土産として預候也、

肝付藏人殿へ宿申候、彈正忠殿聽而礼ニ御座候、御酒持せ被成、藏人殿も會尺被申候也、從其親類衆達へ酒着など持せ候て、銘々ニ礼申候、從夫聽而打立候、板井手迄一家衆皆々送ニ被出候、藏人殿御酒持せられ候間、各寄合賞翫申候、此晚宮内桑幡へ着候、種々會尺共也、拙者も御酒持せ候、賞翫共被成候、大圓坊御酒持來也、

一十三日、桑幡左馬頭殿三男拙者頼被成候、元服之由也、

數度斟酌申候へ共類ニ承候条、無隔心間之事候俣、任其儀候、祝言之三献等如常、拙者へ太刀・百疋預候、拙者も當時指合候刀一腰旨則進之候、種々祝言之酒宴共也、又大圓坊など御酒持也、政所殿へ礼申候、娘子拙者へ見せなされ候間、祝計ニ百疋進之候也、是にて

も種々着にて御酒也、拙者も御酒持せ候、此晚下井まで打立候すると仕候處、大雨降來候間、桑幡殿類ニ留被成候俣、此夜ハ留候、女中、よき仕合之雨にて拙者留候とて御よろこひ共被成、如此あそはされ候、かへる人したふ心を知雨にうれしさそふるけふの暮

かな
かたしけなさのあまりに拙者、
出かたミけふもやすらふ中宿り雨やあるしの心なる

らん
かくのことく申て候へハ、そこに有合人々、皆うたよ
ミ酒のミなどしてなくさミ也、留守式部(兼寛)太輔殿御酒持
せ被來候、即參會申賞翫仕候、此夜ハ謂捨などにて深
更まで雜話共也、

一十四日、早朝打立候、下井通候處、厚地六弥太と申者御酒持出候て振舞候也、此日も雨降候、前ニ氣色之杜

を過候時分、

晴ぬへきけしきもやとて立よれハ雨に増れる杜の下
露

如此ひとりこち候、此晚漸財部上井之村ニ着候、日光
神正祝御酒持來候、見參候て賞翫仕候、彼上井之門之
事、先祖爲秋(上光)已來北郷殿より預候て格護之地ニ候、然
ニ兼兼上井より永吉へ移替之刻、菟角候て北郷殿被取
返候、三ヶ年已前又々拙者沙汰仕返、格護申候、彼百
性始而拙者來候とて、種々會尺共申候也、

一十五日、從弘曉看經別而申候、從夫打立候、下河路丸
山名字之者処にて破籠なと受用申候而、急候間さり川
へ着候、是又拙者喫之処にて候間、種々會尺也、祝言
とて百疋くれられ候、内之者共迄にも引手物也、

一十六日、犬山狩仕候、福永宮内少輔殿被聞付、狩人召
烈被來候、寄合候て犬山仕候、猪一取候、福永殿柴屋
にて御酒振舞也、從夫川舟にて内山までくたり候、野
村刑部少輔殿元本寺ニ被出合會尺也、從夫又舟にて宮
崎へ着候、

一十七日、歸宅候とて諸人被來候也、

一十八日、觀音へ別而讀經申候、(鎌田繁忠)鎌源へ久無沙汰申候と

て行候、種々肴にて酒也、從夫鎌源同心にて歸候処、

大門坊被來候、御酒持せ也、即見參申賞翫候、衆中少
く揃候て、來正月廿五日御千句調之盛又ハ椀飯などの
儀等談合申候也、此晚柏將(柏原有間)・鎌源・上井右衛門尉(兼成)へ、
鷹有方より到來候間振舞候也、御酒にて深更まで閑談
仕候也、△

一十九日、從宇土殿(名和顯孝)使僧預候、今度御出勢之刻於所々同
陣被成、被仰談事本望之由也、▽中紙三十帖預候、此晚
風呂燒せ候て入候而慰候也、吉利殿より無沙汰被成候
由候て使者預候、猪肢ニ預候、拙者留守中ニ、從椀山
殿犬山にて取せられ候とて丸猪にて預候、此等之爲御
礼、野村彦七使ニ參せ候也、△

一廿日、加治山佐藤於高瀬度々高名共申候間、名字免許
仕候、其祝言とて拙者へ御酒振舞候、▽當城内之衆各會
尺ニ被來候、種々酒宴共也、此晚和地川原へ新町立さ
せ候、彼処未見候間、爲見償下候、敷越・柏將(野村)・野大
同心申候、谷口和泉拯宿へ留候、種々會積仕候、紹巴
千句之注本など見候て閑談候、

一廿一日、谷口和泉拯種々會尺申候、それ過候へハ、躰
而打立、海江田へ越候、祖三寺坂迎也、

一廿二日、朝狩ニ登候、從夫圓福寺へ參候、種々御會尺共也、此夜内山へ留候、

一廿三日、諏訪講頭前にて候間申付、兒玉隱岐拯処にて勤させ候、木花寺座主にて候条御出候、(上井兼盛)恭安様も御下也、終日酒宴共也、此晚恭安様へ參候て留候、

一廿四日、払曉ニ起候て看經等申候、從夫恭安御會尺被成、庄内上井之門之百姓、先日行候礼・歳暮、彼是ニ來候、見參申候、從其御崎觀音へ參候、并寺へ礼申候、

種々御會尺共也、從是御伊勢へ參宮申候、加治木宮内少輔子名付候へと申候而呼候間、彼処へ行候、先三獻如常候て名付候、其次今村与一左衛門尉子も名付候、種々會尺共也、宮内少輔祝言とて百疋くれ候、拙者前より弓・二張祝儀までニ遣候、宗琢・源左衛門など申殿所町衆御酒など持來候、夜入候て如内山歸候也、△

一廿五日、▽從義虎旧例之御慶書被下候、并先日鷹進獻申候、御自愛之由共也、其御報相應ニ申候、將亦△昨日從比志嶋(義基)吏部(義基)菱刈軍兵衛尉を以承候、頃高來神代殿より使にて候、八城へ當時滞留共候、然へ有馬殿(備也)より到神代色々狼藉之儀共候、就夫先々歸宅候て、子息などを此方へ置候する由候、拙者へ尋之爲使者にて候由也、

返答、比志嶋殿如御存知、最前質人ニ八城まで召寄候事へ、不紛吾々校量に候、併八城へ平田殿候上者、彼方へ御談合候て可然候するを、鹿兒嶋よりも遠く候當國まで態尋候処、納得不申候、雖然肥前も當分者御幕下ニ屬候上者、別儀有ましく存候、何と様にも平田殿へ談合被申候て肝要存候、吏部御校量にへ過まじき由申候也、▽此日如宮崎罷歸候也、

一廿六日、早朝より罷歸候とて各被來候、宇多能登守方息元服之由懇望候、再三斟酌候へ共、頻承候間任其儀候、種々雜掌共被構候、祝言とて百疋持せられ候、拙者も喉輪一進之候、此次和田左近將監息・坂本千兵衛尉息名共付候也、新納殿より歳暮之使者賜候也、此朝者鎌源ニ而茶湯會尺也、柏將・拙者也、

一廿七日、從高城・財部歳暮之使者也、金剛寺歳末ニ御登候、御酒御持せ也、參會賞翫申候、滿願寺此外諸出家衆卷數持せ御座候、御酒・御茶など各預候也、銘々ニ御酒參合候也、社家衆・百姓など如恒例歳暮ニ來候、相應ニ見參申候、從吉利殿歳暮之御使者也、善哉坊も歳暮ニ被來候、即參會申候、

一廿八日、看經別而仕候、此朝も出家衆少々歳暮祝言ニ

被來候、綾より使者也、(盆助) 桃山殿よりも歳暮之使預候、

曾井よりも同前、曾井より昨日比志嶋源右衛門尉にて

承候、趣、一兩日前赤江之者、隼鷲取候をさし取候、

拙者鷹師來候て、此方之鷹之由申候、尤早々可被遣候

へ共、所望ニ被思さ由也、拙者返答、輒御事候、互ニ

如此鷹などの儀ハ有事にて候へ共、今年者兵庫頭殿・

義虎へ鷹進覽候て、是一計所持候間、彼鷹之事者可返

給候、來年取せ候する鷹を、必先一可進之由申候也、

就夫別之鷹を居させられ、是を此方へ召置候へ、頻ニ

拙者鷹之事ハ、御所望之由也、又返事申候、趣、拙者

鷹之事ハ、昨日様子申分候へ共、其上被召置候するハ

不及是非候、別鷹をこなた給候者望なく候候、返進由

申候て、中馬名字之鷹師へ見參申、御酒寄合、返候也、

一廿九日、歳暮衆あまた被來候、都於郡・飯田・木脇・

本庄などより使者也、永峯・細江よりも同前、從曾井

拙者鷹居させ返預候也、中村内藏助最前より意趣被聞

候、彼仁まで居させられ、聊ななされたる由承候、又

内藏助までとて、爰までハ互ニつかひ込候鷹ハ返被成

候、爰よりハ返預間敷由也、さてハ其分ニ承候哉、不

及力、彼鷹之事も、御所望とて被召置候ハ、不及是非

候由申候キ、別之鷹を居させられ候処、無納得候迄に

て候、先々又々御居させ候間、月追と申、先々此方へ

繁置候、(繁) 明春御面之時分御談合可申由申候也、就夫今

よりつかひにかし之鷹返給ましき由候候、不及力候、

此方へ曾井之鷹來候するハ何時も可返進候、拙者鷹之

儀ハ返預ましき処ハ御校量次第之由、返事申候也、諸

寺家へ歳暮祝言、拙者ハ腫物氣然々なく候間、同名右

衛門尉代ニ頼候也、

一晦日、從清武歳暮之使者也、和知川原今町之者共來候

也、吉利縫殿助殿歳暮之礼ニ御座候、御酒參會申候也、

1469 三郎次郎忠隣歳久猶子

天正十二年甲申十六歳而爲猶子、自出水移于祁答院也、